

講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5

南講武草田遺跡

1992年3月

島根県 鹿島町教育委員会

講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5

南講武草田遺跡

序

ご存じのよう鹿島町講武地区は、数多くの埋蔵文化財のあるところとして知られていますが、この地区で圃場整備事業が計画され、工事実施に先立って埋蔵文化財調査を実施してまいりました。

昭和63年度には、南講武での圃場整備事業に伴ない、南講武草田遺跡の発掘調査を実施いたしました。調査では弥生時代の終わり頃から古墳時代の初めにかけての墳墓などが発見されました。このお墓に大量に供えられた土器から、近畿地方の人々がこの講武地区を訪れていたことがわかり、この地が古墳時代にいたる大きな歴史の一こまに位置付けることができたように聞いております。

関係者のご協力を得、こうした貴重な調査例を現地の地下に保存できたことは、まことに喜びにたえません。この記録をとおして、先人の労苦に思いをいたし、私達の明日への展望を開きたいものと思います。

終わりになりましたが、この南講武草田遺跡の調査をもって、講武地区県営圃場整備事業に関する発掘調査は終了いたしましたが、長期間にわたる調査にご協力いただきました土地所有者の方々、ご指導いただいた島根県教育委員会をはじめとする関係各位に厚くお礼申し上げて、報告書発行のごあいさつとさせていただきます。

平成4年3月

鹿島町教育委員会

教育長 袖本重幸

例　　言

1. 本書は、鹿島町教育委員会が実施した講武地区県営圃場整備事業に伴う南講武草田遺跡の発掘調査の記録である。
2. 遺跡は、島根県八束郡鹿島町大字南講武424-3、425、432-1、434-1に所在する。
3. 調査は、昭和63年11月9日から平成元年3月17日まで実働91日をかけて実施した。遺物整理は調査と平行して開始したが、大量な遺物のため、平成3年度までの4年間断続的に行った。調査から整理までの体制は以下のとおりである。

事務局　鹿島町教育委員会教育次長 山本林市、青山一春、曾田 稔
同　社会教育係長 曾田 稔、青山俊太郎

調査指導　田中義昭（島根大学法文学部教授）

石井 悠（松江市立第二中学校教諭、調査当時）

勝部 昭（島根県教育庁文化課課長補佐）

鳥谷芳雄（島根県教育庁文化課主事、調査当時）

調査員　赤澤秀則（鹿島町教育委員会主事）

調査補助員　石橋淳一、佐藤雄史、宮本正保

作業員　袖本富至、石橋静枝、石橋積枝、石橋寿子、曾田芳子、中村美代子、古瀬玉子、古瀬智恵子

調査協力者　吾郷雄二、稻田信、内田雅己、瀬古諒子、中村明夫、西尾克己、原俊二、原田敏照、守岡正司

遺物整理参加者　中村暢夫、朝山千穂（以上町立歴史民俗資料館職員）、青山善之、石橋淳一、岡 泰道、小笹恵子、川上美智恵、杉田ますみ、瀬古諒子、瀬田明子、曾田秀徳、丹羽野輝子、松山智弘、山本幸二

4. 調査にあたっては、土地所有者袖本義弘、袖本陽治、袖本富至、佐野富士夫の各氏には終始多大なご協力をいただいた。また、松江農林事務所耕地第一課にも協力いただいた。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

5. 報告書の作成にあたっては、以下の方々に有益なご助言をいただいた。記して感謝の意を表させていただきます。（敬称略）

足立克己（島根県教育庁）、置田雅昭（天理大学）、亀田修一（岡山理科大学）、川原和人（島根県教育庁）、久保智康（京都国立博物館）、澤野啓一（東邦大学医学部）、白石太一郎（国立歴史民俗博物館）、鈴木敏則（浜松市博物館）、申 敬澈（慶星大学校）、昌子寛光（松江市教育委員会）、椿真治（岡山県教育庁）、平野芳英（八雲立つ風土記の丘）、広江耕史（島根県教育庁）、松本岩雄（島根県教育庁）、柳田康雄（福岡県教育庁）

6. 遺構の略称は次のとおりとした。

SD—水路、溝　　SX—墓壙・土器棺　　SB—建物　　SK—土坑

7. 遺構・遺物の時期については、今回暫定的に草田形式を設定して説明した。第Ⅳ章第1節を参考されたい。

目 次

序		
I. 調査の経過	1	DE-3区土器溜り 46
II. 位置と歴史的環境	2	F-3区土器溜り 51
III. 調査の概要	4	C-3・4区土器溜り 54
1. 第1調査区	4	D-5区土器溜り 54
2. 第2調査区	6	E・F-2区土器溜り 58
3. 第1調査区	6	E・F-4区土器溜り 59
土層	6	G-6区出土遺物 59
SD01上層水路	11	H-2・3区土器溜り 62
SD01下層水路	11	H-5区土器溜り 64
SD02	15	D-4区上層出土遺物 68
SD03	18	その他の地点出土遺物 68
吉備系遺物	22	4. 第2調査区 71
土器溜り	26	第2調査区出土遺物 71
SX01・03	26	IV. 小 結 73
SX04	30	1. 出土遺物・時期 73
SX05	31	2. 土器溜り 78
SX06	32	3. 搬入遺物 78
SX07	32	4. 墳墓群 79
SX08	36	5. 水路 80
SX09	37	出土遺物観察表 82
SX10	39	
SB01	40	
SB02	40	
SK13～17	42	
SD05	43	
CD-4区土器溜り	43	

挿 図 目 次

図 1 鹿島町位置図	1
図 2 南講武小廻遺跡・出土土器	2
図 3 南講武草田遺跡と周辺の遺跡	3
図 4 南講武草田遺跡調査区配置図	5
図 5 1区平面図	7~8
図 6 1区土層図	9~10
図 7 SD01上層水路実測図	11
図 8 SD01下層水路実測図	11
図 9 SD01出土遺物実測図(1)	12
図10 SD01出土遺物実測図(2)	13
図11 SD01出土遺物実測図(3)	14
図12 SD01出土遺物実測図(4)	14
図13 SD02実測図	16
図14 SD02出土遺物実測図(1)	17
図15 SD02出土遺物実測図(2)	18
図16 SD03実測図	19
図17 SD03出土遺物実測図(1)	20
図18 SD03出土遺物実測図(2)	21
図19 SD03出土遺物実測図(3)	22
図20 吉備系土器実測図	23
図21 土器溜り出土状況平面図(1) F・E区	24
図22 土器溜り出土状況平面図(2) E~C区	25
図23 SX01・03実測図	27~28
図24 SX03出土遺物実測図	29
図25 SX04実測図	30
図26 SX05実測図	31
図27 SX06実測図	33
図28 SX06出土遺物実測図(1)	34
図29 SX06出土遺物実測図(2)	35
図30 SX07実測図	35
図31 SX08実測図	36
図32 SX08出土遺物実測図	36
図33 SX09出土遺物実測図	37
図34 SX09実測図	38
図35 SX10出土状況断面図	39

図36 SX10出土遺物実測図	39
図37 SB01出土遺物実測図	40
図38 SB01実測図	41
図39 SB02実測図	42
図40 SB02出土遺物実測図	43
図41 SK13～17実測図	44
図42 SD05実測図	45
図43 CD-4区出土遺物実測図(1)	47
図44 CD-4区出土遺物実測図(2)	48
図45 CD-4区出土遺物実測図(3)	49
図46 CD-4区出土遺物実測図(4)	50
図47 CD-4区出土遺物実測図(5)	50
図48 DE-3区出土遺物実測図(1)	52
図49 DE-3区出土遺物実測図(2)	53
図50 F-3区出土遺物実測図(1)	55
図51 F-3区出土遺物実測図(2)	56
図52 F-3区出土遺物実測図(3)	57
図53 F-3区出土遺物実測図(4)	58
図54 F-3区出土遺物実測図(5)	59
図55 C-3・4、D-5、EF-2区出土遺物実測図	60
図56 EF-4、G-6区出土遺物実測図	61
図57 土器溜り出土状況平面図(3) H-2・3区	62
図58 H-2・3区出土遺物実測図	63
図59 土器溜り出土状況平・立面図(4) H-5区	65
図60 H-5区出土遺物実測図(1)	66
図61 H-5区出土遺物実測図(2)	67
図62 H-5区出土遺物実測図(3)	68
図63 D-4区上層出土遺物実測図	69
図64 その他の地点出土遺物実測図	70
図65 2区平面図	71
図66 2区土層図	72
図67 2区出土遺物(1)	72
図68 2区G-1出土木製品実測図	72
図69 草田各期遺物変遷図(1)	74
図70 草田各期遺物変遷図(2)	75
図71 草田各期遺物変遷図(3)	76

I. 調査の経過

鹿島町講武地区は、島根半島部有数の水稻耕作地帯であり、町全体の水田面積270haのうち、183haを占めている。このうち約半分については昭和30年代に区画整理事業が行われたが、依然として排水、道水路網に不備な点が残されており、同地における圃場整備事業の実施は関係者の強い要望であった。この要望のもと、昭和59年度から講武地区県営圃場整備事業が133haを対象として開始されるにいたった。

一方、この事業計画地内には、点々と遺跡の存在が知られていたため、関係者のたび重なる協議を経て、昭和59年度から以下のような発掘調査を実施してきている。

名分塚田遺跡第1次調査（昭和60年1月）

名分湯戸遺跡群発掘調査（昭和61年2～3月）

名分塚田遺跡第2次調査（昭和61年6～7月）

講武地区遺跡分布調査（南講武草田遺跡、南講武大日遺跡、昭和61年10～12月、国庫補助事業）

講武地区遺跡分布調査（講武川流域条里制遺跡、昭和62年11～12月、国庫補助事業）

北講武氏元遺跡発掘調査（昭和63年4～8月）

昭和61年度の講武地区遺跡分布調査事業によって、南講武草田遺跡を確認、昭和62年度の同事業により北講武氏元遺跡を発見した。協議の結果、昭和63年度中に北講武氏元遺跡の調査は松江農林事務所からの受託事業、南講武草田遺跡調査は鹿島町の単独事業として実施することとなった。

南講武草田遺跡の発掘調査は、昭和63年11月9日に着手したが、予想を上まわる遺物が出土し、調査期間を延長して翌平成元年3月17日まで実施した。これにより、弥生時代末前後の墳墓群が検出されるなど、貴重な成果をあげた。

出土遺構、遺物の重要性、調査区外にも遺跡が広がっていることなどから、取扱いについては協議の結果、当該地での圃場整備事業は水田面の出来高を高くする設計の変更をしていただき、工事によって遺跡を傷つけることがないように配慮いただくこととなった。

この協議が整った後の8月5日、現地説明会を開催し、約60名の参加を得た。

この後、遺跡は再び埋め戻された。



図1 鹿島町位置図

II. 位置と歴史的環境

島根半島のほぼ中央に位置する講武盆地は、面積180haの水田を有しており、半島部では持田川津平野とならぶ広い耕地面積を有する。この盆地は、谷奥から流れ出す講武川によって作られた肥沃な地味により、古くから水稻耕地として格好の条件を備えていたものと考えられる。

南講武草田遺跡は、この盆地のほぼ中央部の南寄りの扇状地に位置している。

この盆地をめぐっては、縄文時代早期から中期にかけての佐太講武貝塚¹⁾が知られており、これは現在の佐陀川沿いに開けていた潟湖をそれぞれ南と西にひかえた立地であり、こうした潟湖からヤマトシジミなどの魚介類を採集し、周辺の山野に鳥獣や堅果類を求めていたものと思われる。

弥生時代前期には、日本海沿いの砂丘地に古浦砂丘遺跡²⁾が成立し、引き続いて講武盆地西端に位置して佐太前遺跡³⁾が成立している。また、北講武氏元遺跡では、縄文時代晩期の遺物が出土している。さらに弥生時代のうちには、この盆地から少し離れるが「恵曇陂」⁴⁾の南岸の山ふところに銅鐸

^{えとものつつみ}
2、銅劍⁵⁾を埋納した志谷奥遺跡がある。再び講武盆地内に目を転ずると、弥生時代中期の遺物を出土した名分塚田遺跡⁶⁾、弥生時代後期から古墳時代前期の南講武大日遺跡など、点々と集落遺跡の存在が明らかになりつつある。また、南講武草田遺跡の近くでは、四隅突出型墳丘墓の可能性のある石列を検出した南講武小廻遺跡⁷⁾が知られている。

古墳時代には講武盆地をめぐる丘陵上に数多くの古墳が築造されており、この時代までに盆地内の開発が進んだことを示している。特に名分地域には、名分丸山古墳群⁸⁾、奥才古墳群⁹⁾、鶴鱗山古墳群など前半期にさかのぼる古墳群が、北講武地域には、石棺式石室の講武岩屋古墳¹⁰⁾や、須恵器子持壺を出土した向山古墳¹¹⁾など後期古墳が多く分布する傾向がある。

これら以外にも、横穴墓が多数知られており、古墳時代後期の段階には現在の集落の原形ができあがるものと考えられる。

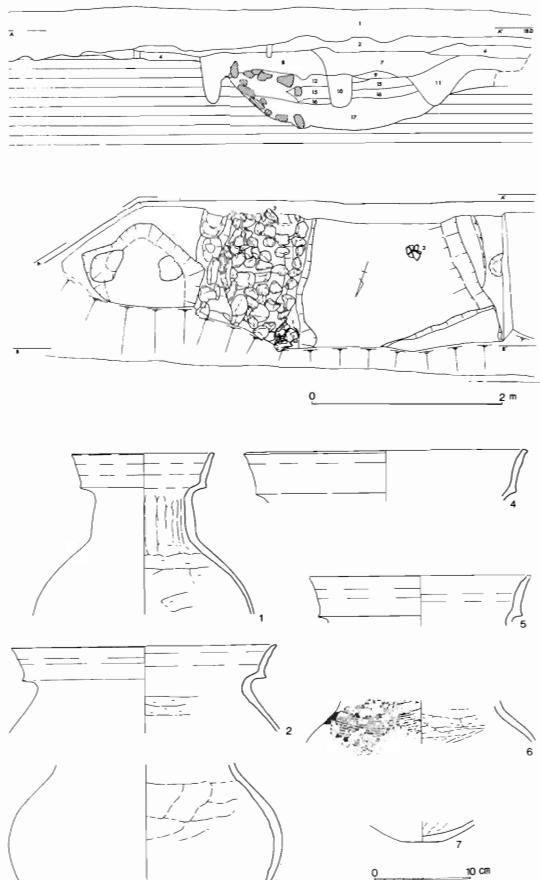


図2 南講武小廻遺跡・出土土器

1. 南講武草田遺跡
2. 佐太講武貝塚
3. 古浦砂丘遺跡
4. 佐太前遺跡
5. 志谷奥遺跡
6. 奥才古墳群
7. 鶴瀬山古墳群
8. 面目古墳群
9. 锥ヶ崎荒神古墳
10. 向山古墳
11. 中尾山古墳群
12. 藤山古墳・藤山遺跡
13. 堀部古墳
14. 岩屋古墳
15. 多久神社裏古墳群
16. 南講武小廻遺跡
17. 北講武氏元遺跡
18. 南講武大日遺跡
19. 巖廻横穴群
20. 寺の奥古墳群
21. 寺の奥横穴群
22. 惠谷横穴群
23. 清水の奥横穴群
24. 名分塚田遺跡
25. 的松古墳
26. 秋葉山古墳群
27. 御津中の津古墳
28. 御津貝塚横穴群
29. 御津茶畠横穴群
30. 名分丸山古墳群
31. 狐堀古墳
32. 寺尾横穴群
33. 尾坂古墳群

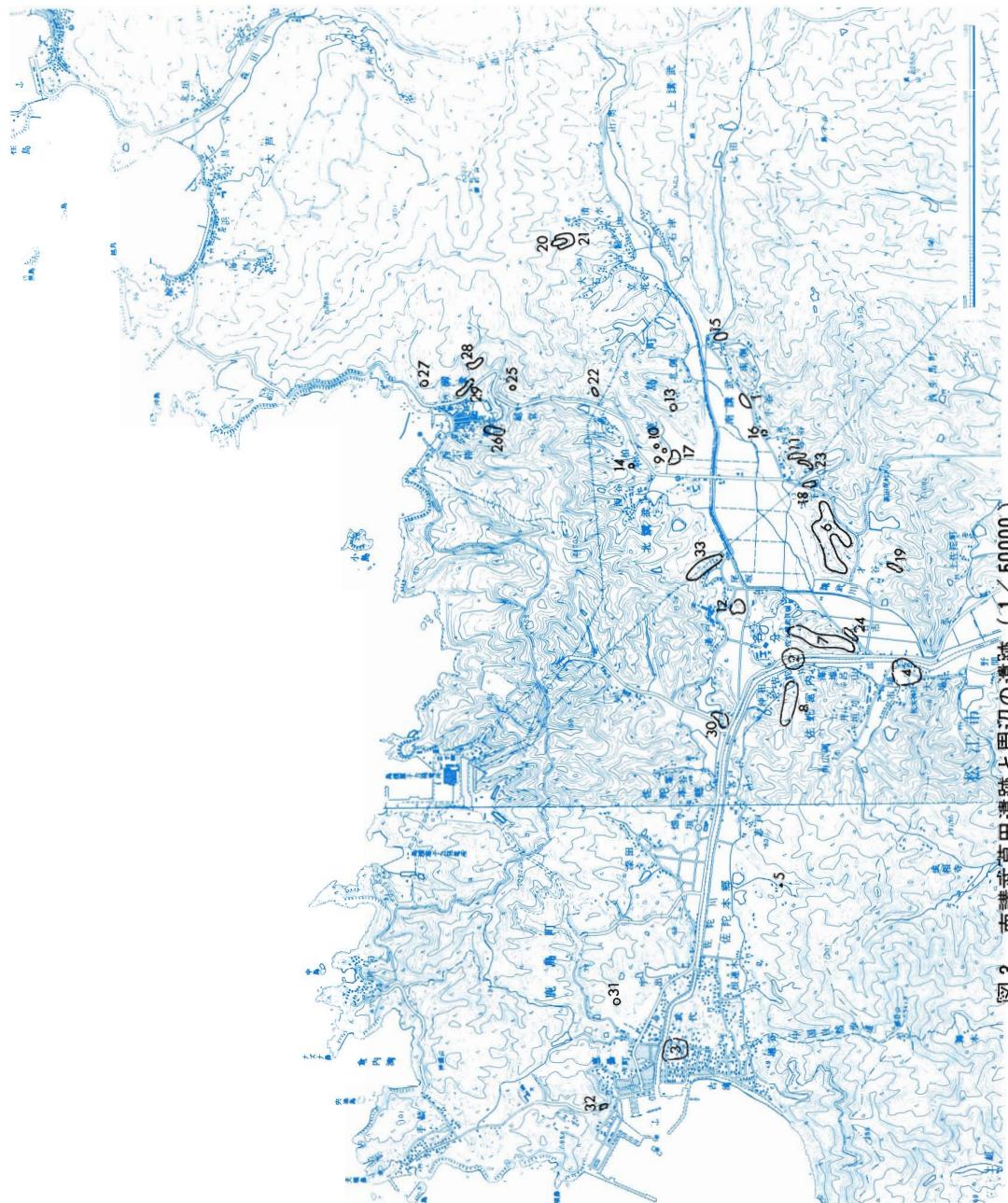


図3 南講武草田遺跡と周辺の遺跡 (1/50000)

III. 調査の概要

昭和63年度、南講武草田遺跡の調査をもって5年間7次にわたる講武地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査は最終年度を迎えていた。同遺跡は、昭和61年度の講武地区遺跡分布調査で弥生時代末から古墳時代初頭にかけての遺物をかなりの密度で包含する層の存在を確認しており、これについて発掘調査を実施したものである。

遺跡は、講武盆地の南辺に位置する扇状地上にあり、周辺の標高は19~20mである。この地点に東西30m×南北12mの第1調査区、東西20m×南北5mの第2調査区をそれぞれ設定し、講武地区遺跡分布調査での知見にもとづき、包含層にいたるまでの土砂を重機で除去して調査を開始した。1区では4m区画の方眼を設けた。

1. 第1調査区

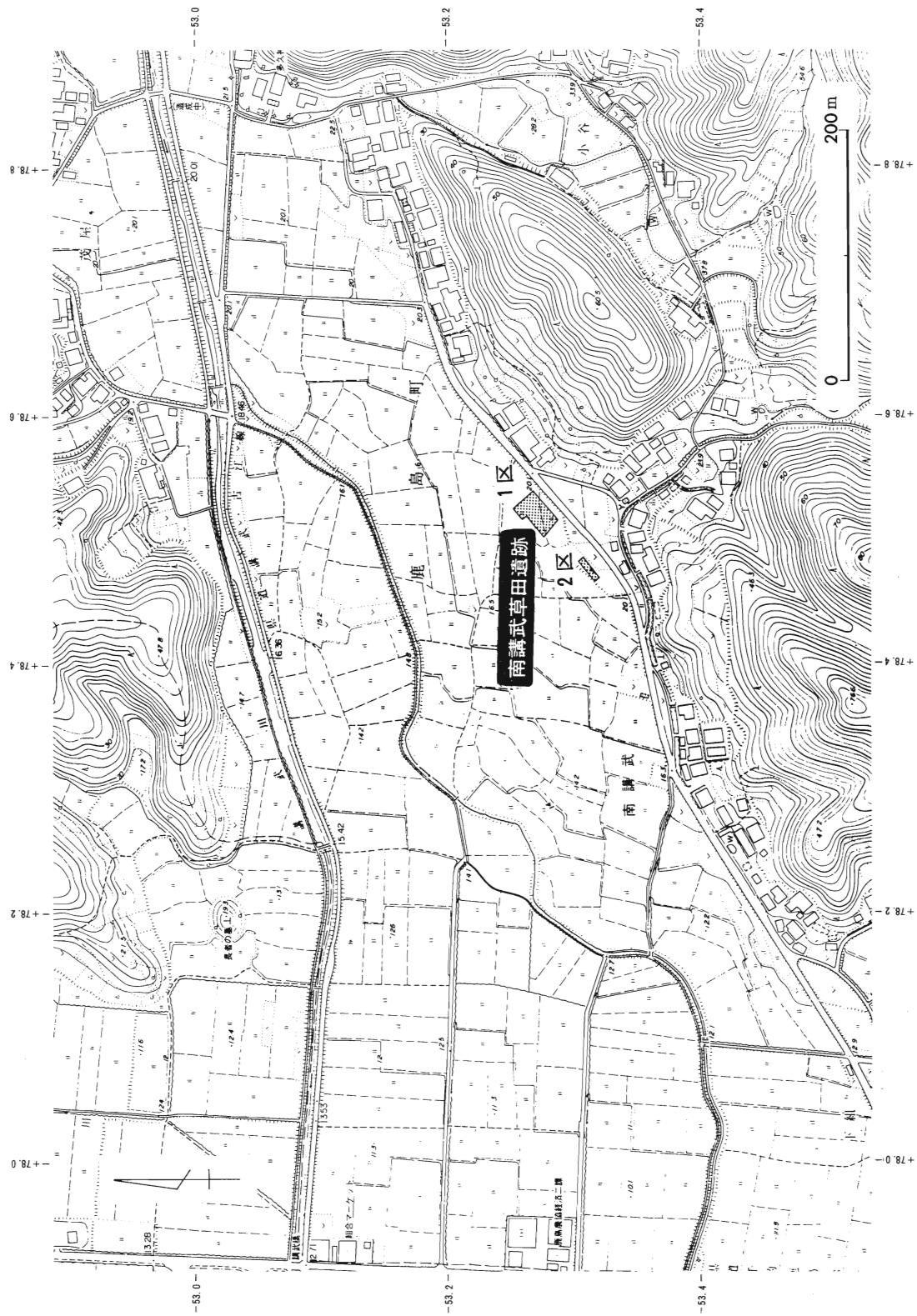
まず調査区南東隅で古墳時代後期の水路（SD01）を検出。上下2層に分かれることを確認。直近に位置し、なだらかに降ってゆく丘陵裾部に水路をめぐらせ、水田に給水していたものと考えられる。

次いで調査区全面を覆っていた礫層を除去してゆく過程で、調査区西辺沿いに古墳時代前半期の水路（SD02）があることを確認し、さらにその下層にも水路（SD03）を検出した。調査区を覆っていた礫層は、これら水路を埋没させた洪水によってあふれたものであった。SD03は幅4~5m、深さ約1mの非常にしっかりとしたもので、一直線に延びることから、計画的に掘られたものと考えられる。これら3水路はいずれも大量の砂礫によって埋没しており、その除去に難渋した。

また、SD02、03検出の過程で、これら水路西側に近畿地方庄内式の遺物を多量に含む特異な土器溜り（H-5区）を検出、遺跡の特異性が明らかとなった。また、SD02を中心として吉備地方から搬入された小形壺形土器などの吉備系土器も見つかり、特異性が強調されていった。

SD02、03からあふれた礫層の下に黒褐色の遺物包含層が存在する。この層の掘削に入った途端、足の踏み場もない状態で遺物が出土しあじめ、調査方法に苦慮した。冬季の調査でもあり、土器溜りの下層に存在が予想された遺構の精査ができず、とりあえず4m四方の区画ごとに遺物を図化しながら取り上げ、その後遺構の検出につとめることとした。この過程で、比較的地盤の固かった地点で、土器溜りの下に木棺墓（SX01、03）があることが判明し、ある程度のまとまりをもって検出されていた土器溜りは、その下にある木棺墓に伴うものであることがわかった。また、これら土器溜りの遺物中にもH-5区ほどの密度ではないが近畿庄内式の遺物が含まれており、この遺跡の特異性はますます強まっていった。さらにこの土器溜りの中からは、庄内式期の遺物に混じって朝

図4 南講武草田遺跡調査区配置図



鮮半島製と考えられる瓦質土器も検出された（CD－4 区土器溜り）。

このようにして遺物を取上げ、遺構の精査に入ったが、この時点ですでに出土遺物はコンテナ150杯を超えており、調査費予算の組替えを行って対応せざるをえなくなっていた。結果的に遺物はコンテナ約250杯に達した。

精査によって調査区内から、8基の木棺墓、1基の壺棺、掘立柱建物、竪穴住居各1棟を検出した。まとめると弥生時代後期のものと考えられる木棺墓3基、弥生時代終末の木棺墓3基、時期の不明のもの2基となる。掘立柱建物は弥生時代後期、竪穴住居は古墳時代前期のものである。調査の最終段階を迎える、町教育委員会では、遺跡の重要性に鑑みて、圃場整備事業の設計変更を求ることとなり、調査区内では土器溜りの状況から、さらに木棺墓など遺構の存在が予想されたが、その時点までに検出していなかったものの調査を行い、それ以上の遺構精査は行わなかった。よって、調査区内の墓壙数は確定したものではない。

2. 第2調査区

こちらの調査区では、第1調査区での調査に時間をとられたため、当初予定していたような調査は実施できず、G1からG3までのテストピットを3か所設定し、1区同様の遺物包含層が存在することを確認するにとどめた。

3. 第1調査区

土 層

圃場整備開始以前の地表は標高約20mで、遺構検出面の標高は18.5m前後である。土層は、遺物包含層まで基本的に水平に堆積している。遺構検出面から現代の水田面まで粘質土と砂礫の層がサンドイッチ状に堆積し、繰り返される水害にしばしば水田面を埋没されながらも、耕地として現代まで維持されてきたことが観察できている。調査区を設定する以前に水田耕作土、床土を除去していたので、土層図の上端は旧地表を示してはいない。

遺構直上に堆積する礫層は、前述したようにSD01～03の水路が氾濫した際の土砂で、調査区全面を覆っている。この下層に黒褐色の土層があり、この層が遺跡の中心をなす弥生時代終末から古墳時代初頭の遺物包含層となっている。

後述する遺構を検出した基盤層は、礫を混える淡緑灰色の粘質土で、比較的安定した地盤となっている。

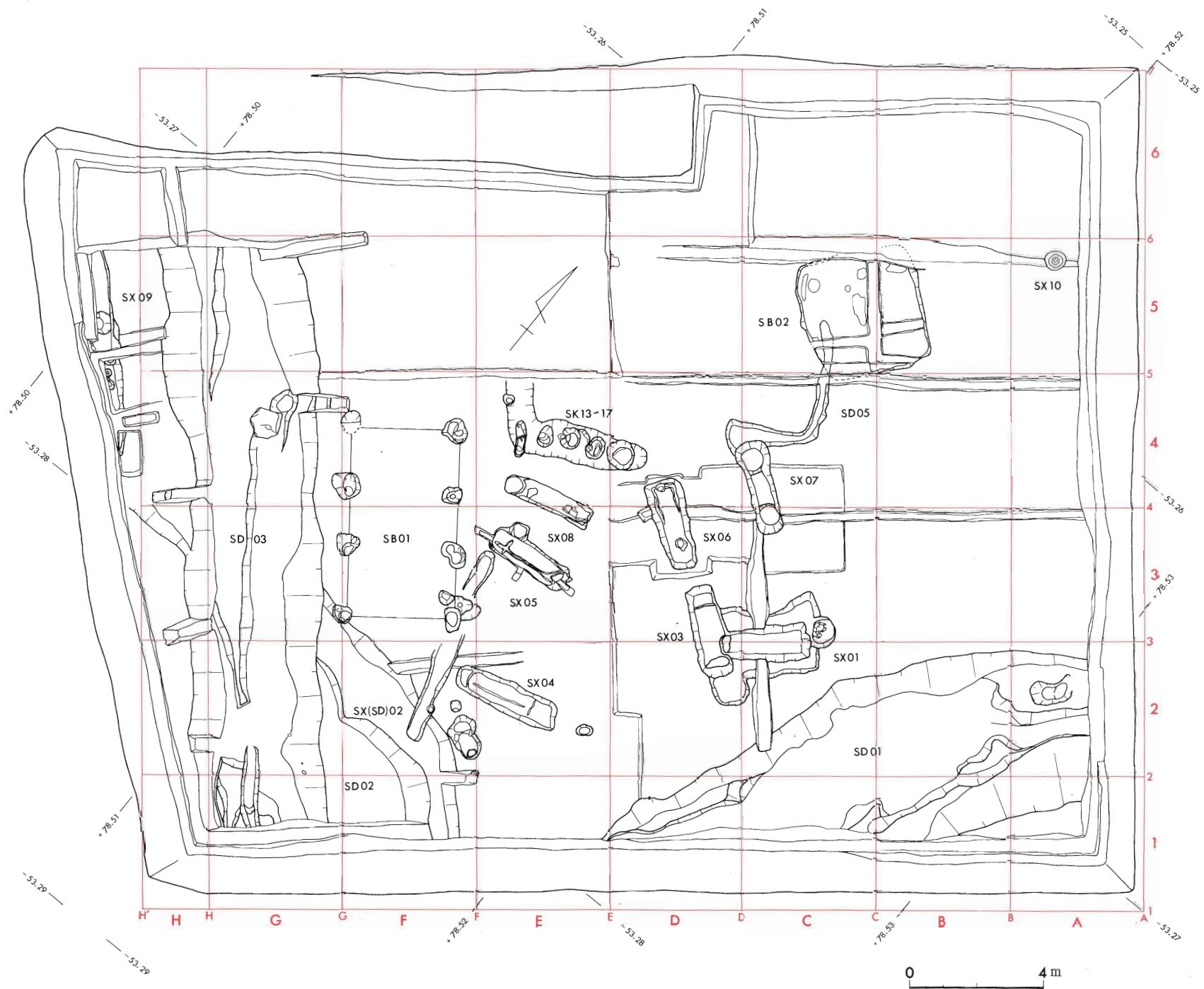
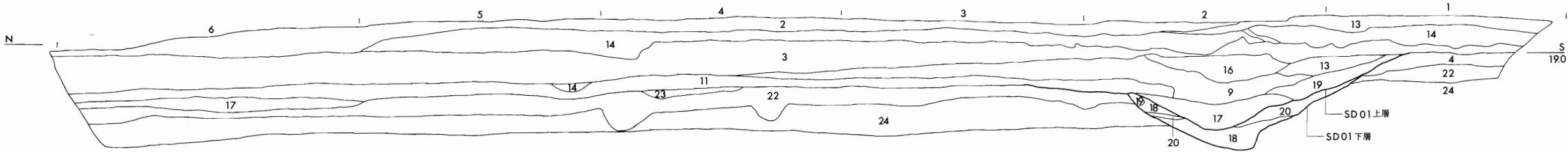
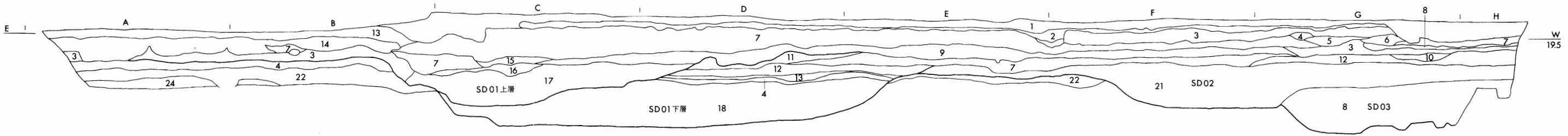


図5 南講武草田遺跡1区平面図 (1/160)



- | | | |
|------------|-------------|-------------------|
| 1. 暗灰色粘土 | 9. 淡綠灰色砂礫 | 17. 褐色砂礫 |
| 2. 綠灰色砂質粘土 | 10. 暗灰色混礫粘土 | 18. 暗青灰色砂質粘土 |
| 3. 青灰色砂質粘土 | 11. 暗灰色砂質粘土 | 19. 暗灰色有機粘土 |
| 4. 暗灰色混礫粘土 | 12. 茶褐色礫 | 20. 黑灰色有機粘土 |
| 5. 青灰色混礫粘土 | 13. 灰色粘土 | 21. 綠色砂礫 |
| 6. 黑灰色砂礫 | 14. 綠色砂 | 22. 黑褐色土(包含層) |
| 7. 青灰色粘土 | 15. 暗褐色砂質粘土 | 23. 暗褐色土 |
| 8. 綠色礫 | 16. 淡綠灰砂質粘土 | 24. 淡綠灰色混礫粘土(基盤層) |

0 4 m

図6 1区土層図 (1/80)

SD 01 上層水路

調査区南東隅のABC-1・2区で検出した。古墳時代後期に中心がある水路で、上下2層に分かれる。上層のものは延長約8m、幅2.3~3.6m、深さ約0.5mである。土壤が軟弱な西の岸に沿って、20~30cm間隔で打ち込まれた杭が0.7mの間隔をおいて2列残っており、水路の岸を補強した土手状の遺構が存在したものと考えられる。東

岸は丘陵裾から続く基盤層となり、杭列などの施設はない。溝底は北へゆくほど深くなっている。扇状地奥から流れ出す水を丘陵裾部に導き、下位に存在した水田に給水する水路と考えられる。水路内には砂礫が充満している。

この層中から古墳時代後期を中心に奈良・平安時代頃の糸切り底をもつ須恵器杯を最新とした須恵器、土師器1~46が出土している。また、石製の紡錘車85も出土している。外面に三角形を基調にした文様が線刻されている。土師器には外面に赤色顔料を塗布した高杯36、37、38がある。

SD 01 下層水路

ABCD-1・2区で検出した。上層水路の下面にあった水路で、延長約12m、幅5m前後、深さ約1mである。非常にしっかりした作りの水路で、上層水路同様、水田に給水するための水路と考えられる。

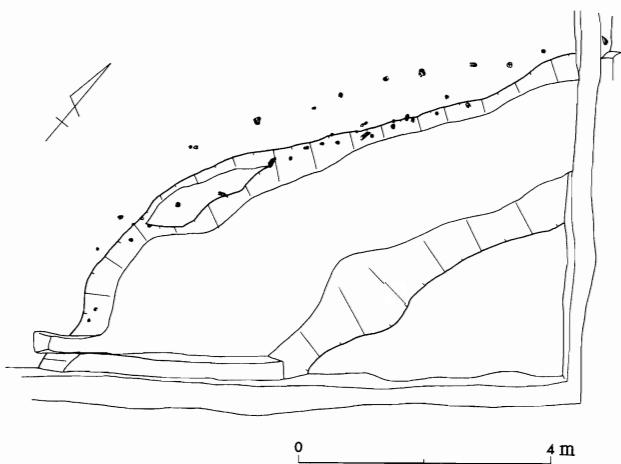


図7 SD 01 上層水路実測図

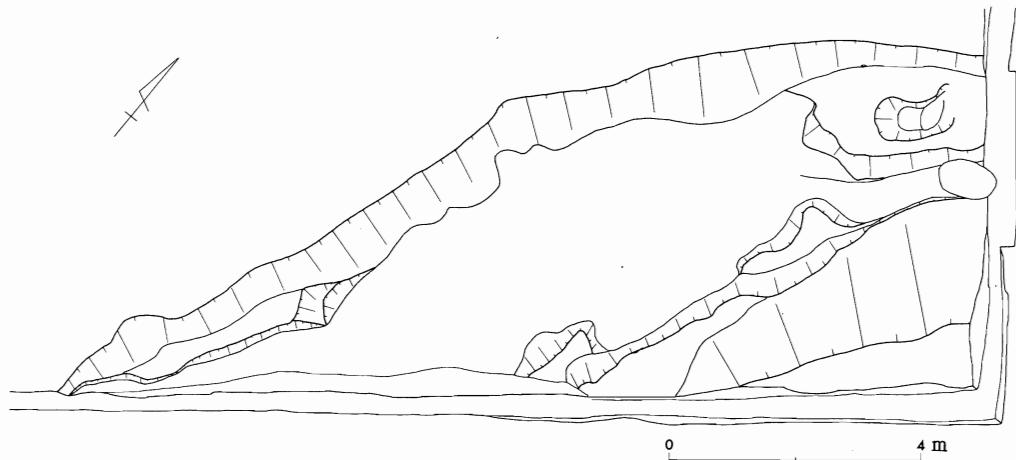


図8 SD 01 下層水路実測図

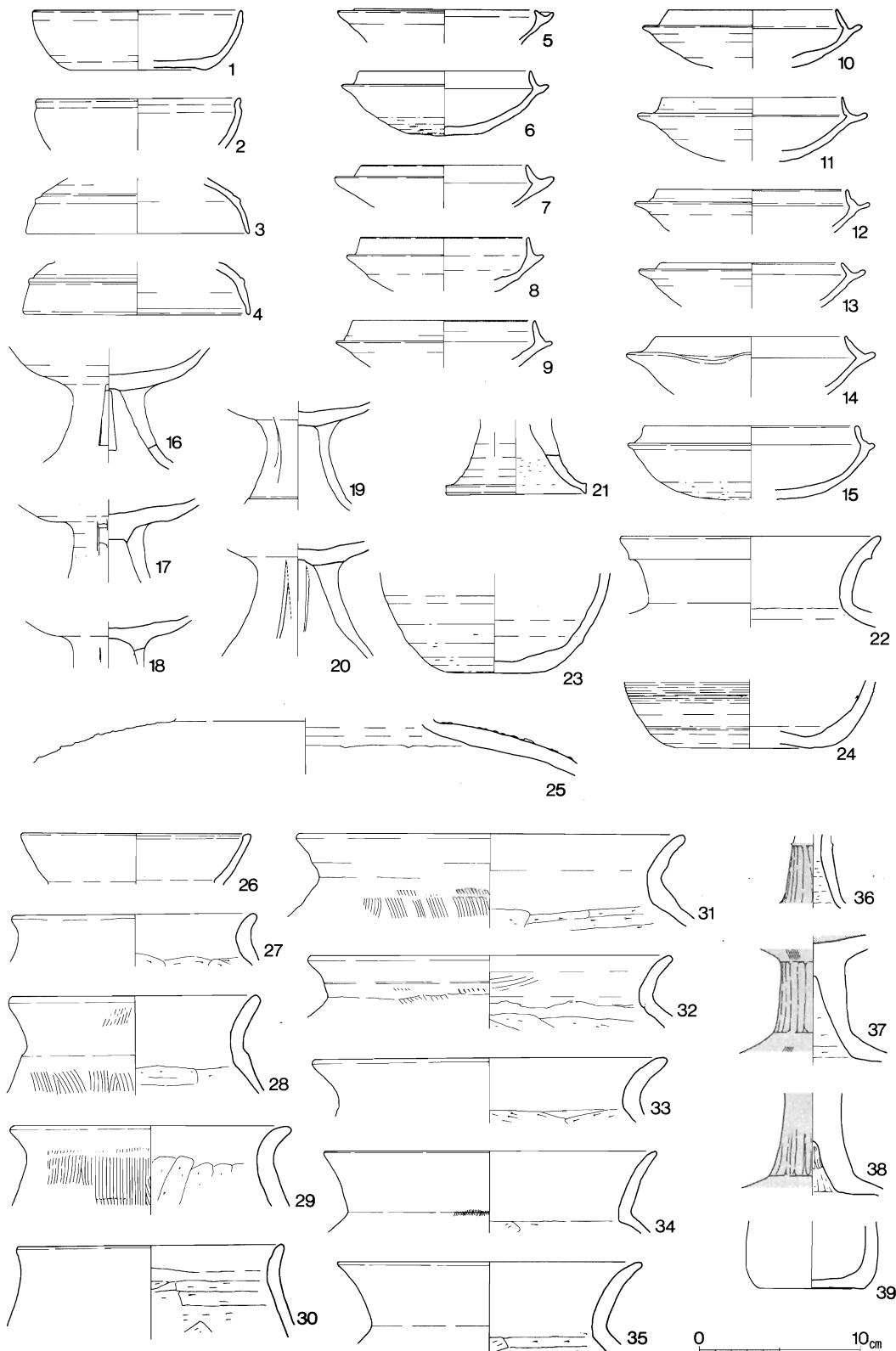


図9 SD 01 出土遺物実測図 (1)

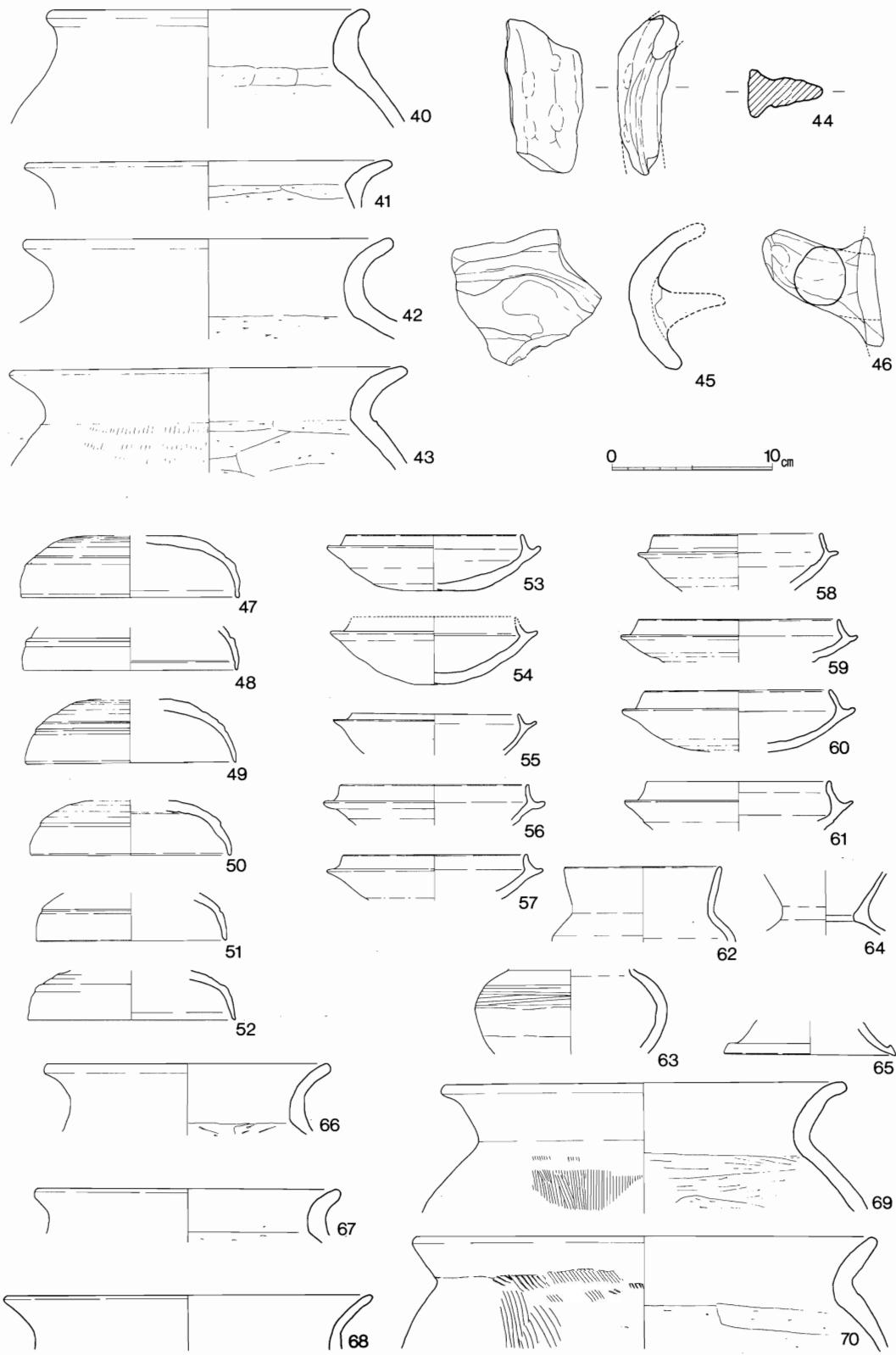


図10 SD 01出土遺物実測図 (2)

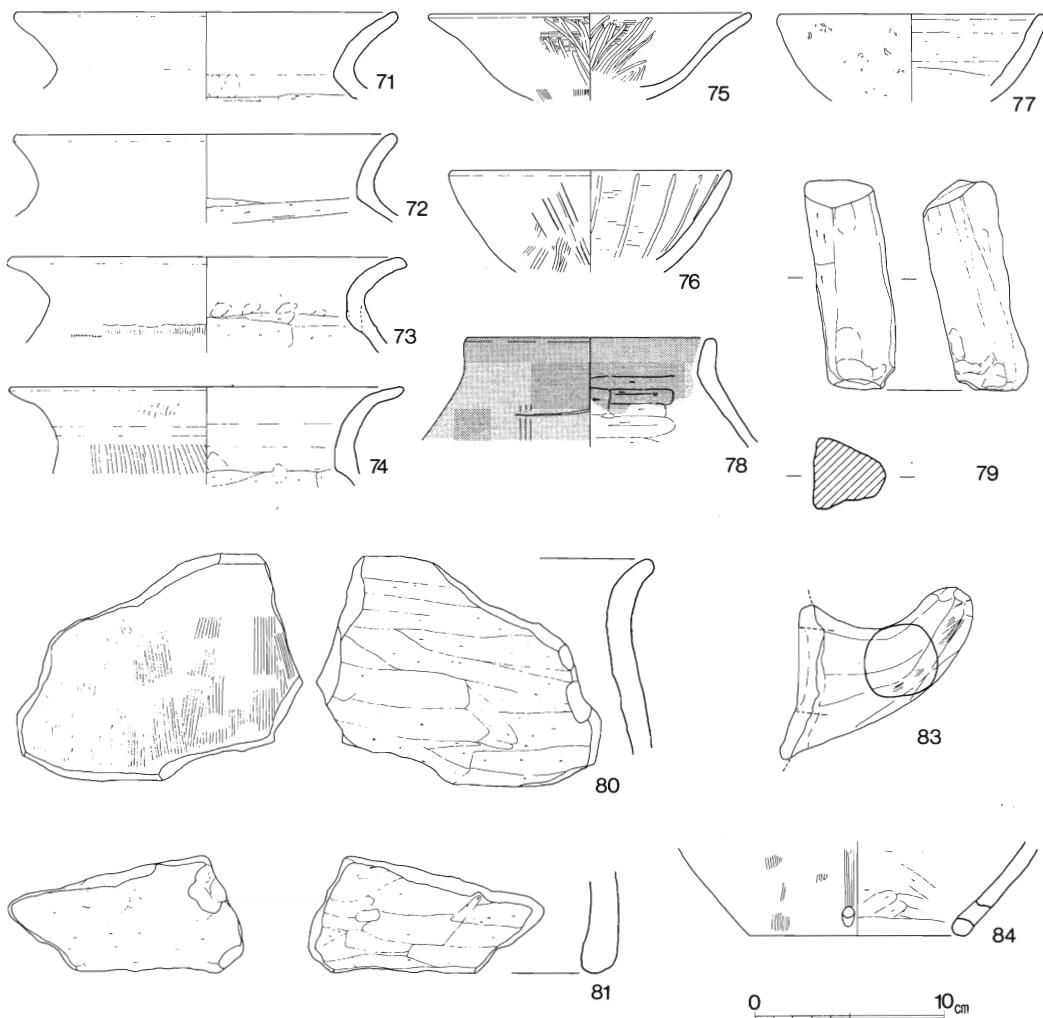
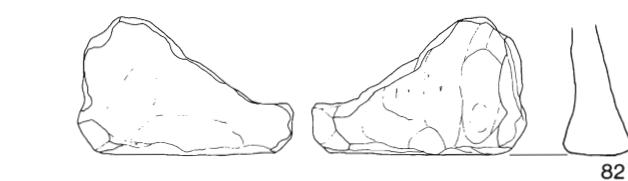


図11 SD 01 出土遺物実測図（3）



えられる。上層水路は、この下層水路が洪水により埋没した後、堆積した砂礫を部分的に掘り起こし、再使用したものであろう。

この水路中からも、古墳時代後期を中心とした須恵器、土師器47~84が出土している。須恵器には蓋杯、壺、土師器には甕、高杯、カマド、コシキなどがある。壺78は外面と口縁内面に赤色顔料を塗布している。

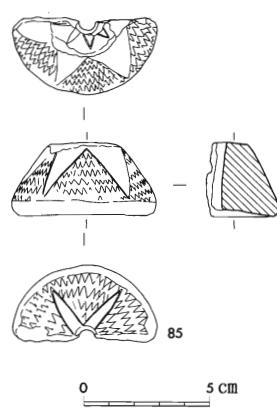


図12 SD 01 出土遺物実測図（4）

SD02

調査区西辺に沿ってFGH-1～5区で検出した水路で、やはり砂礫によって埋没している。調査区内での延長は約18mである。ゆるやかなカーブをもって掘られている。幅は4.5～6.5m、深さは0.4～0.6mと比較的浅い。遺跡の立地する扇状地奥から流れ出す水をこの盆地を貫流する現在の講武川に排水する目的で掘られたものだろう。

この水路下層にあったSD03が埋没した後、この水路が掘削・供用されたものと考えられるが、比較的短時間の後に再び大規模な洪水に見舞われ、調査区全面に砂礫が覆うような事態になったものと考えられる。溝内には一抱え以上もある石が流れ込んでおり、この洪水のすさまじさを目のあたりにした。後述するSD03ほどには規格的に掘削された様子はなく、あたかも埋没したSD03の上面を自然の流路として水が流れていたかの感がある。

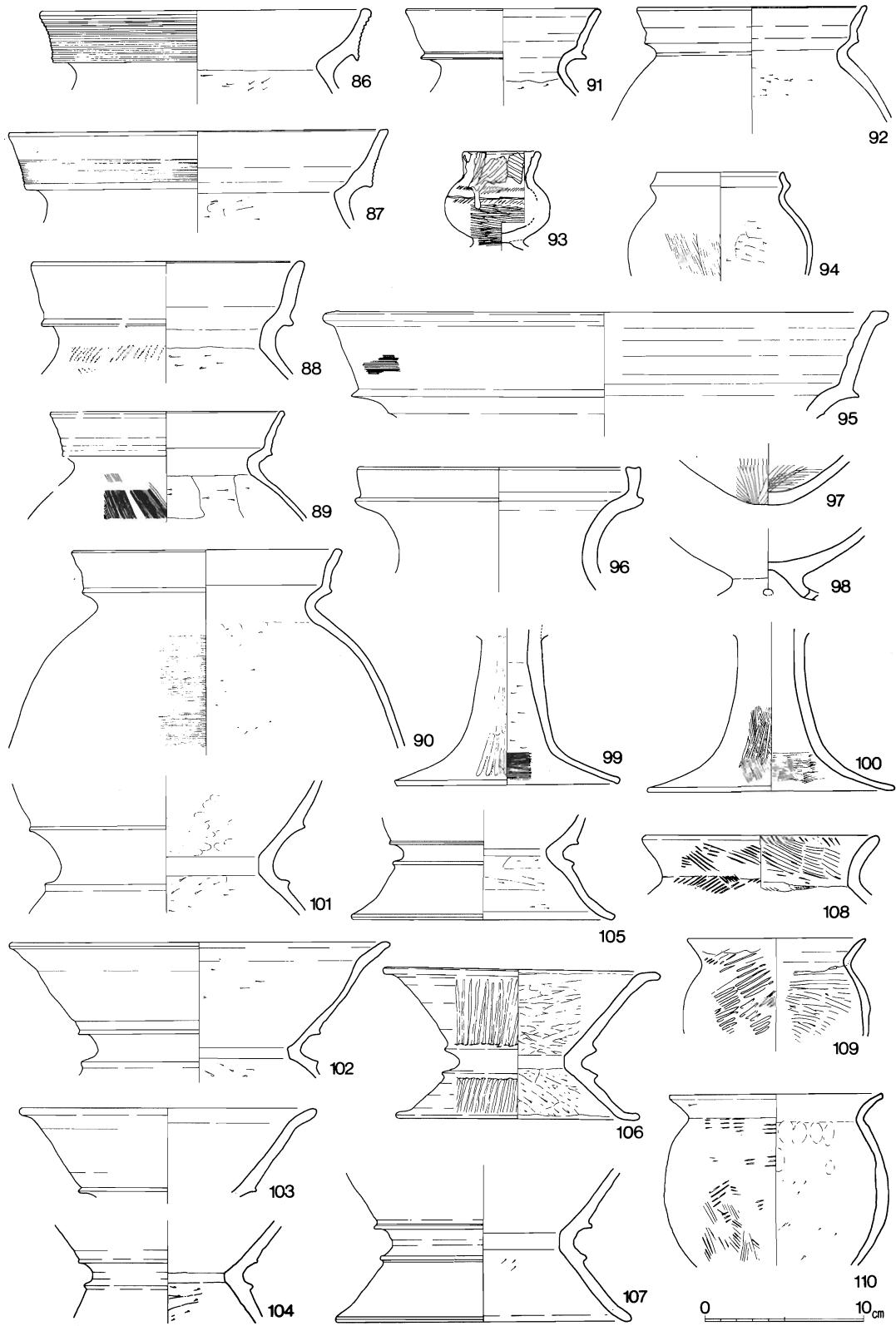
この水路を埋めた砂礫層中からは、古墳時代前半期を最新にした遺物が出土しており、これをもってこの水路埋没の時期と考えた。

遺物には草田3期から7期以降までのものがある。93は漆を保存していたと考えられる小壺で、内面に黒褐色の漆が厚く残っている。当時は木の葉で蓋がしてあったと考えられ、葉脈が漆膜に残っている。肩部に施される列点の文様から弥生時代後期の製品と考えられる。短く直立する口縁部をもち、低い脚が付くものである。体部外面を丁寧に磨いている。鼓形器台106はその胎土、調整からSD03出土の甕161とセットになる可能性がある。108～112は単純口縁の甕で、体部外面にタタキメを残す。近畿庄内式の範疇に含まれるものであろう。これらは在地の土器とは胎土が異なり、搬入品と考えられる。113、114はこうした甕の底部と考えられる。115は単純口縁のいわゆる布留甕で、小形丸底壺117、118もおおよそ同時期のものだろう。119、120、122はやはり近畿地方系譜の小形器台ないし小形高杯である。119は比較的古式の形態をもっている。高杯121は当地方では類例の知られない器形で、体部からの立ち上がり基部にヘラ描きの沈線を巡らせてている。123は初期須恵器で、甕の口縁部である。口縁部下にやや雑な波状の文様を描く。この遺物がこの水路出土資料の最新の時期を示している。

この溝内出土遺物には、弥生時代後期の遺物がかなり含まれるが、これはこの水路に隣接してその時代のH-2・3区土器溜りがあるためと考えられる。近畿地方庄内式の土器も、同様に隣接するH-5区土器溜りの遺物が混入したためと考えられる。また、この水路を中心に吉備地方から搬入された土器が見つかっている。



図 13 SD 02 実測図



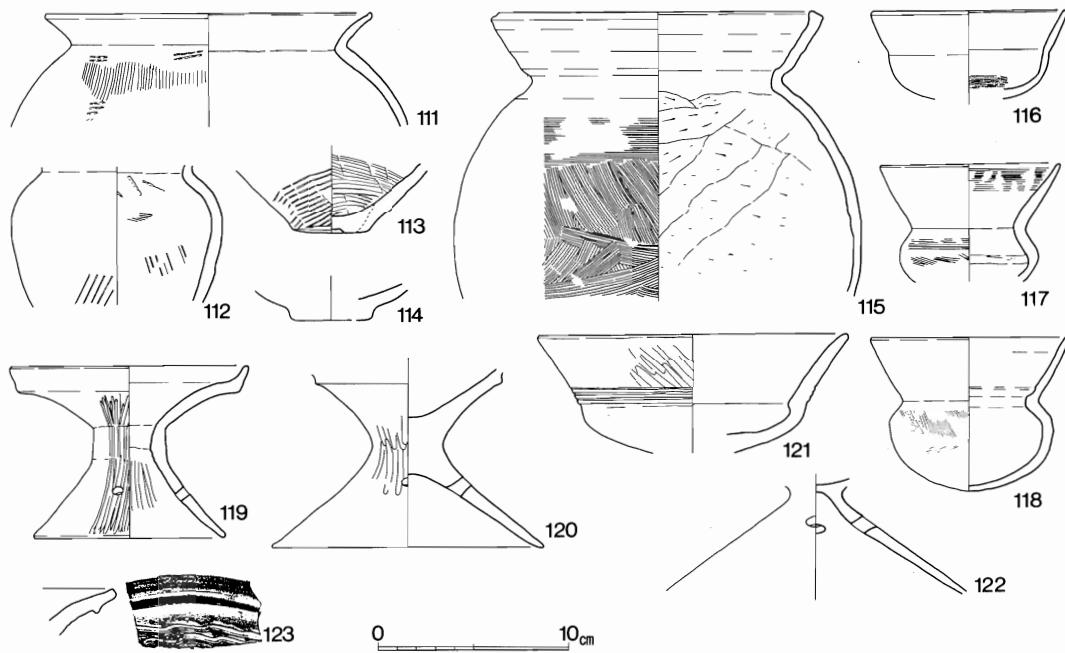


図15 SD02出土遺物実測図（2）

SD03

SD02の下層にあった水路で、GH-1～5区で検出した。延長17mを調査した。幅4～5m、深さ約1mの非常にしっかりとしたもので、一直線に延びることから、計画的に掘られたものと考えられる。N-40°-Wの方向に向かう。下流に向かうにつれ水路は太くなっていく。南東から北西に向い、扇状地のはば中央を貫いて掘られており、SD02同様、扇状地奥からの水を排水するためのものであろう。

粘質土とはいえ比較的堅固な基盤層を掘り抜いてこのような水路を掘ることは、大変な土木工事であったと考えられる。現在の講武川が当時も付近を流れしており、水路がそこまで延びていたとするならば、その延長は約300m近くになることになる。

水路を埋めた砂礫内からは、古墳時代前期草田7期の遺物を最新資料とする資料が出土しており、この水路はこれら遺物が示す時代に埋没したものと考えられ、SD02との時期差はさほどのものは考えられない。

この溝内出土遺物にもSD02同様、弥生時代後期の遺物がかなり多く含まれるが、これはこの水路に隣接してその時代のH-2・3区土器溜りがあるためと考えられる。また、近畿地方庄内式の土器156も、同様に隣接するH-5区土器溜りの遺物が混入したためと考えられる。

この水路からは、近畿庄内式に系譜をもち、口縁端部と肩部に円形浮文を配し、口縁内面と肩部

に鋸歯状の文様で飾ったパレススタイルの壺168、大きく開く低い脚部をもつ高杯182、小形器台181、近畿布留式に系譜のある単純口縁甕157～159なども出土しており、注目される。また、スタンプによって装飾をこらした壺190は、墳墓に供えられたものと考えられ、埴輪片191、192も出土していることから、水路上流部に古墳が存在する可能性がある。埴輪片はかなり大きな径が推定されるものである。

山陰系の土器群は、草田1～7期のもので、甕では口縁部を上方に繰り上げ、その外面に数条の凹線や沈線を施したもの124～126から、高く伸ばした口縁外面に貝殻腹縁によると考えられるクシ状工具で平行線を施すもの127～132、口縁部外面の平行線を欠くもの133、134、144～154、161がある。壺は甕ほどの量はないが、口縁部外面に数条の凹線を施したもの135、136、口縁部外面の平行線を欠く163、166、167がある。鼓形器台には、上台、下台に平行線文を施し、かなり長い筒部をもつと考えられる139～141、上台下台間がかなり縮約し、外面の文様を欠く142、筒部が痕跡化し、内面が稜

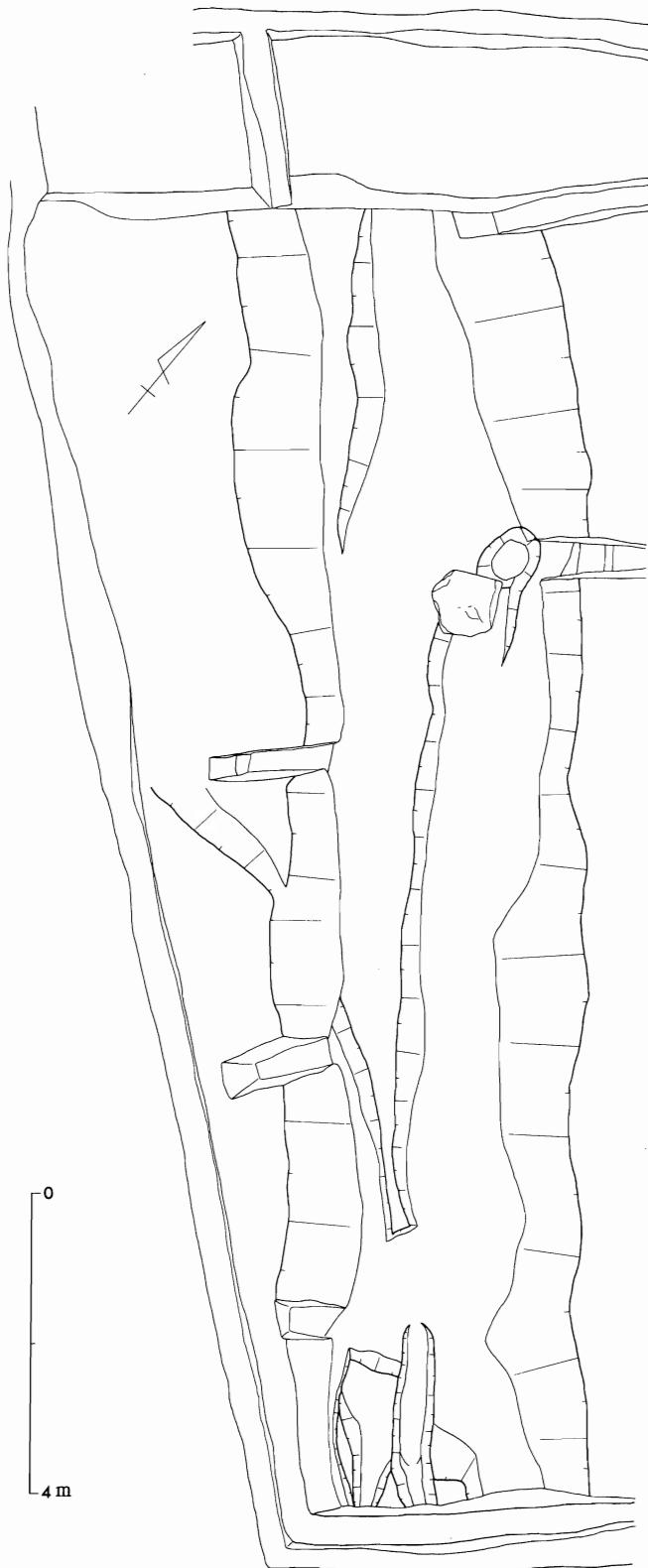


図16 SD03実測図

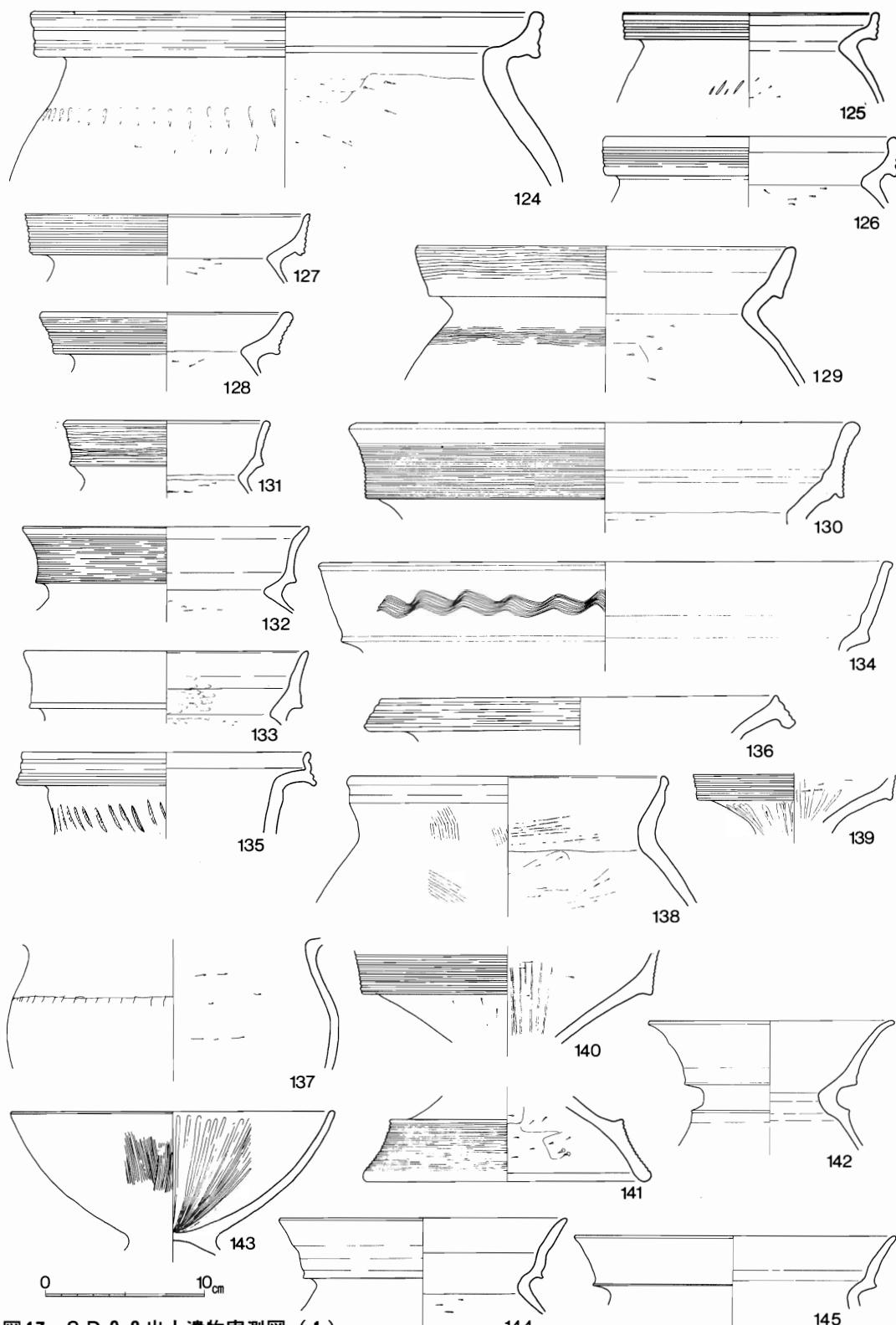


図17 SD 03 出土遺物実測図 (1)

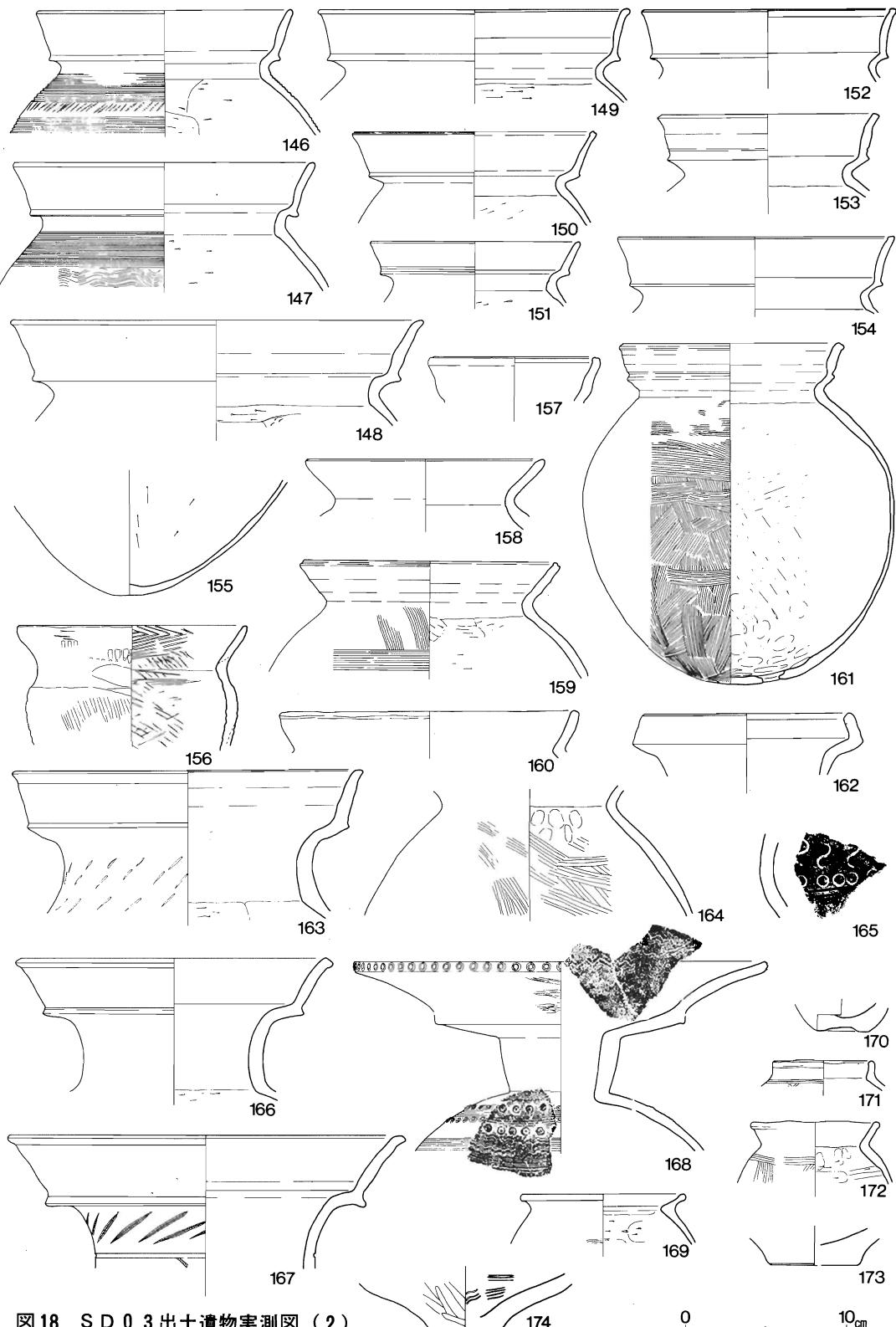


図18 SD 03 出土遺物実測図 (2)

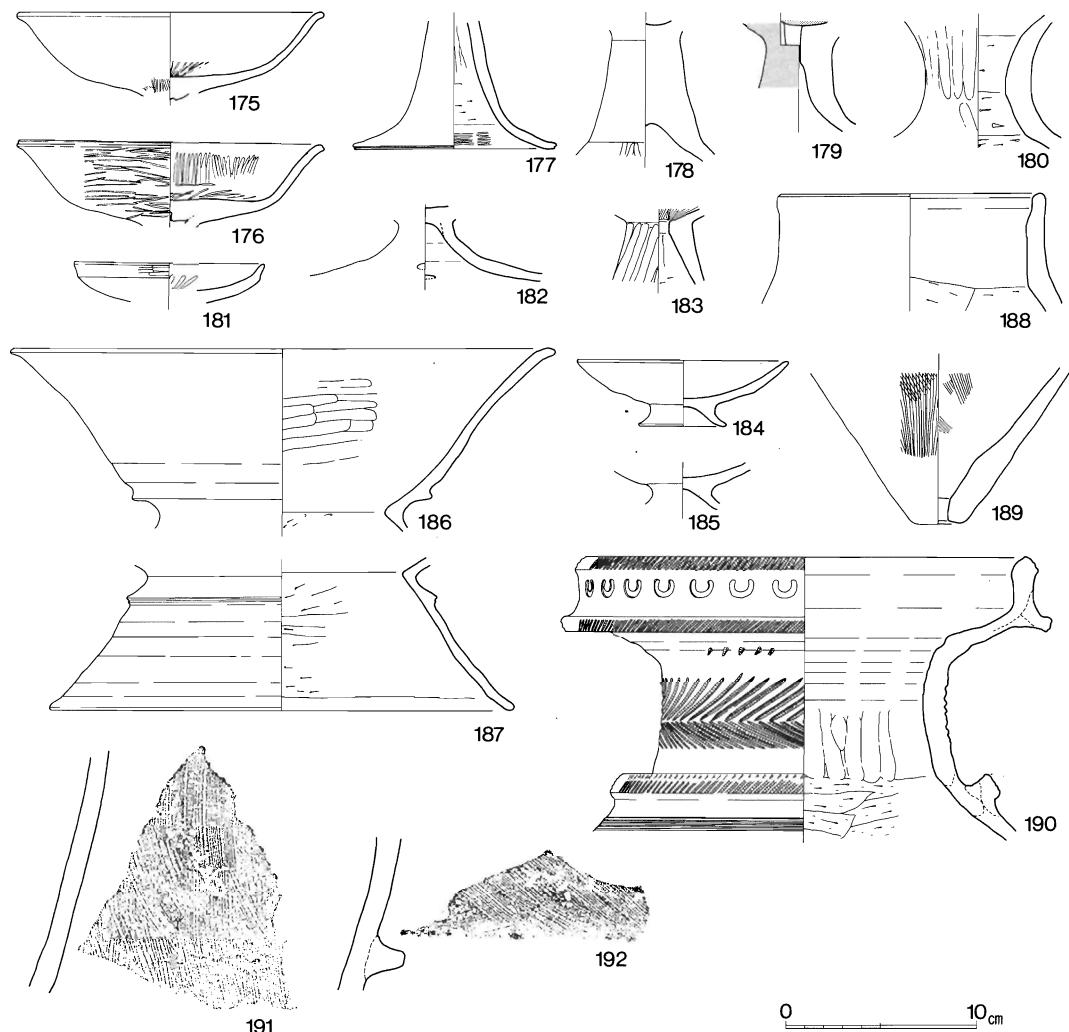


図19 SD03出土遺物実測図（3）

線状になる186、187がある。高杯175はゆるやかに立ち上がるやや小ぶりな杯部、176は底部からわずかながらも屈曲を経て立ち上がる杯部をもつ。177は脚部である。この他に高杯178は中実の、179、183は杯底部まで貫通する穿孔のあるもの、180は大形品の脚部である。その他に甌形土器と考えられる188、低脚杯184、185、全形は不明だが、甌形土器かと考えられる189がある。

吉備系遺物

SD02付近を中心に、吉備地方から搬入されたと考えられる遺物が出土している。193は壺の口縁部で、短く立ち上がる口縁部の外面にヘラによる平行沈線を7条施し、頸部にも同様の沈線がある。外面および口縁内面に赤色顔料を塗布する。194は193同様の壺の頸部である。縦方向のハケメを施

した後、ヘラによる平行沈線を描く。顔料の塗布はない。195も193同様の壺と考えられるが、頸部の沈線を欠く。外面および口縁内面に顔料を塗布する。196はかなり大形の壺で、肩部200と同一個体の可能性がある。外面に顔料を塗布する。197は大形の壺で、ゆるやかに開く口縁端部を下方に折り曲げ、その端面に4条の平行沈線を施す。頸部外面には縦、内面には横の粗いハケメを施す。顔料の塗布はない。198は直立に近い口縁部をもつ複合口縁壺と考えられ、内外面に顔料を塗布する。199は大きく開く壺口縁、200は大形の壺肩部である。

以上の遺物のうち、暗褐色から褐色の色調を呈し、金色の雲母や黒色の角閃石粒を含むという吉備系遺物の胎土をもつのは、193、196、197、199、200で、194、195、198は在地の土器と似た胎土である。

これら遺物のうち、197がH-2・3土器溜りから出土しており、この土器溜りとの関係も考えられるが、これも含め他の遺物はいずれもSD02付近から出土しており、水路上流部にこうした遺物を供献した墳墓が存在するものと考えられる。

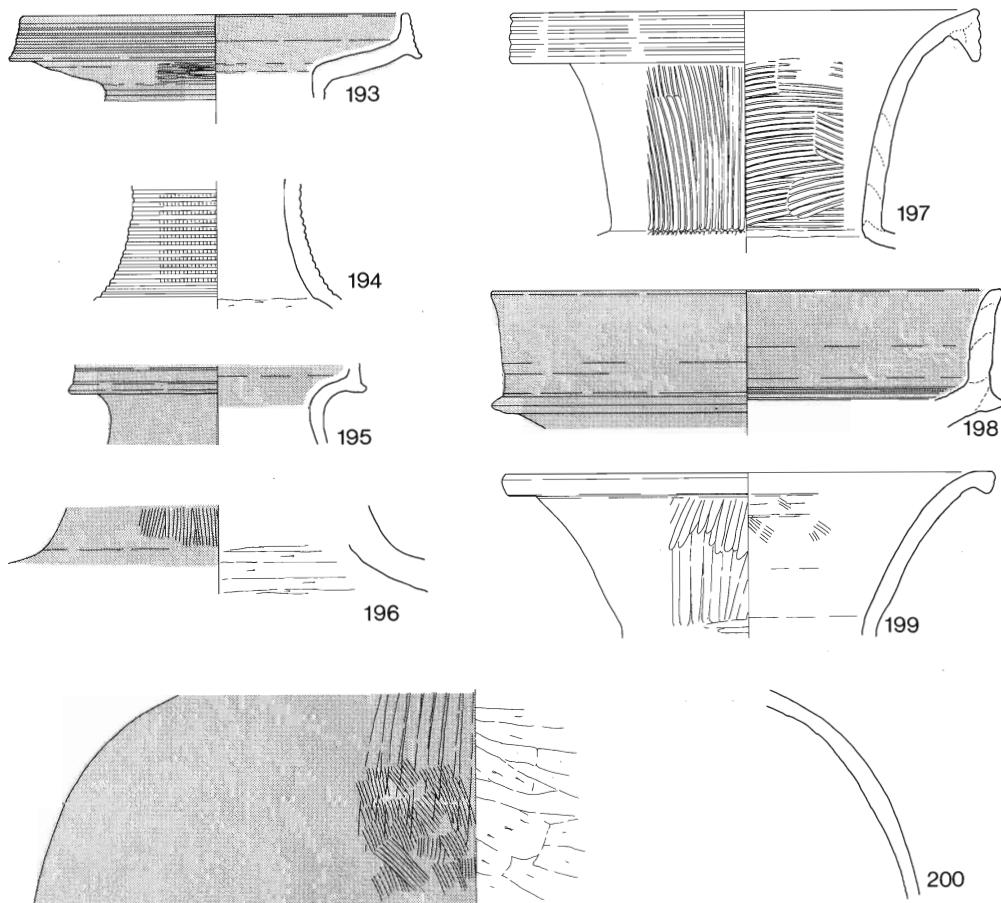


図20 吉備系土器実測図

0 10 cm

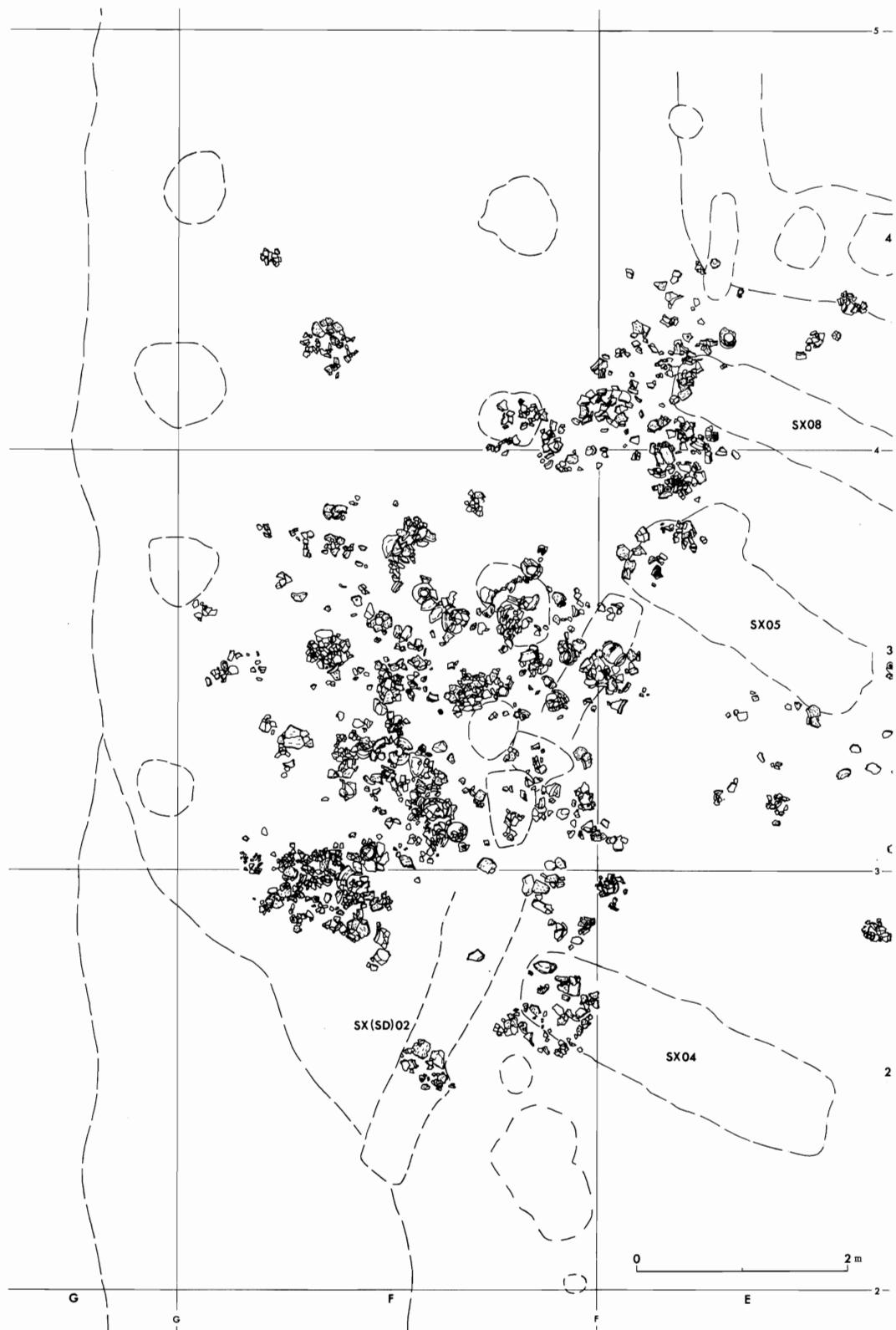


図21 土器溜り出土状況平面図（1）F・E区

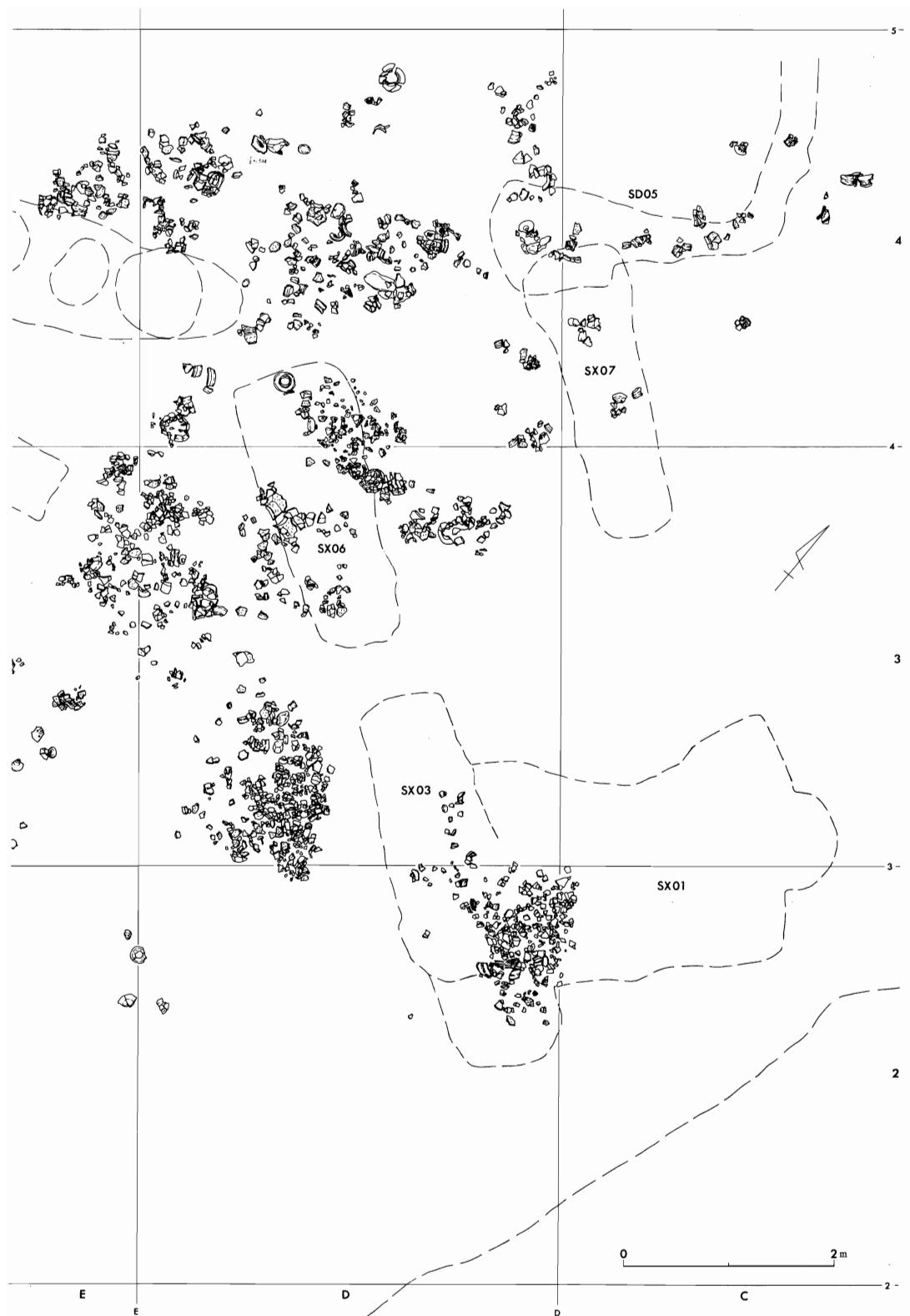


図22 土器溜り出土状況平面図（2）E～C区

土器溜り

調査区各地点から遺物包含層である黒褐色土内を中心に土器溜りが検出された。遺物は、調査区内に設けた4m区画の方眼を単位として検出し、さらにその中のグループごとに枝番号を付けて取上げた。

土器溜りの遺物は、それぞれ下層で検出した木棺墓の上面に供えられたものと考えられるが、土器溜りと木棺墓の関係が明らかにできたものは少ない。よって、木棺墓との関係が明らかになった遺物群については木棺墓の説明の中で扱い、それ以外のものについては、土器溜りの資料として、その群ごとに説明する。包含層の黒褐色土の上面には、SD02、03を埋没させた洪水の際の礫を含む灰褐色土が覆っており、この際若干遺物に移動があった可能性が考えられた。

S X 0 1 • 0 3

CD-2・3区で検出した。ここでは基盤層が比較的に高かった。二段掘りの墓壙をもつSX01と素掘りの墓壙のSX03が切りあって存在する。切り合い関係から、SX01がまず作られ、その後にSX03が掘られたことがわかっている。

SX01は二段掘り外側の墓壙が復元長3.5m、幅1.8m、内側の墓壙は、長さ2.8m、幅1.1mで、検出面からの墓壙の深さは1.1mである。墓壙は壙底の傾きから北東を頭位とする。主軸はE-41°-Nである。墓壙底南西端には、溝状の落ちこみがあり、壙内に組まれた木棺小口板の痕跡と考えられる。また、外側の墓壙北東端に円形の土坑があり、この中には石組みがあった。石組みはこの土坑中に立てられた柱のようなものを支えるようにも見えたが確証はない。

SX03の墓壙は、長さ2.8m、幅1.0mで、検出面からの墓壙の深さは1.0mである。墓壙は壙底の傾きから北西を頭位とする。主軸はW-37°-Nである。北西端に一段低い落ちこみがあり、南東端には、溝状の落ちこみがある。南東端のものは、この墓壙内に組まれた木棺の板の痕跡と考えられる。

SX03の上面には土器溜りがあり、弥生時代後期草田5～6期の遺物を中心とするが、一部に古墳時代初頭の草田7期の遺物201、204～206を混えており、これら遺物は後世の混入の可能性がある。この土器溜りの中には、かなりの量の炭が認められ、また、出土土器にも不自然な赤色を呈するものが多いことから、墓壙上面に供えた後、あるいは、墓壙上面での飲食を行った後、火を燃やして土器を破碎した可能性がある。

甕202、203は複合口縁部の稜はさほどの突出を見せず、口縁端部も丸く納めるなど、端部調整は行わない。肩部に間隔の狭い波状文、列点文をもつ。同様の特徴をもつ壺207は、口縁が内傾するもので、外面に赤色顔料を塗布している可能性がある。高杯208、209はゆるやかに広がる比較的大

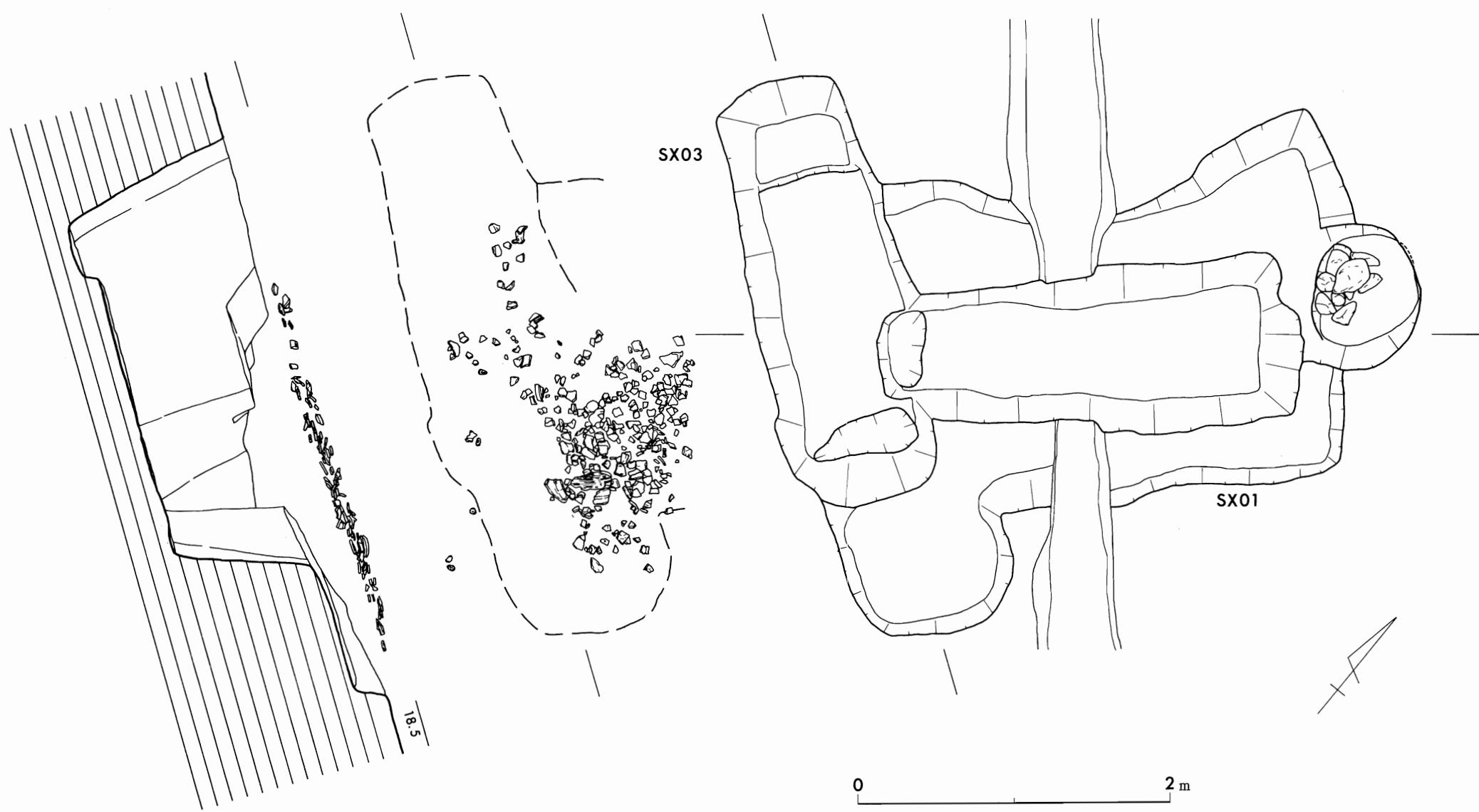


図23 SX01・03実測図

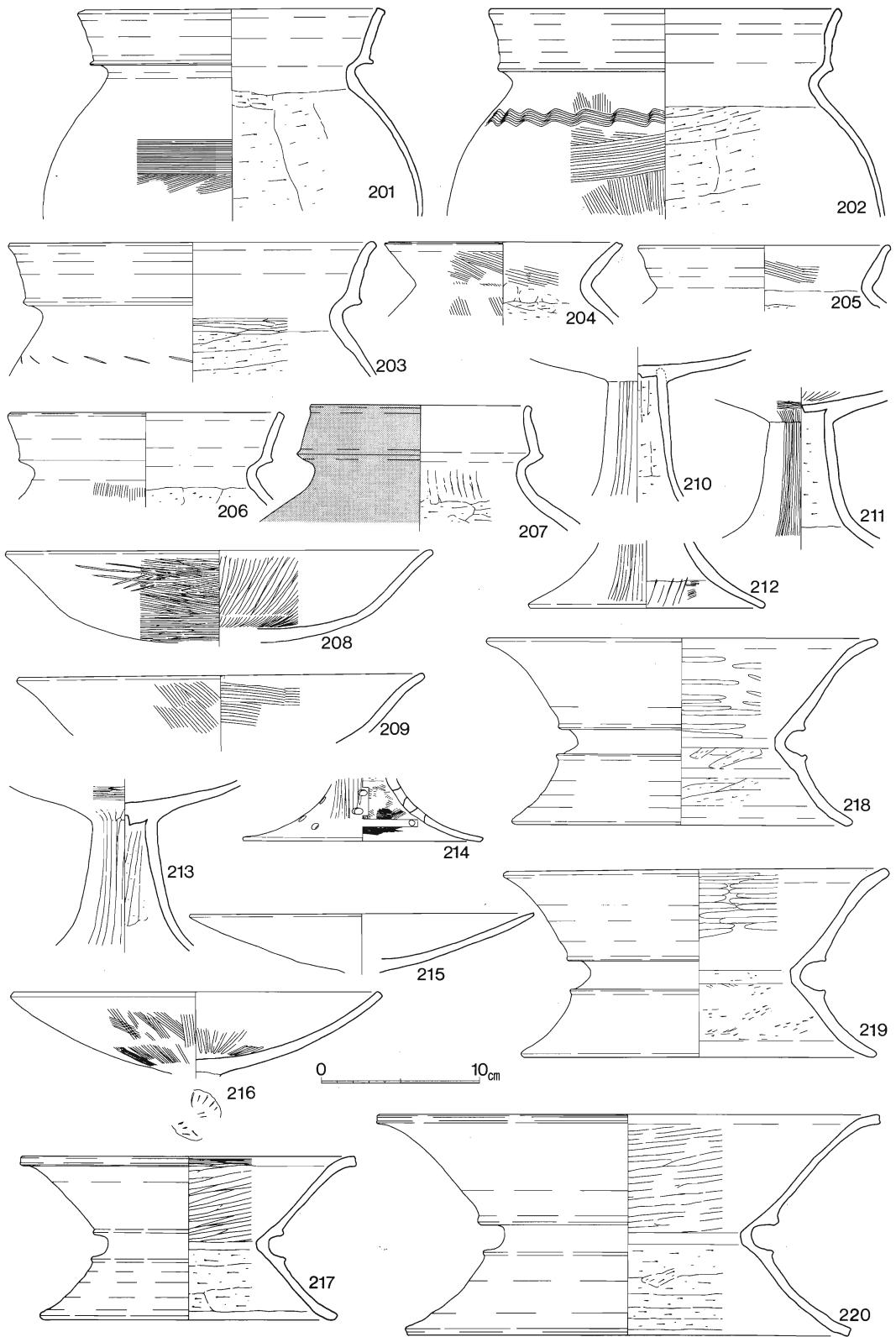


図24 SXO 3出土遺物実測図

きな杯部をもつもので、脚部210～213は円筒状の長い筒部からゆるやかに開く。脚裾に多くの穿孔をもつ異形の214もある。低脚杯215、216は口径の大きな浅い杯部をもつ。216には脚部を接合した際のヘラ状工具による刺突痕が残っている。鼓形器台は筒部が縮約したもので、厚手の218、219、端部に平坦面を作り、大形の220、平坦面は作るがやや小形の217がある。

S X 0 4

EF-2区で検出した。SX04の墓壙は、長さ3.2m、幅0.9mで、検出面からの深さは0.8mである。墓壙はその幅の広がりから東を頭位とすると考えられる。主軸はE-14°-Nである。西端に一段のステップがある。

墓壙底面には木が残されている。この木は、長さ1.7m、太さ約5cmの丸太で、壙底のはば中央に主軸に沿うように置かれている。また、この木の東側にも、主軸と直交するように長さ0.5mの同様の丸太が置かれている。これらの木の使途は不明というほかない。

また、土層図に見るよう、墓壙上面から壙底の木に届くまでピットが掘り込まれている。このピット内には粘質の黒褐色土が充満しており、SX01北東端の土坑同様、柱のようなものが立てられていた可能性がある。

この墓壙に明らかに伴う遺物はない。

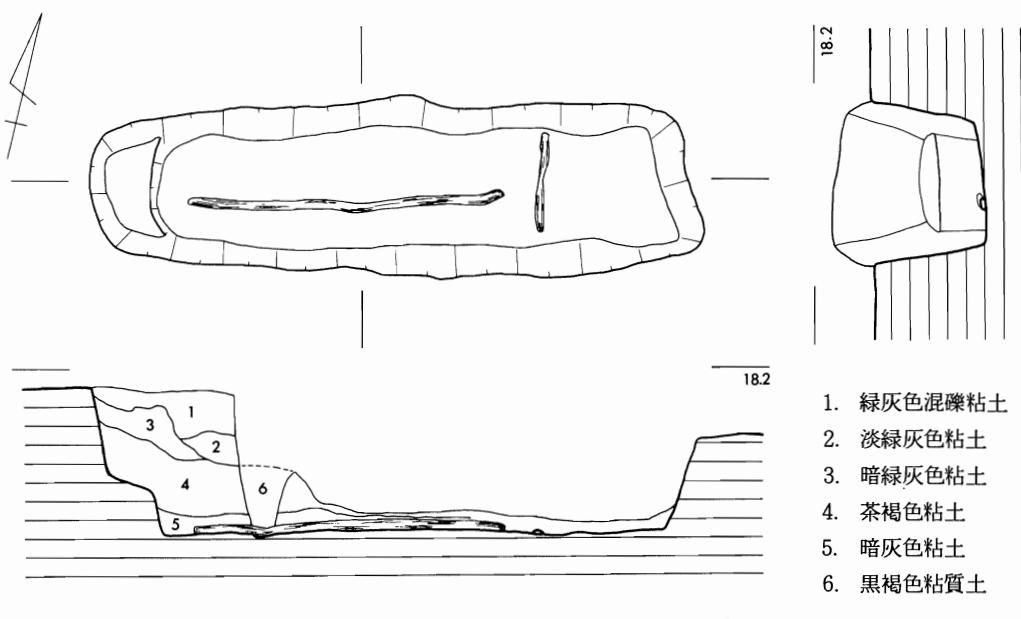


図25 SX04実測図

S X 0 5

E-3区で検出した。墓壙は長さ2.5m、幅0.8mで、検出面からの深さは0.6mである。壙底の傾きから西を頭位とすると考えられる。主軸はW-6°-Sである。

壙横断セクションでは壙内両側に棺の板の痕跡が土層で確認でき、墓壙底には、棺の板の痕跡が残っている。棺北辺の棺痕跡は底にはないが、横断セクションの土層で観察できた。これによれば、壙内に組まれた棺は、遺体頭位の方向に若干の余地を残した副室をもっていたものと考えられる。

また、棺東端では、小口板の痕跡は斜めになっている。これから復元できる棺の内法は、長さ1.4～1.6m、幅0.5mである。墓壙内両端近くには、床面から浮いた状態で若干の石がある。棺東端上部にある石は、小口板を支えていたものと考えられる。また、壙底西側では、棺長手板と小口板の痕跡が十文字になっており、それぞれの板に切り込みをいれて壙内で組み合わされるものであった。

墓壙北西に接して、辺0.5mの隅丸方形のピットがある。深さは約0.4mである。墓壙内と同様の土がつまっており、壙外に設けられた副室と考えられる。

この墓壙に明らかに伴う遺物はなかった。

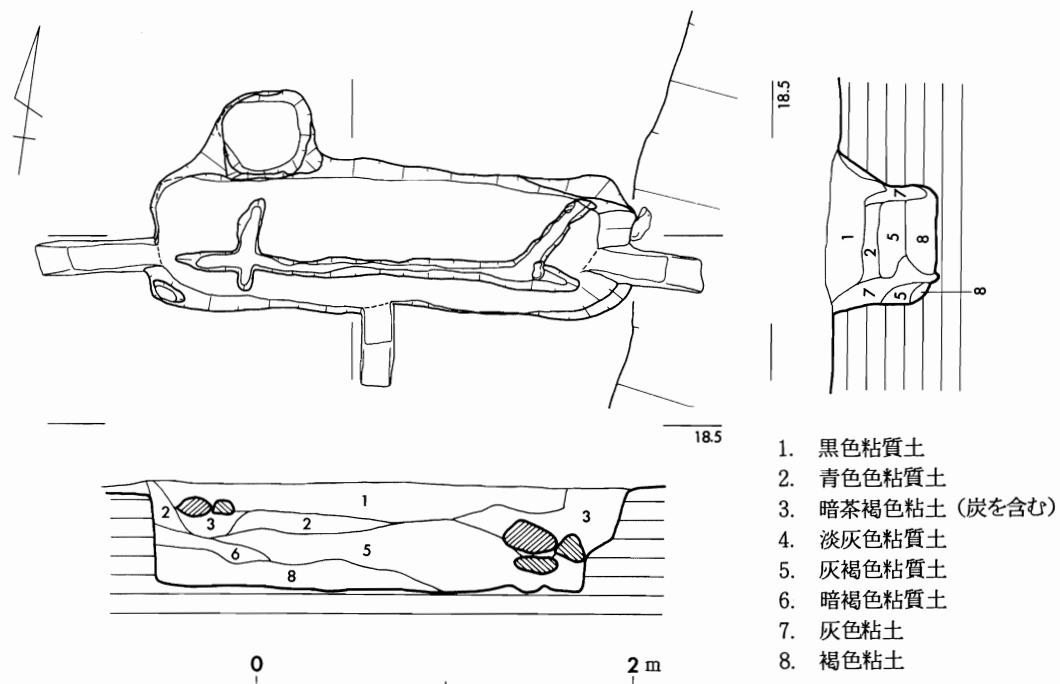


図26 S X 0 5 実測図

S X 0 6

D-3・4区で検出した。墓壙上面に土器溜りがあり、これが墓壙に伴うものと考えた。この土器溜りと墓壙検出面とは約0.3mの高低差があるので、土器溜り検出面から墓壙が掘り込まれているとすれば、二段掘りの墓壙であった可能性がある。

検出した墓壙は、長さ2.7m、幅1.1mで、検出面からの墓壙の深さは0.7mである。墓壙は壙底の傾きおよび幅の広がりから北西を頭位とすると考えられ、主軸はW-33°-Nである。

墓壙底北西には、溝状の落ちこみがあり、壙内に組まれた木棺の板の痕跡と考えられる。木棺の小口板および長手板の痕跡であろう。南東部では検出できなかった。壙底に1個の石が落ちこんでいる。

また、北西端部と南東寄りには底まで届くピットがあり、SX01、04同様、柱のようなものが立てられていた可能性がある。

墓壙上面の土器溜りは、大きくは3グループに別れる。このうち2点ある鼓形器台は、水平の状態を保っており、ほかの土器もほぼ原位置にあるものと考えられた。ただ、墓壙北西端部にあった器台(235)は、他の土器片よりも低い位置で出土しており、その位置は墓壙内にあった柱穴状のピットの場所と一致しており、ピットに立てられた柱のようなものが腐った後、その穴へ転落したような状況であり、注目された。

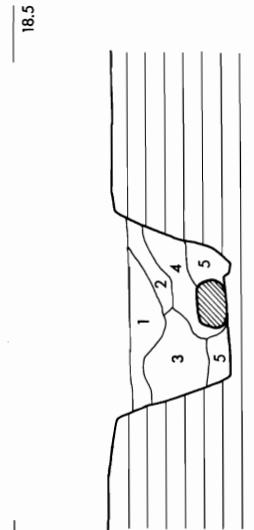
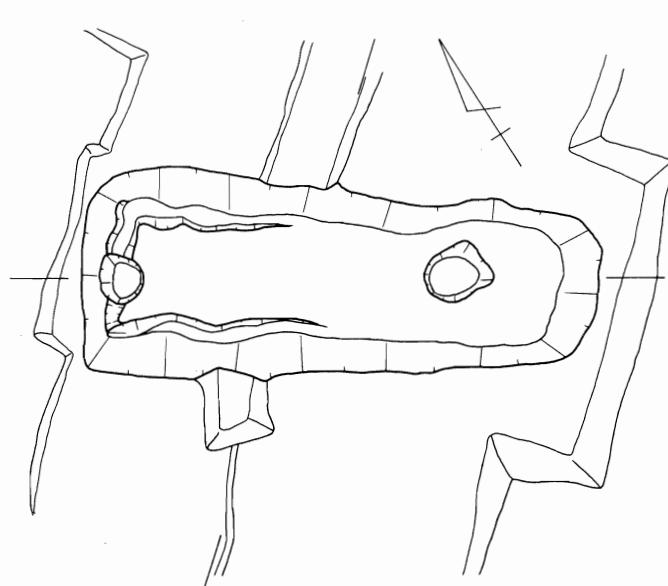
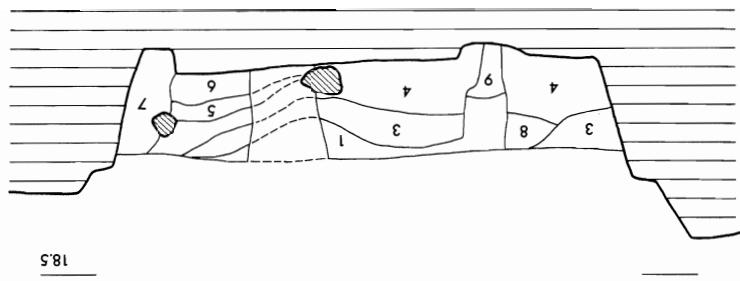
出土遺物は、草田6期のもので、甕、高杯、小形丸底鉢、鼓形器台がある。

甕221～228は、口縁端部を外方に折り曲げるもので、肩部に間隔の広い列点文ないし、波頂間の広い波形文を施すものが多い。体部下半を細かいハケ原体で仕上げた後、体部最大径以上に粗い横ハケを施して仕上げている。229は短く内傾して立ち上がる口縁部をもち、ごくかすかな平底をとどめる。出雲地方では見かけない器形である。230はやや大形の甕で、高く立ち上がる口縁部は、端部をなでて平坦面を作っている。平底をもつ。高杯231は、小ぶりだがやや深い杯部に、屈曲して開く脚部が付くもので、外面及び杯部内面には赤色顔料を塗布している。胎土に含まれる砂粒は在地のものと異なり、搬入されたものの可能性がある。232は小形丸底鉢で、さほどの屈曲のない短い口縁部に、やや深めの体部が接続している。高杯233は杯底部からゆるやかなカーブを経て立ち上がる口縁部をもつもの。底面に脚接合時の深い刺突痕がある。鼓形器台234、235は上台、下台間がかなり縮約したものである。

このうち高杯231、小形丸底鉢232は、近畿庄内式のものと考えられる器種である。

S X 0 7

C-3・4区で検出した。墓壙は、長さ2.8m、幅0.8mで、検出面からの深さは0.6～0.7mであ



- 0
2m
1. 淡黒色粘質土
 2. 緑色砂礫土
 3. 淡緑灰色砂礫土
 4. 黒色粘質土
 5. 暗緑色粘質土
 6. 緑色粘質土
 7. 灰茶褐色粘質土
 8. 混礫綠灰色粘質土
 9. 黒色砂質粘土

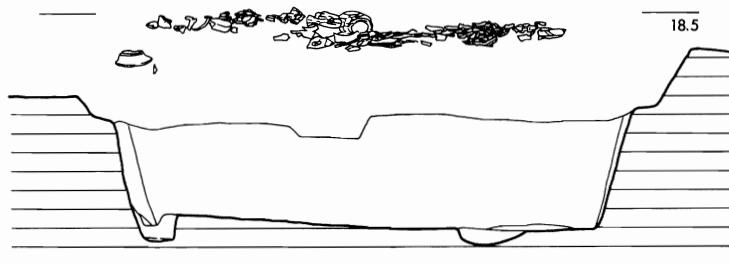


図 27 SX06 実測図

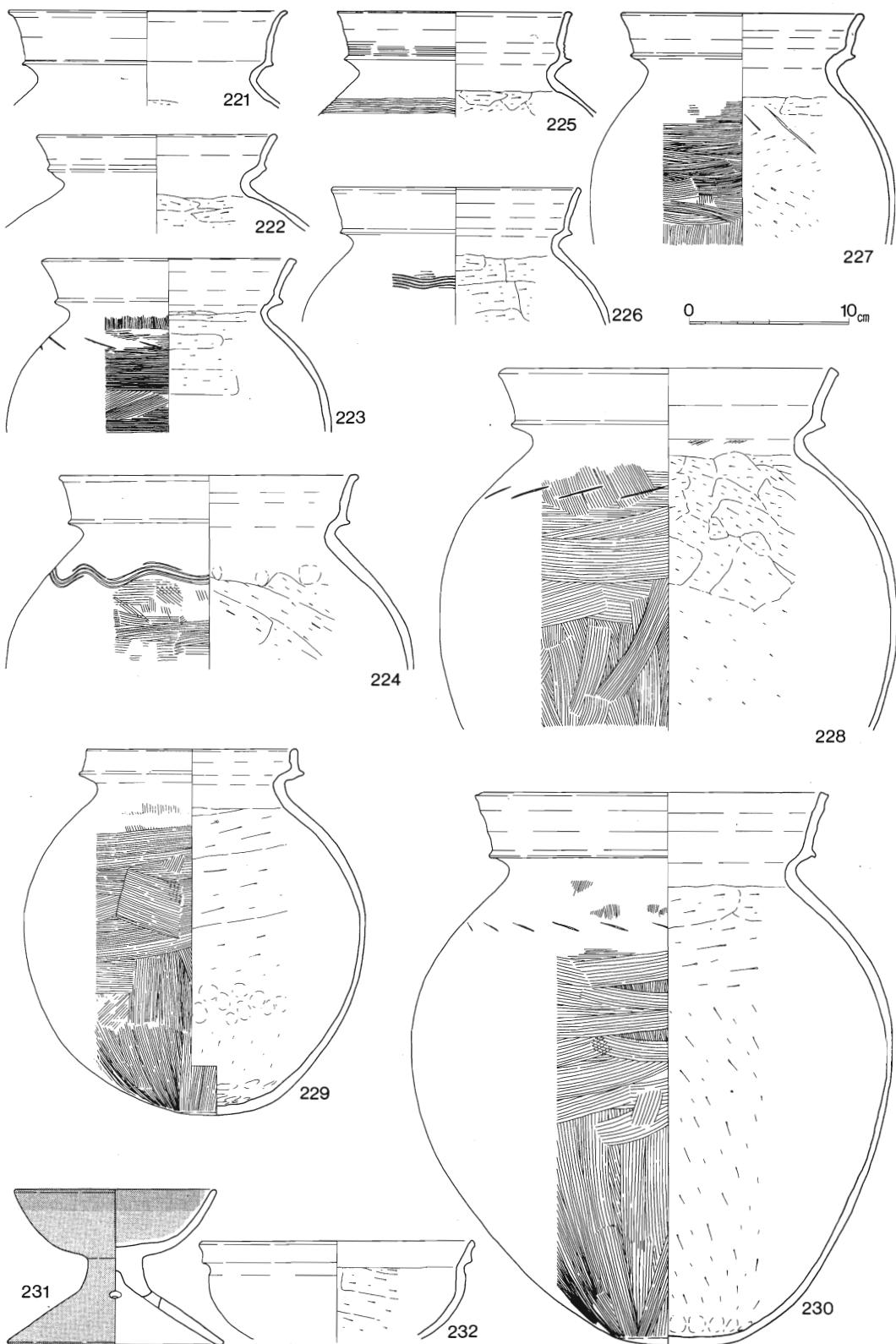


図28 SX06出土遺物実測図(1)

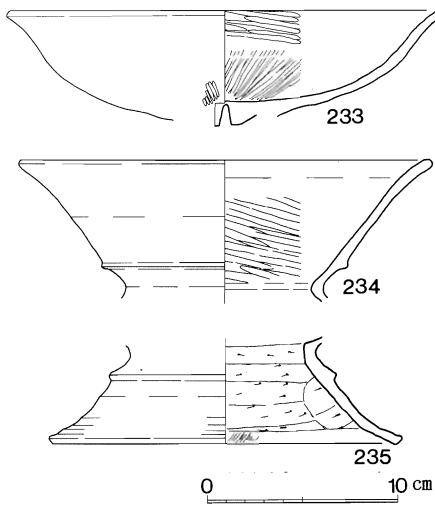


図29 SX06出土遺物実測図（2）

る。墓壙は壙底の傾きから北西を頭位とし、主軸はW-33°-Nである。

隣接するSX06と頭位方向が一致しており、ほぼ同時期に作られたものであることが想定できる。また、墓壙北西は、SD05によって切られられており、この溝が掘られるときにはすでにSX07は存在していたこともわかっている。

墓壙底の両端はそれぞれ一段深くなっており、両端に副室が設けられていたものと考えられる。そのため、本来の遺体を埋葬する部分は0.9mと短い。小児を埋葬したものか。

壙内上部には2個の石が落ちこんだ状態で検出されており、標石の可能性がある。

この墓壙に明らかに伴う遺物はない。

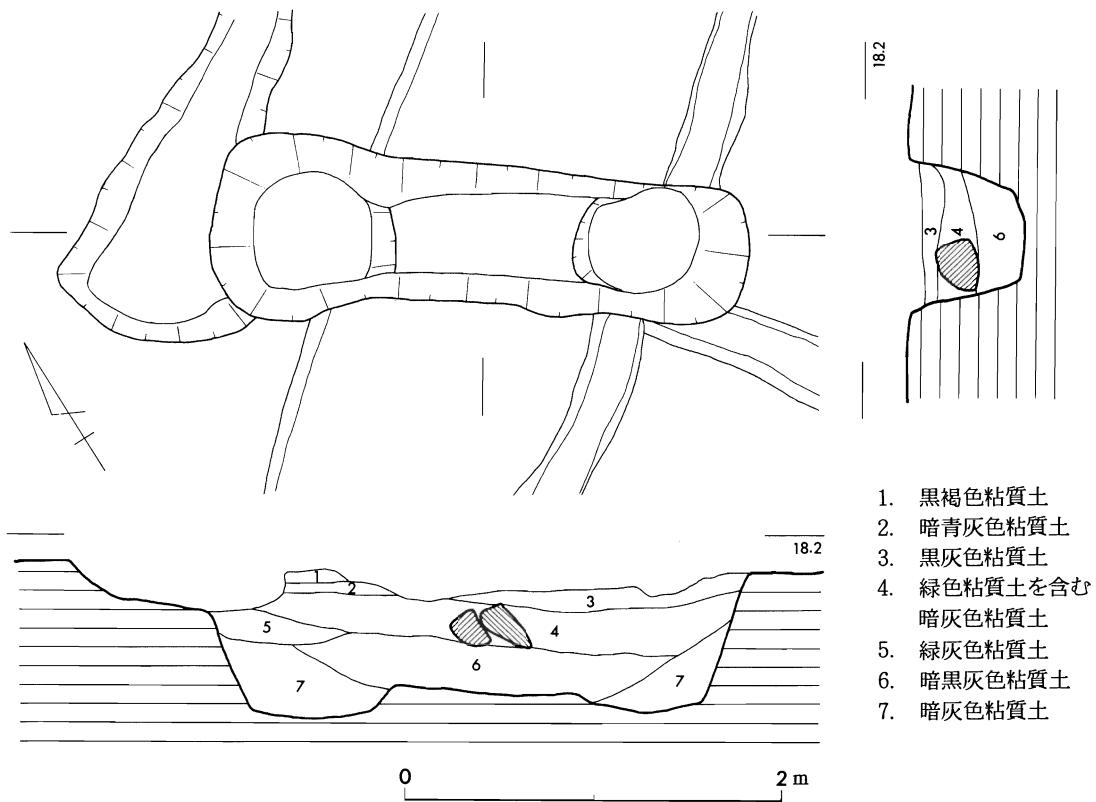


図30 SX07実測図

S X 0 8

E-3・4区で検出した。墓壙は長さ2.7m、幅0.6mで、検出面からの墓壙の深さは0.5~0.6mである。墓壙は壙底の傾きから東を頭位とすると考えられる。主軸はE-14°-Nである。

墓壙西端に平面円形のピットが付属しており、墓壙底よりも若干低くなっている。墓壙に伴う副室と考えられる。墓壙底東側には、溝が残り、壙内に組まれた木棺の痕跡であろう。墓壙横断セクションでも両壁に沿って立ち上がる土層があり、これも棺の痕跡を示すものと考えられる。

また、床面には石が一つあり、遺体の枕として使われたもの可能性がある。

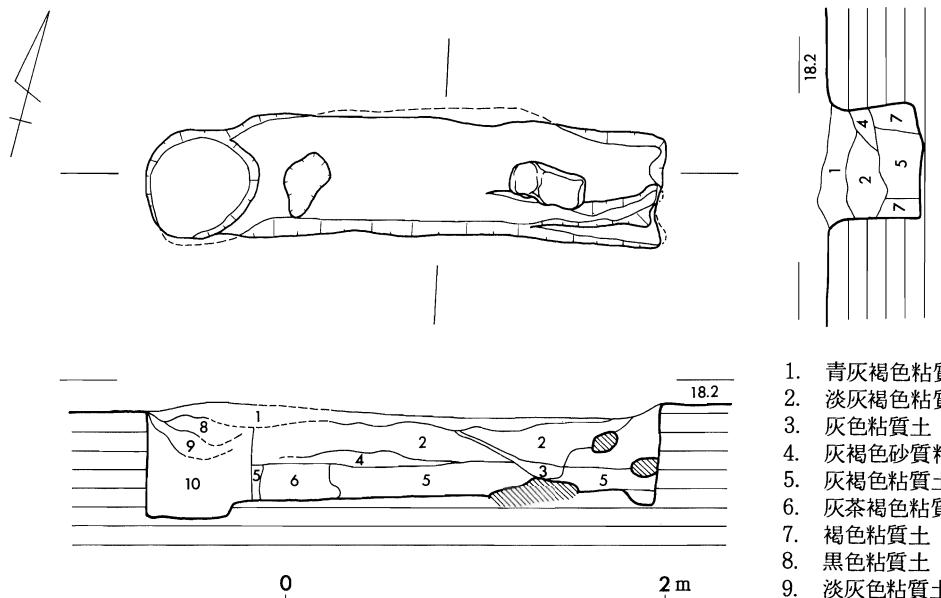


図31 SX 08 実測図

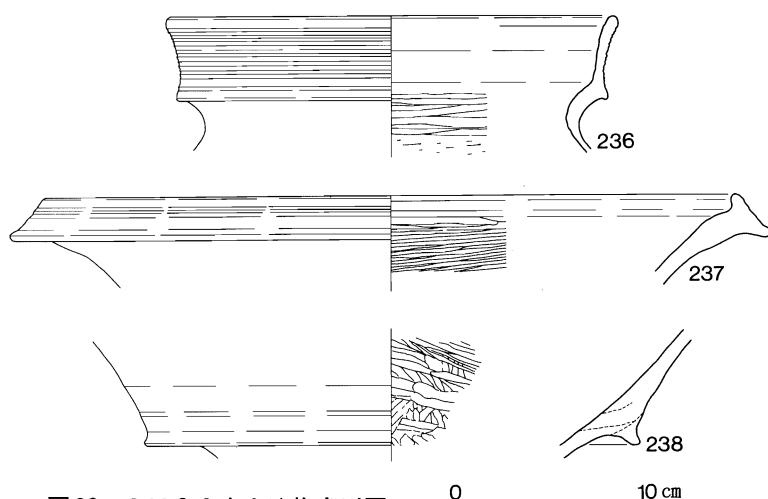


図32 SX 08 出土遺物実測図

墓壙西端のピットからは、草田3期の遺物が出
土しており、この墳墓群では比較的古い時期のものと考えられる。

遺物には甕、器台、鼓形器台がある。甕236は複合口縁のものであるが、外面に貝殻腹縁2単位の

平行線文を施し、口縁内面にはヘラミガキが認められる。器台237は大形のもので、鼓形ではない器台であろう。238は大形の鼓形器台で、上台外面には平行線などの装飾をもたない。伴う遺物がなく、時期不明のSX05も、このSX08と想定される頭位方向は全く逆であるが、向きをそろえて作られており、同一時期が考えられる。

S X 0 9

調査区北西隅H' - 4・5区で検出した。その上面にはH-5区土器溜りがあったが、その土器と墓壙内から出土した土器には時期差があり、特にその土器溜りとの関連はないものと考えた。

ちょうど調査区西辺に沿って検出されたため、全容はうかがうことができなかつた。墓壙は調査区内では約6mを測り、さらに調査区外に伸びている。中央付近で横断面を確認しており、ここでの幅は1.0mである。底はゆるやかなカーブを描く平らな底となっているが、若干の凹凸がある。検出面からの墓壙の深さは0.5mである。墓壙は壙底の傾きから南東を頭位とすると考えられる。主軸はS-45°-Eである。

これによれば長い木棺が納められていたものと考えられる。横断面を確認した墓壙中ほどの地点では、墓壙側壁に沿って杭が1本打ち込まれており、壙中に組まれた木棺を固定していたものの可能性があるが、棺材の痕跡などは検出できなかつた。

墓壙のほかに周辺では数多くのピットを検出している。この墓壙に伴うものもある可能性がある。また、墓壙によって切られているものもあり、さらにはかの遺構も重複している。

墓壙内から土器が出土している。239は、径34cmにも復元できる大形の鼓形器台で、上台部下端に貝殻腹縁による密接した2段の列点文がある。内面にはヘラミガキがあるようだ。240もやはり大形の高杯で、精良な粘土を使用している。脚部に3方向の円形の穿孔がある。杯底面には放射状のヘラミガキ、脚外面にも丁寧なヘラミガキが残る。

これら遺物は、草田4期のもので、この遺物をともなうSX09は、この墳墓群では比較的古い時期のものである。

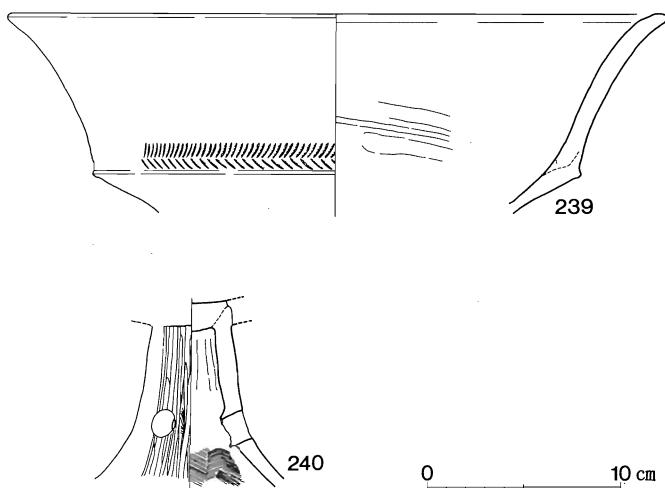


図33 S X 0 9 出土遺物実測図

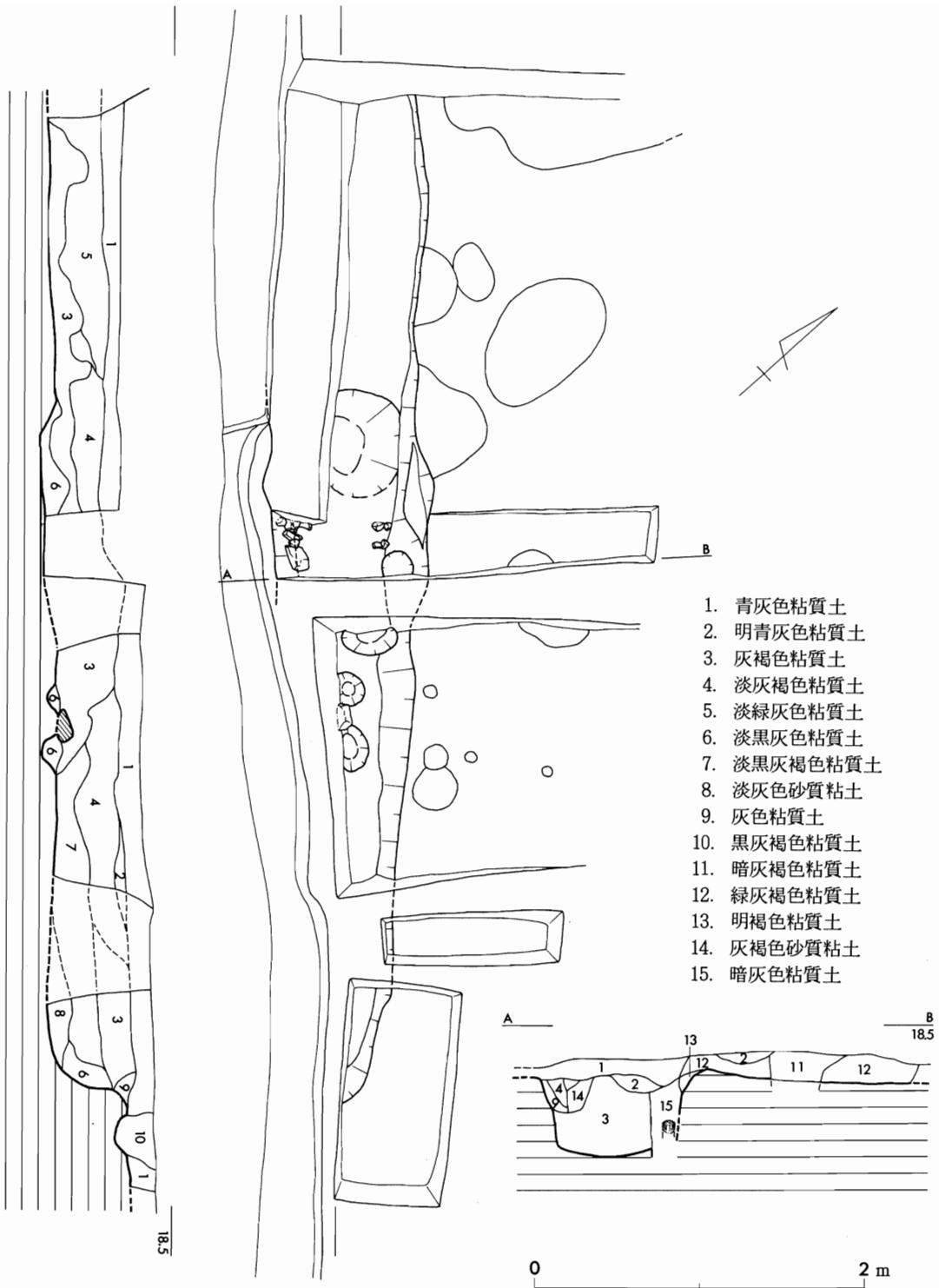


図 34 S X 09 実測図

S X 1 0

調査区北東部のA-5区で検出した。黄褐色砂礫土に掘り込まれた土坑に壺が1個体分、正立するように埋められており、壺棺と考えられる。土坑は上面のさしわたし0.45m、深さ0.25mを測る。坑内には石があり、こうした石で壺を固定していたものだろう。壺は上部からの土圧によってつぶれた状態で出土している。

この壺棺は、他の遺構より高いレベルから出土しており、壺棺埋納坑の底が他の遺構を検出した面に相当する。土器溜りがかなり上面で検出されていることがあわせ考えると、遺構検出面は、本来の遺構が掘り込まれた面より、かなり下である可能性を示した。

この壺棺241は直立に近い比較的高い口縁部、やや縦長の球形の体部をもったもので、口径18cm、器高37cm、体部最大径32cmである。口縁部は端部に狭い平坦面を作り、外面にはナデによる軽いアクセントがある。体部外面には細かいハケメが施され、内面はヘラケズリされている。この土器の胎土には摩耗した円礫を含み、在地のものとは異なる。搬入されたものである。

壺棺によく見られる底部穿孔などはみられない。

この遺物は、体部の球形化などの特徴から、草田7期に含まれるものと考えておきたい。

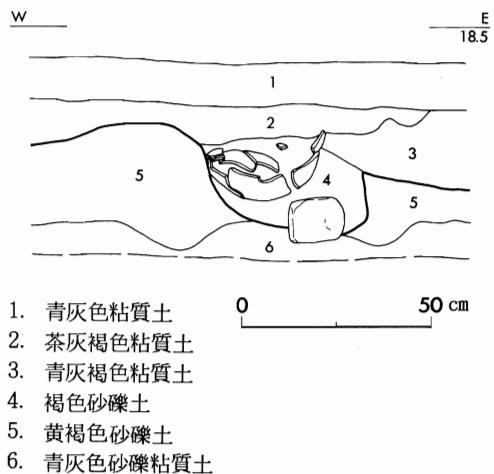


図35 SX 10 出土状況断面図 (1/20)

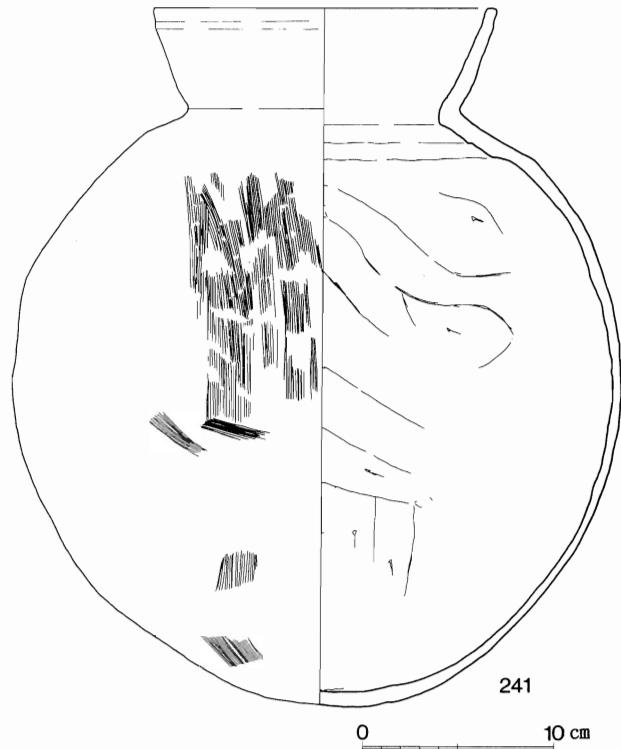


図36 SX 10 出土遺物実測図

S B 0 1

FG-3・4区で検出した。桁行3間、梁間1間の掘立柱建物である。主軸をN-37°-Wの北西にとる。規模は桁行5.8m、梁間3.2mで、桁行の柱穴の間隔は1.8~2.0m、梁間の柱穴の間隔は3.2mである。柱穴の検出面からの深さは0.5~0.7mである。

柱穴内にはいずれも黒褐色の粘質土、灰色粘質土がつまっており、これらには炭がおびただしく含まれていた。柱の痕跡や、抜取り痕などは確認できなかった。柱穴掘り方の平面形は不整な円形である。

この柱穴からは土器が出土しており、西列の南から2番目の柱穴から甕242、東側の北から1番目の柱穴から低脚杯244、2番目の柱穴から鼓形器台243が出土している。これらは草田4期の遺物で、この建物上層で見つかっているF-3区土器溜り出土遺物（草田7期）より古く、土器溜りに先行してこのような掘立柱建物が建てられていたと考えられる。

複合口縁の甕242は、薄く引き出したような口縁部をもち、端部は丸くおさめる。複合口縁部の稜の突出度は低い。内外面を強いヨコナデで仕上げる。鼓形器台243は、比較的長い筒部をもち、残存する脚台部も比較的高く、カーブして開く。外面の加飾はない。低脚杯244はしっかりとふんばる脚部、深い杯部をもつ、やや厚手の小ぶりなものである。内外面を丁寧に磨いている。

S B 0 2

調査区東寄りのBC-5区で検出した。竪穴住居で、3.0×3.5mの隅丸方形のプランを呈する。検出面からの遺構の深さは15cmである。この周辺一帯は炭がかなりの濃度で散布しており、遺構発

見の手立てとなった。住居址四隅はほぼ東西南北を向く。

現状保存の方向を摸索しはじめた調査の最終段階で検出しておらず、柱穴などと考えられるピットは完掘していない。

床面のはば中央部に焼土があり、炉と考えられる。セクションで観察すると焼土の分布範囲より狭い、さしわたり約60cmのピットがあり、この炉は床面を掘りくぼめるものであったと考えられる。北および西の隅で柱穴と考えられるピットを確認している。その他にもピットがある。

また、壁沿いには部分的ではあるが幅15cm、深さ15cmの溝が検出されている。これは壁体となる板材を受けるための溝と考えられる。

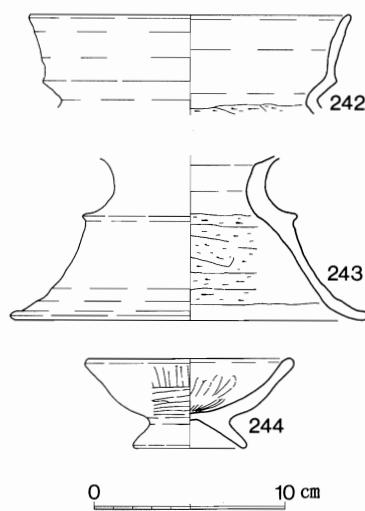


図37 S B 0 1出土遺物実測図

この住居址の床面でSD05の続きを検出した。つまり、

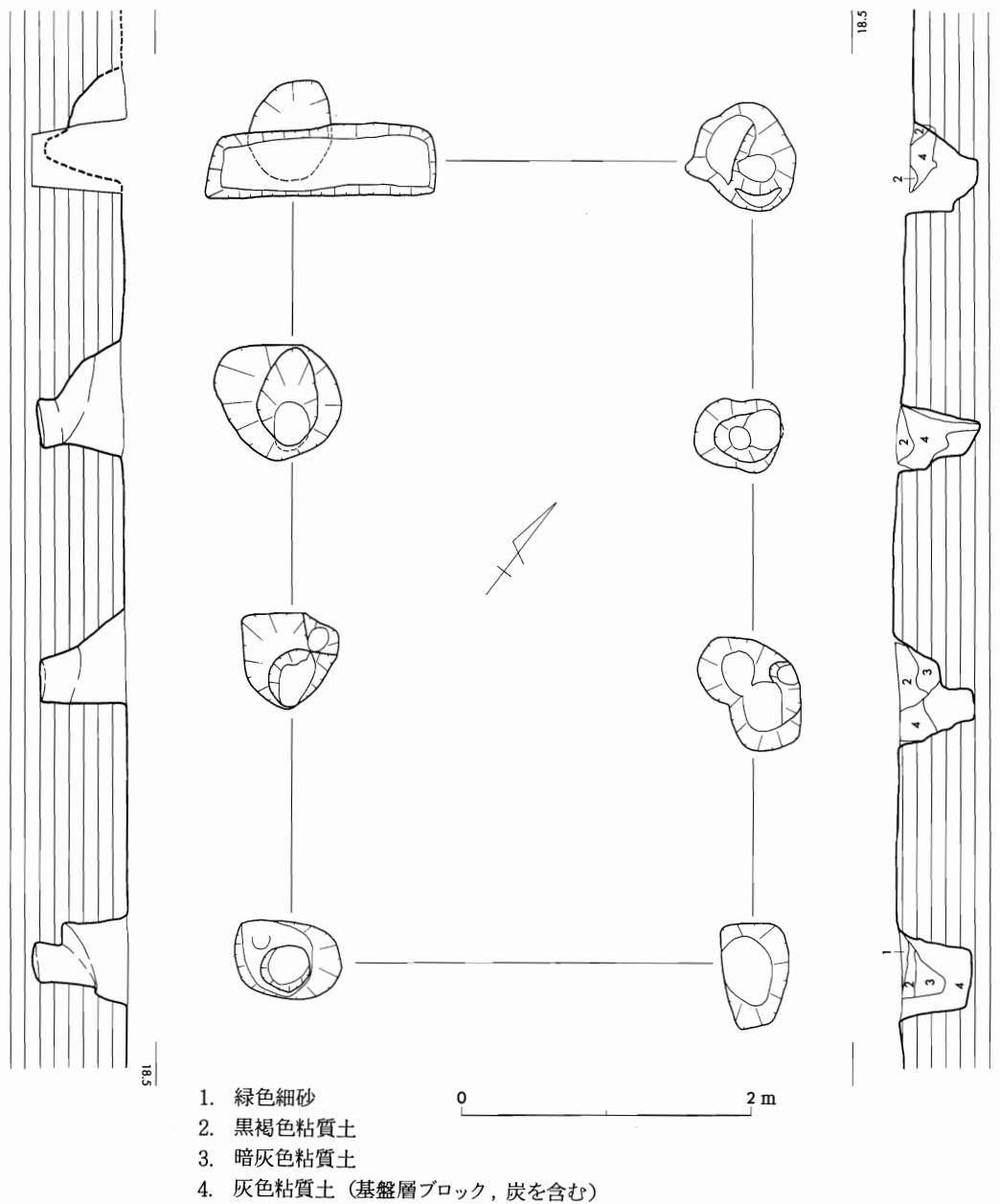


図38 SB01実測図 (1/50)

このSB02は、SD05を切って作られた遺構と言える。

この住居址覆土中から検出した土器は、草田7期のもので、甕245は比較的厚い口縁部をもち、端部はなでて、狭いながらも平坦面としている。高杯杯部246はやや厚手のもので、杯部底からゆるやかに立ち上がっている。壺口縁247は、端部近くに複合口縁状の稜をもつ小形品である。

SK13~17

DE-4区で検出した。鍵の手に曲がる浅い溝内にピットが掘り込まれている。最も東のSK13は平面円形のプランで径85cm、検出面からの深さ45cmを測る。SK14は長径65cmの平面楕円形、検出面からの深さは30cm、SK15は径60cm、検出面からの深さは20cmである。SK16は長径60cmの楕円形、検出面からの深さは25cm、SK17は長さ1m、幅25cmの長い土坑で、検出面からの深さは20cmであるが、さらに部分的に深いピットがある。遺構の性格など明らかにできなかった。

これらの遺構に明らかに伴う遺物はない。

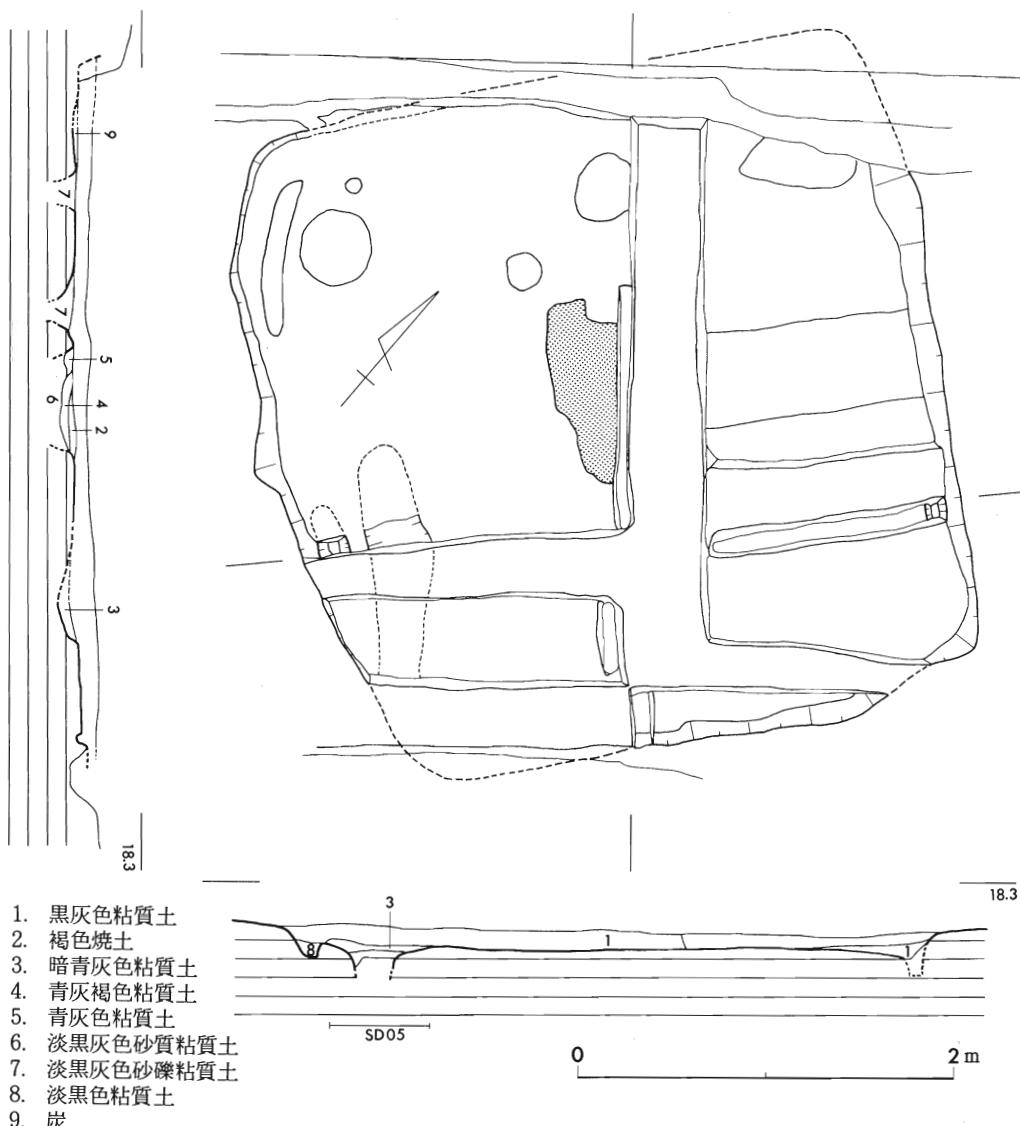


図39 SBO 2 実測図

S D 0 5

C-4・5、D-4区で検出した。鍵の手に曲がる浅い溝で、延長は約7mである。溝南西端は広がって深い土坑状になる。この土坑部分は長辺1.2m、短辺1.0m、検出面からの深さは25cmである。溝部分は幅60~20cm、深さ10cmである。遺構内には黒色粘質土、淡黒色粘質土が堆積している。

遺構の性格などは明らかにできなかったが、この溝の土坑部分はSX07を切っており、溝部分はSB02によって切られるという関係にある。また、この溝内から出土した土器は、草田6期のもので、CD-4区土器溜り資料と多くが接合し、両者は密接な関係があるものと考えられる。

CD-4区土器溜り（図43~47）

調査区中ほどで検出した土器溜りで、近畿系の遺物を含むなど、注目される土器溜りである。

この土器溜り出土の資料には、在地の甕、壺、高杯、鼓形器台のほかに、搬入されたと考えられる近畿系の甕、壺および瓦質土器がある。草田6期の標識となる遺物群である。

甕口縁部248~270は、比較的高く、やや厚手の口縁をもち、その端部にはあまり端部調整を行わず、端部をわずかに外方へ折り曲げる手法がみられる。複合口縁部の稜は、比較的外方へ突出する。肩部には文様をもたないものが多く、文様があるものは、大きく間の開く列点文ないし波頂の広い波状文を施す。全形のわかる甕271では、比較的高い口縁部は端部をかすかに折り曲げ、底部にはかすかな平底をとどめる。肩部から体部2/3付近まで横方向の粗いハケメを施す。272はやや厚手の口縁部をもつもので、複合口縁部の稜はさほどの突出はみせない。底部にはやはりかすかな平底をとどめる。肩部には粗いわずかな波打ちのある平行線文がある。271と類似する273~275、277~280はほぼ同様の口縁部をもち、273では肩部に幅の広い特徴的な粗いハケメ、275は肩部に雑な綾杉状の刺突文をもっている。大形の甕276は直立に近い口縁部をもち、その端部には平坦面を作っている。肩部にはハケ原体と考えられる薄い板による刺突文がめぐる。壺286、289は高くあまり開かない口縁部をもち、口縁端部ではさほどの調整は行わない。287は高く、かなり開く口縁をもち、その端部は外方に折り曲げている。

高杯290は大きく開く浅い杯部をもち、その端部はかすかに外に折り曲げている。291は底部に脚接合時の刺突痕をとどめるものである。脚部292、293は長い筒部から開く裾部をもっている。鼓形器台297~305は上台、下台間が縮約したもので、筒部は痕跡化し、内面が稜に近づいたものである。

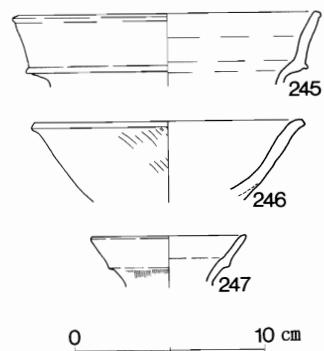


図 40 SB02出土遺物実測図

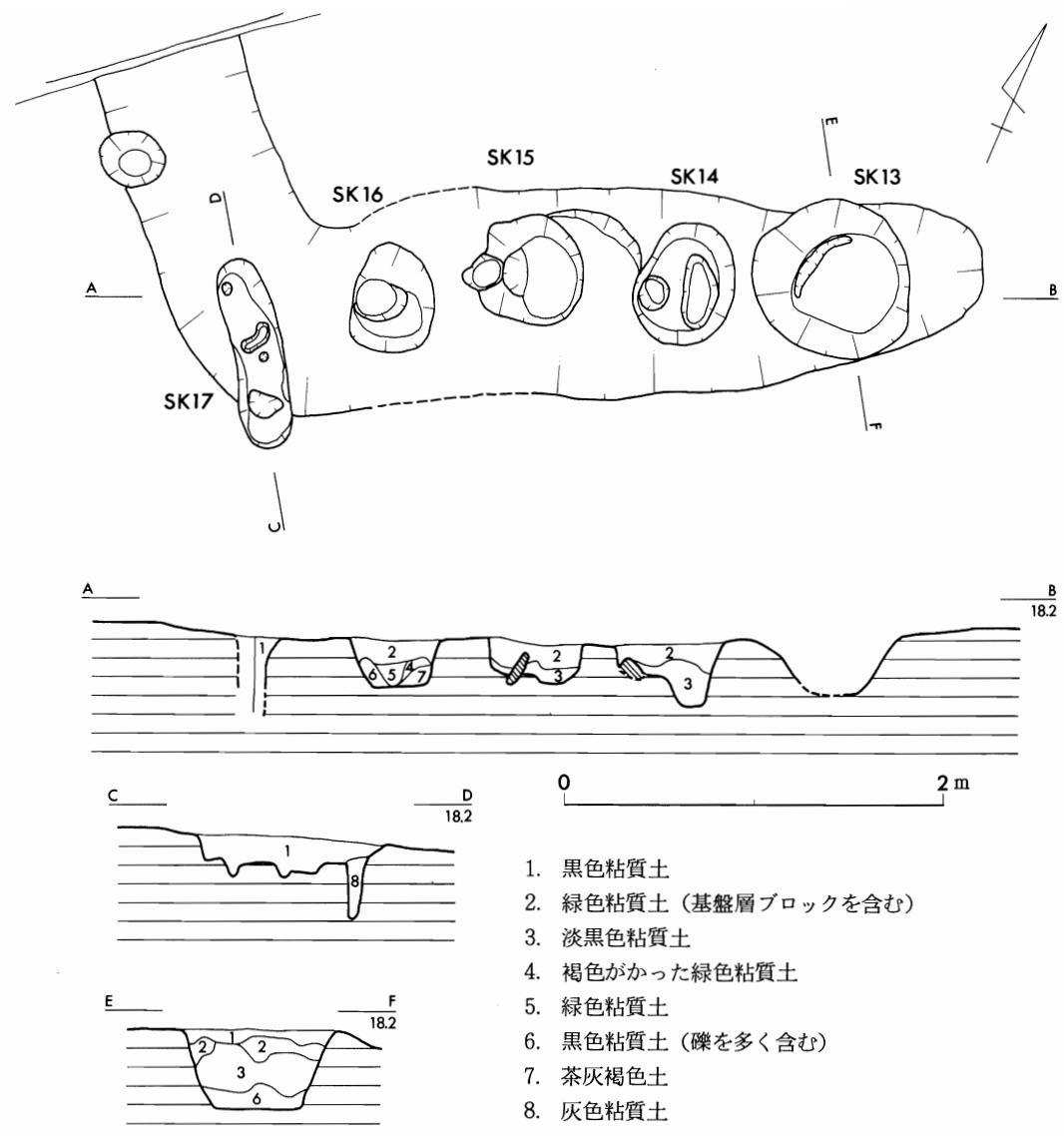


図 41 SK 13 ~ 17 実測図

300の下台内面には2本線のヘラ記号がある。

単純口縁の甕281~283は外面にタタキメをとどめるもので、在地の土器と異なる胎土、焼上がりを呈しており、近畿地方からの搬入品と考えられる。281は体部外面に水平のタタキ、体部内面はヘラケズリの後なでている。282は体部外面と口縁の一部に右上がりのタタキ、体部内面はヘラケズリを施す。283はごく薄いつくりのもので、口縁外面にはヨコナデ、内面にはヨコハケ、体部外面には右上がりの細かいタタキのちハケでなでている。体部内面にはヘラケズリの痕跡をとどめ

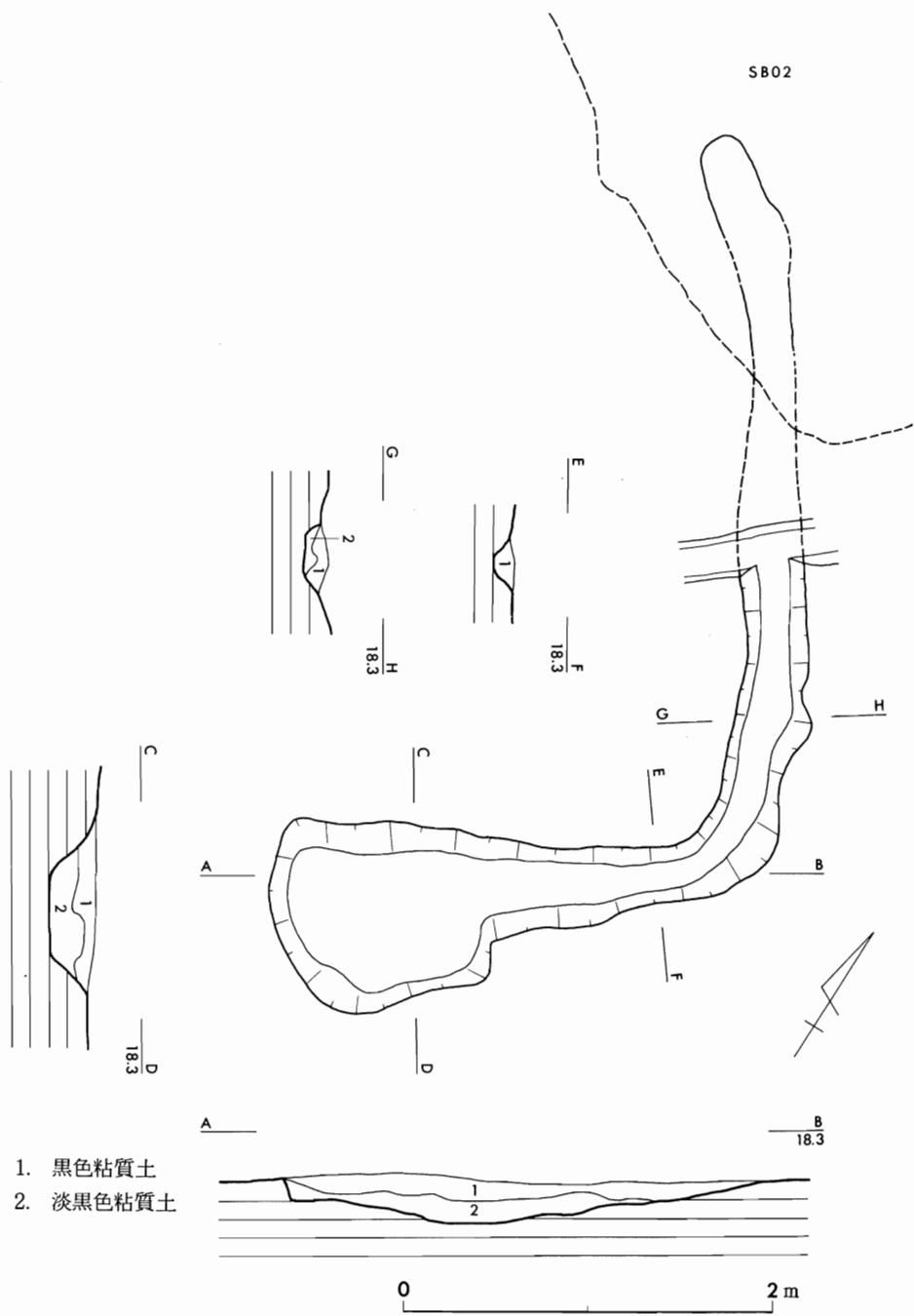


図 42 SD05 実測図

る。これのみ暗褐色を呈し、河内産の庄内甕¹⁴⁾と考えられる。285はやはり単純口縁の甕で、外面は丁寧になでられているが、多面体状に平坦面が連続しており、おそらくタタキによって成形されたものと考えられる。底部にはかすかな平底をとどめる。

瓦質土器284は、半球形を呈する体部の対向する位置に1対の把手を付けたものである。把手は平面長方形で、中央に径0.9cmの丸い穿孔がある。外面には辺2～3mmの格子状の細かいタタキメ¹⁵⁾がのこり、内面にはこれに対応する当て具の痕跡が凹面になって残っている。把手上下の体部外面にはヘラ描きの沈線がめぐっている。把手は体部に穿孔した穴に挿入して接合される。外面は灰色を呈し、軟質である。この土器は、朝鮮半島製のものである可能性が高い。

単純口縁の壺288は、やや高く外反する口縁をもつ。扁平な体部はタタキで成形されるが、その後丁寧に磨かれ、光沢をもっている。底部付近の外面はヘラケズリとハケメが残り、底部はかすかな平底である。頸部から肩部にかけての内面は口縁接合時の指頭圧痕をとどめ、以下は途中で向きをかえるハケメとなり、分割成形を示す。この他に直口壺294、小形丸底鉢295、鉢296がある。

306はヤスと考えられる鉄製品で、土器溜り中から出土した。逆刺のある先端部が2本、柄に取り付ける四角柱の茎部が1本組み合って、ヤスを構成していたものと考えられる。しかし、これらは折損しており、直接の接点はない。先端部は2本とも断面多角柱状を呈する。この部分の長さはそれぞれ11.5cm、10.5cm、茎部は残存長15.7cm、太さは0.9～0.5cmである。

DE-3 区土器溜り（図48、49）

調査区中ほどで検出した土器溜りで、甕、高杯、低脚杯、器台、鼓形器台からなる。草田6期の遺物である。

複合口縁の甕307は、比較的高い口縁部をもち、その端部は丸くおさめ、かすかに内側に折り曲げる。体部は倒卵形を呈し、底部は尖り底となっている。肩部は強いヨコなでによりくぼむ。複合口縁の甕308～312、314～317、319～322も比較的高い口縁をもつもので、その端部は外方へ折り曲げている。肩部には太い横方向のハケメを留め、間の広い列点文、波頂間の広い波状文をもっている。313は単純口縁の甕で、口縁部は大きく外反する。近畿庄内式の器形であるが、胎土は在地のものと区別できない。318は複合口縁の甕であるが、内傾する低い口縁部をもつものである。

高杯323は厚手の杯部で、内外面とも磨いている。低脚杯の可能性もある。324は小形のやや深い杯部に中実の脚部が接合するものである。高杯325はゆるやかなカーブをもって立ち上がるやや深い杯部をもち、中実の脚部が接合する。外面および杯部内面には赤色顔料が塗布されている。326は大きく開く低い脚部で、4方向の円形の透し穴がある。小ぶりなやや深い杯部が付くものと考えられる。327は山陰地方通有の円筒形の脚部で、ゆるやかに開く。低脚杯328はやや深い杯部をもつ。

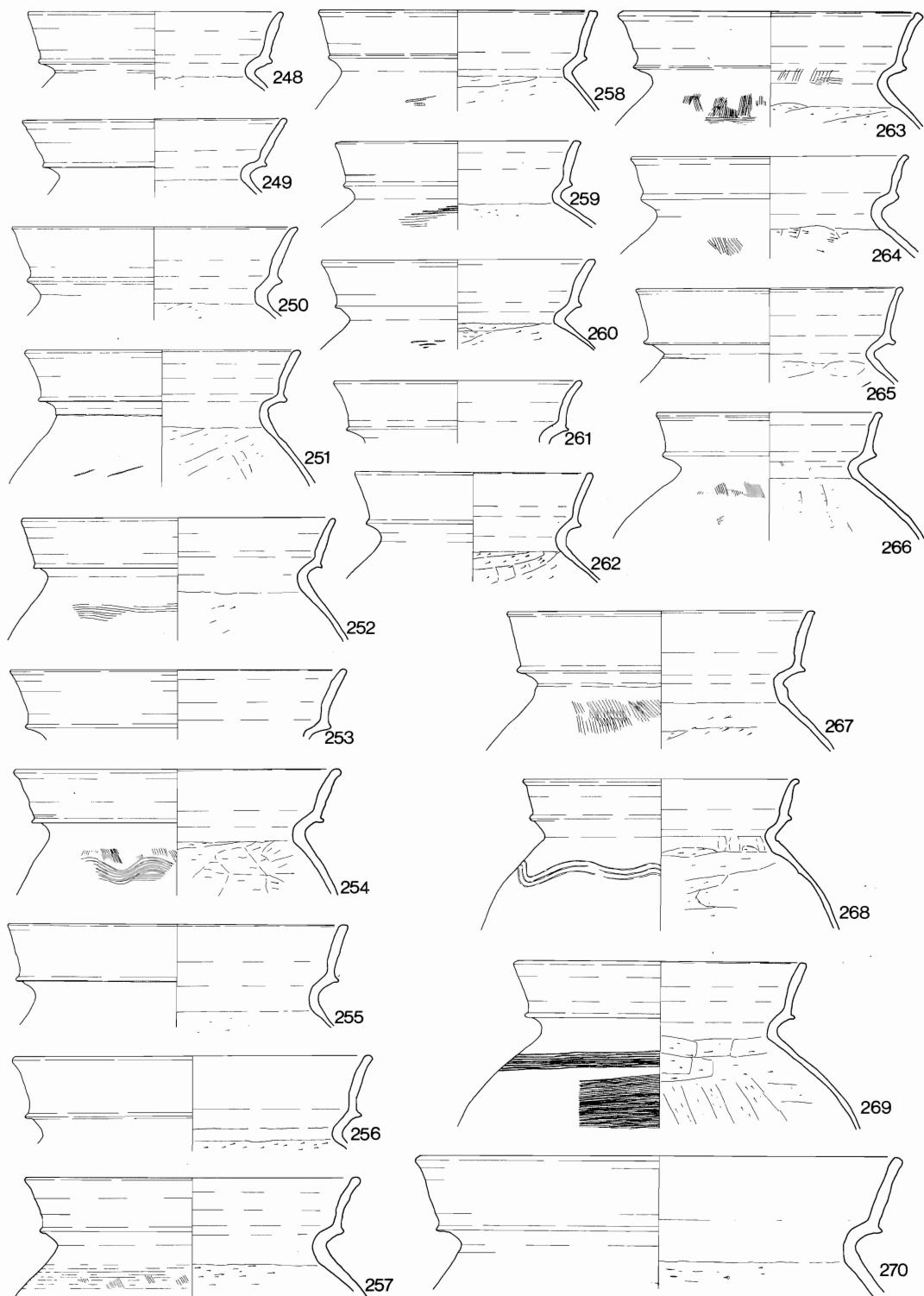


図43 CD-4区出土遺物実測図(1)

0 10cm

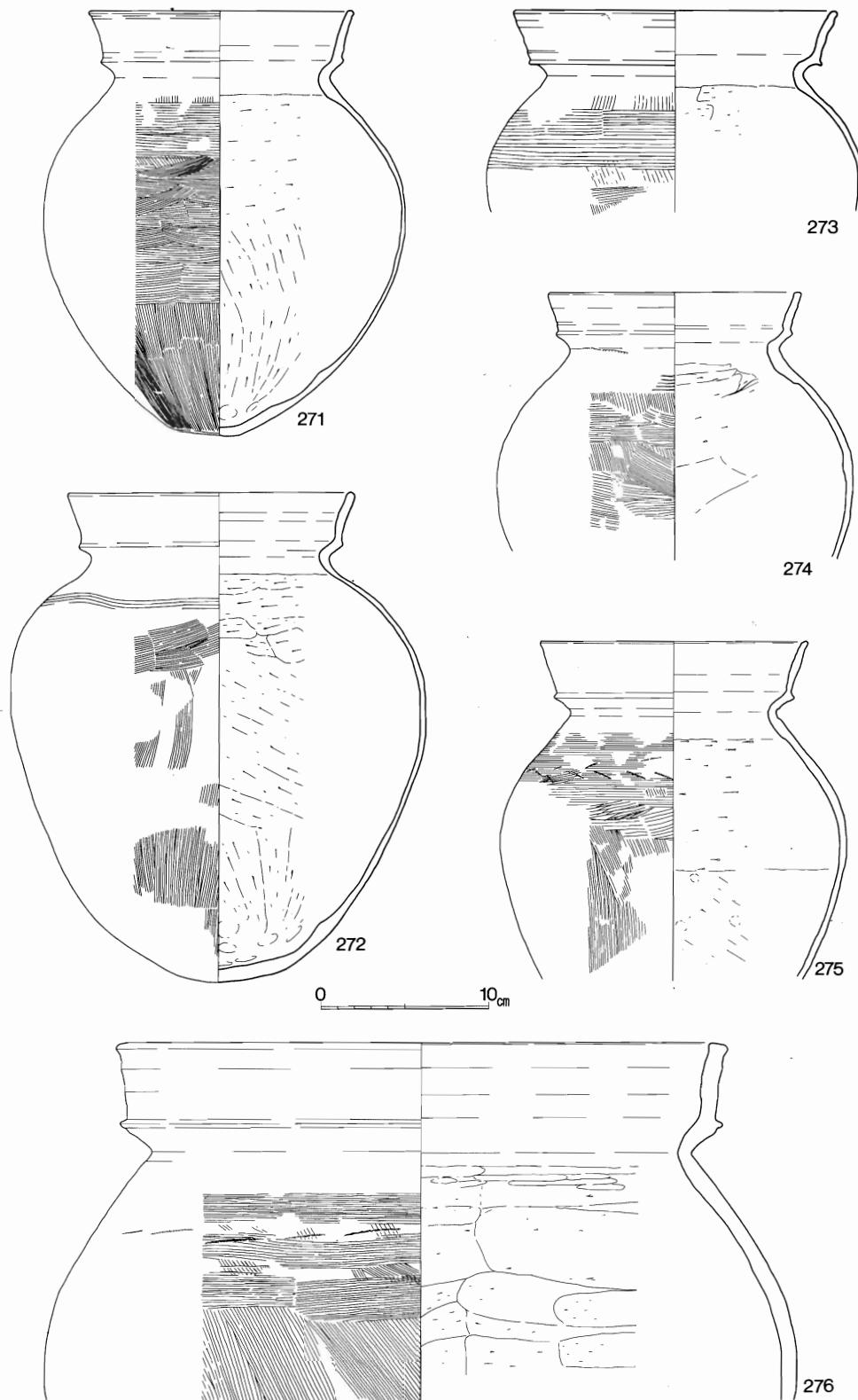


図44 CD-4区出土遺物実測図(2)

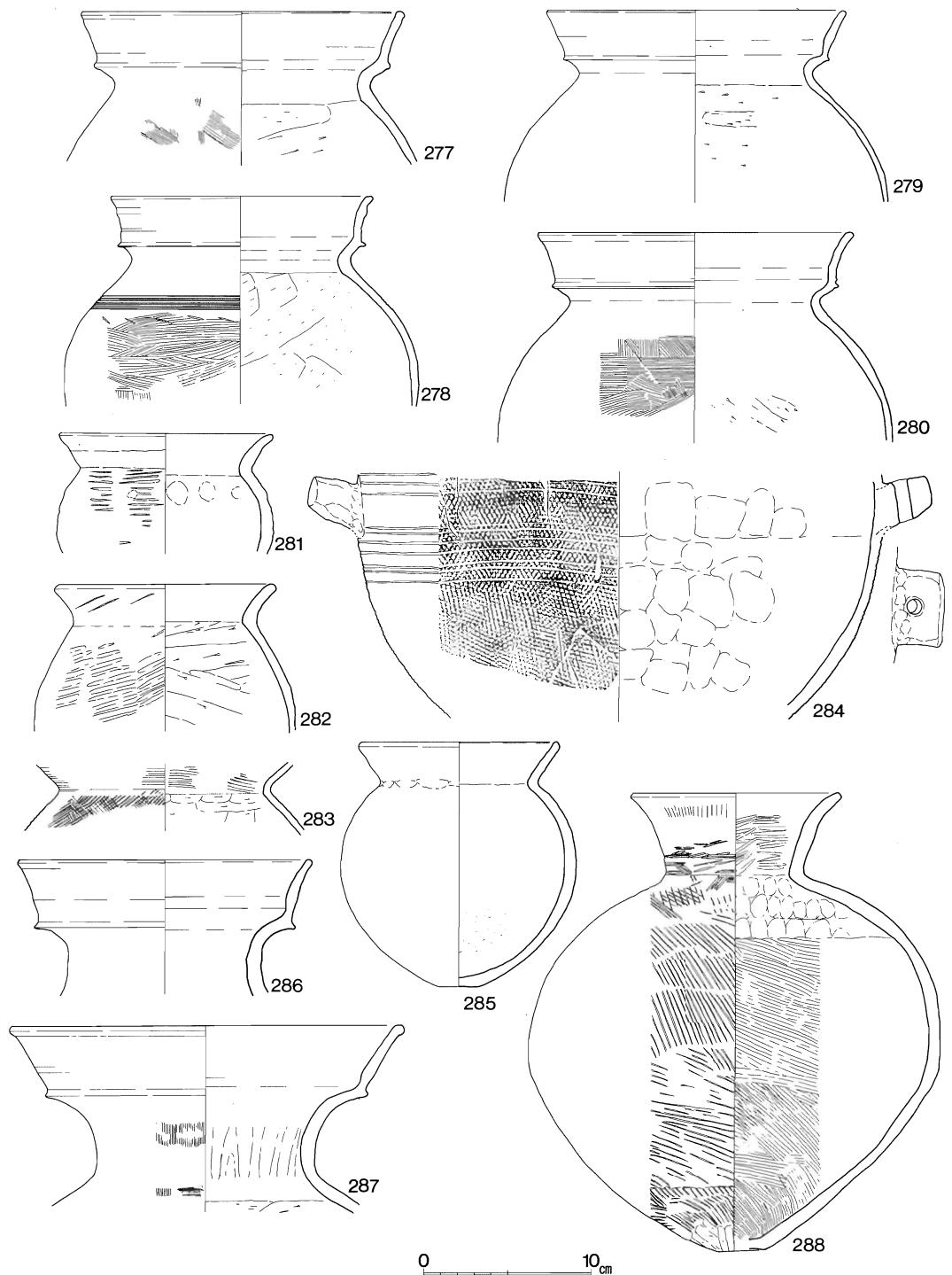


図45 CD-4区出土遺物実測図(3)

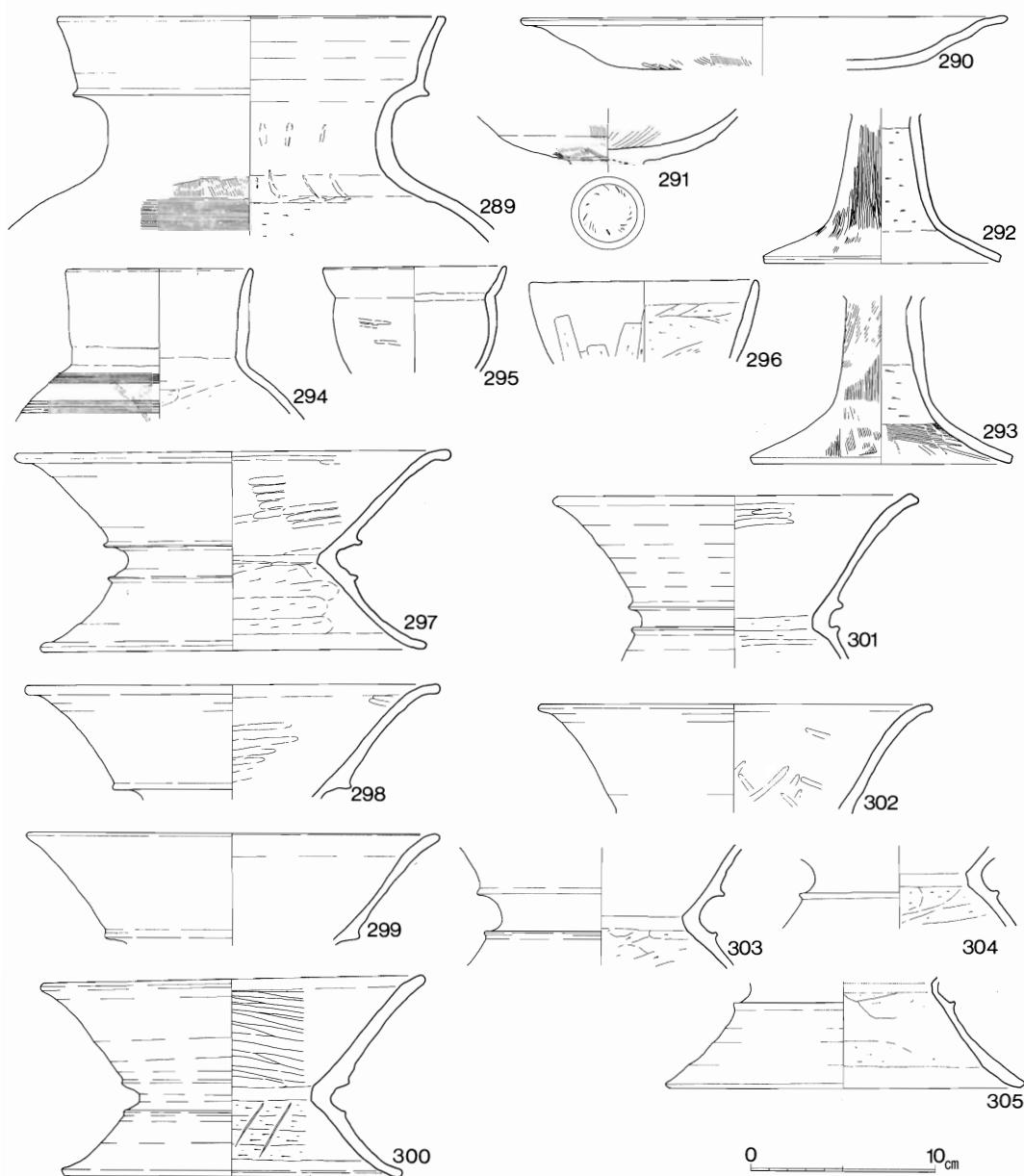


図46 CD-4区出土遺物実測図(4)

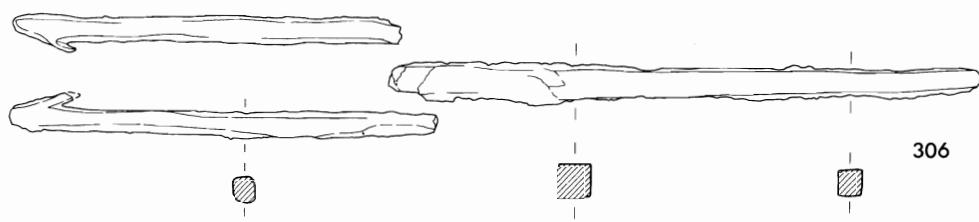


図47 CD-4区出土遺物実測図(5)

329は小形器台と考えられ、中空の脚部に上台、下台が付く。上台口縁直下には1条の突帯状のアクセントがある。脚裾部には4方向の円形の穿孔がある。外面および上台内面には赤色顔料が塗布される。330は脚部からの貫通穴はないものの、329と同様な器形のものと考えられる。

331～333は鼓形器台で、上台、下台間が縮約したものである。

F - 3 区土器溜り（図50～54）

調査区西より検出した土器溜りで、甕、壺、小形丸底壺、小形丸底鉢、高杯、低脚杯、鼓形器台などからなる。草田7期の標識となる遺物群である。

複合口縁の甕334は、全体に厚手のもので、口縁部は調整を十分行わず、端部は波うっている。体部はわずかに縦長ながらもほぼ球形となる。肩部に波頂間の広い波状文をもつ。外面は細いハケで縦になでた後、太いハケメを横に施して仕上げる。このヨコハケは胴部最大径以下まで及ぶ。内面はヘラケズリを行い、底部付近には指頭圧痕をとどめる。体部側面には焼成後の縦に細長い穿孔がある。335は比較的高い口縁部をもち、その端部は外方に折り曲げ、上面に平坦面をつくる。体部はほぼ球形で、肩部に太いハケ原体を利用した2段の平行線が施されている。336は肩部に太い工具による波頂間の広い波状文をもつ。体部のヨコハケは胴部最大径以下まで及ぶ。底部穿孔が行われたものか、底部の破片を欠く。339も比較的高い口縁部を外方に折り曲げ、その上面に平坦面をつかったもので、肩部にはハケ原体による列点を施す。340も口縁端部に平坦面をつくるもので、肩部にハケ原体による列点を施す。346～349、353、354も同様の甕で、349は比較的波頂間のつまつた波状文が、354はゆるやかな波形がそれぞれ肩部に施される。354は平底の底部をもつ390のような器形と考えられる。341は単純口縁の甕で、直線的に開く口縁部はその端部を内側に肥厚させ、上面に平坦面をつくる近畿布留式の口縁をもつ。底部を欠くが、尖り気味のものになると考えられる。342～345は複合口縁のやや小形の甕で、342は球形の体部をもち、肩部にクシ状工具による太い平行沈線を施している。343には肩部に1周はしない列点文がある。350は低い脚をもつ小形の複合口縁甕で、ヘラケズリにより薄くなった底部にはヒビが入っている。体部外面は横方向のヘラミガキを丁寧に施す。口縁内面に鋭利な工具による4本のヘラ記号がある。351は単純口縁の小形の甕で、尖り気味の底部をもつ。体部外面はヘラで磨き、内面は、口縁、体部ともにヘラケズリする。352は小形の複合口縁甕で、口縁外面は縦方向のヘラミガキ、体部外面はハケで仕上げる。355は内傾する短い複合口縁甕で、球形の体部をもつものと考えられる。

複合口縁壺356は口縁端部をなでて凹面をつくる。やや細長い球形の体部をもつ。肩部に波頂間の開いた波状文が施される。357はやはり複合口縁の壺だが、口縁は頸部から大きく開き、端部は外方に折り曲げる。頸部下に突帯が貼付られ、球形の体部をもつ。358もやはり複合口縁の壺だが、

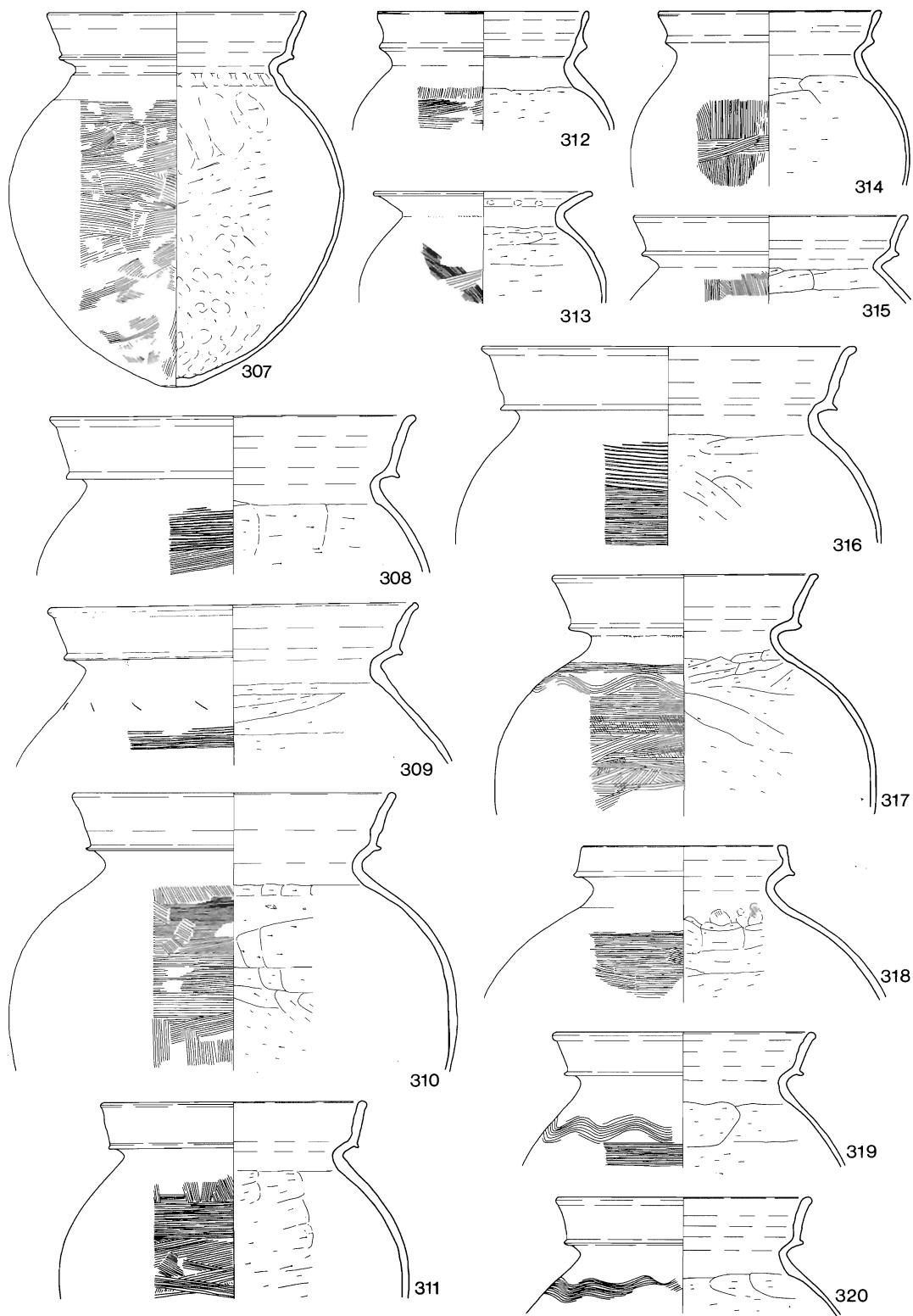


図48 D E - 3 区出土遺物実測図 (1)

0 10 cm

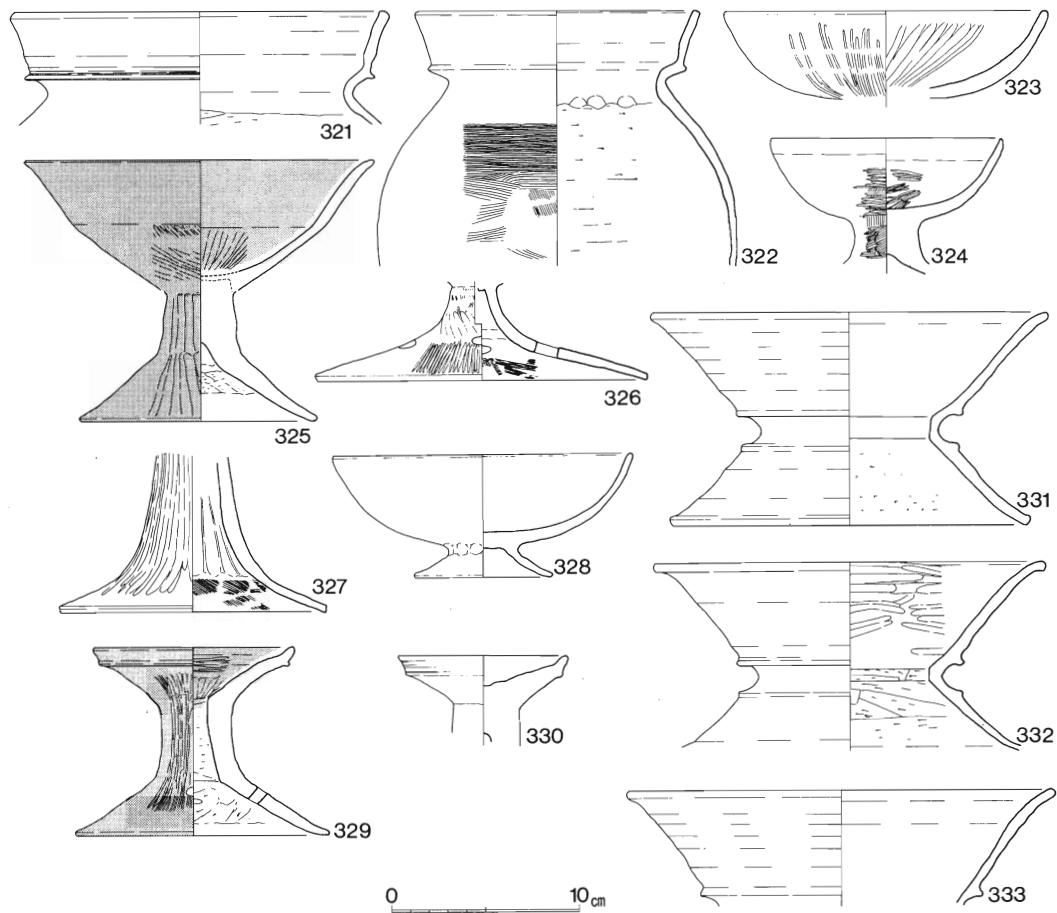


図49 D E - 3 区出土遺物実測図（2）

頸部から口縁部にかけては厚手で、体部はヘラケズリによりごく薄く仕上げられる。口縁端部に平坦面をつくる。底部は不安定だが平底となり、穿孔されたものか破片を欠く。359は単純口縁の壺で、直線的に高く立ち上がる口縁は端部で平坦面をつくる。頸部下に突帯が貼付られている。360は複合口縁の直口壺で、外面には縦方向のヘラミガキがある。361は単純口縁の壺で、口縁部は大きく外反し、端部は上方に引き上げる。体部外面はヘラミガキで仕上げられ、その下にタタキの痕跡をとどめる。362～364は小形丸底壺で、扁平な体部から直線的に立ち上がる口縁部をもつ。362には脚が接合するものと考えられる。364は球形の体部にやや短い口縁が接合する。365は短い口縁の直口壺で、肩部に波状文を施す。直口壺366は、直線的に大きく開く高い口縁をもち、球形の体部をもつものと考えられる。体部外面には横方向のヘラミガキ、口縁内面には暗文となるヘラミガキが施される。外面および口縁内面には赤色顔料が塗布されている。367は小形丸底鉢で、やや浅い鉢部から屈曲する口縁部に及ぶ。368は蓋と考えられ、外面にはヘラミガキが施される。370は単

純口縁の鉢で、平底をもち、体部やや深い。体部外面は横方向のヘラミガキ、内面はヘラケズリの後丁寧になでている。362、366、370の胎土は在地のものとは異なる。

371～375は高杯で、大形の371はゆるやかなカーブを経て立ち上がるやや深い杯部をもつもので、これに接合する脚部は長い筒状を呈し、杯底面には脚接合時の刺突痕をもつ。杯部外面には下半にハケメ、上半にヘラミガキが施される。内面はハケでなでた後、ヘラミガキを施す。373、375もほぼ同様のものである。372は中実の脚部で、外面および杯部内面に赤色顔料を塗布している。胎土は在地のものとは異なる。374は直線的な杯部をもつもので、内外面ともハケメの後、ヘラミガキを施す。376～378は低脚杯で、大形の376の杯部は直線的に開く。377はゆるやかなカーブで立ち上がる杯部をもつ。底部には脚部を貼り付けた痕跡をとどめる。378はやや小形のもので、杯部は内湾して立ち上り、低い脚が接合する。杯部外面はハケメ、内面はヘラミガキで仕上げる。

379～385は鼓形器台である。いずれも上台、下台間が縮約したものである。380は上台外面にクシ状工具による平行線文がある。383は筒部内面が稜線となっているものである。382、385は下台に2個1対の穿孔がある。

386、387は瓶形土器で、両者は同一個体ではない。筒状の体部をもつ386は下端近くに1対の把手を縦に付ける。この把手は体部に開けられた穴に挿入して接合している。外面にはハケメ、内面にはヘラケズリが施される。下端の口縁387は短く直立するもので、その付け根には1条の突帯がめぐる。

C - 3・4 区土器溜り（図55 388～394）

388、390は複合口縁甕で、ともに端部を外方に折り曲げるものである。388は倒卵形の体部をもち、390は平底のものである。389は瓦質土器の把手で、ヘラケズリによって面取りされ、多角柱形のものである。外面は黒灰色、断面では白色を呈する。391は大きく開く壺口縁である。高杯392は大きく開く低い脚部で、4方向の円形の透し穴がある。小ぶりなやや深い杯部が付くものと考えられる。393は鼓形器台、394は鉢で、かすかな平底をもつ半球形の体部をもつ。394の胎土は在地のものと異なる。草田6期に含まれる。

D - 5 区土器溜り（図55 395～397）

複合口縁壺395は、比較的高い口縁部をもち、その端部は外方に折り曲げる。396は単純口縁の甕である。口縁端部は丸くおさめる。高杯397は小さい杯底部から直線的に大きく広がる杯部、中実の脚柱部からさほど広がらない直線的な裾部に至る。脚裾には円形の透し穴がある。杯部内面、脚部外面にヘラミガキがある。草田6期に含まれる。

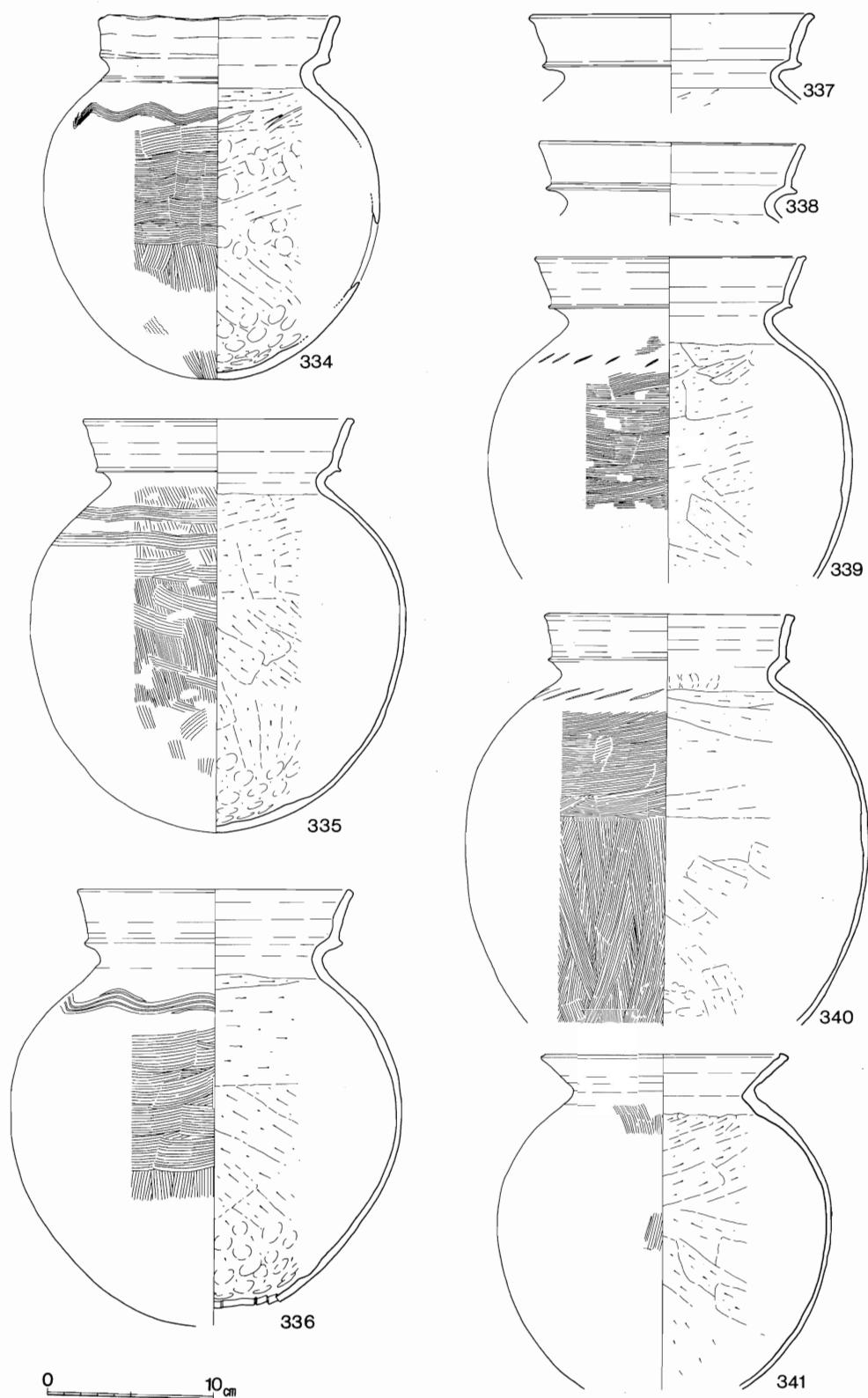


図50 F-3区出土遺物実測図(1)

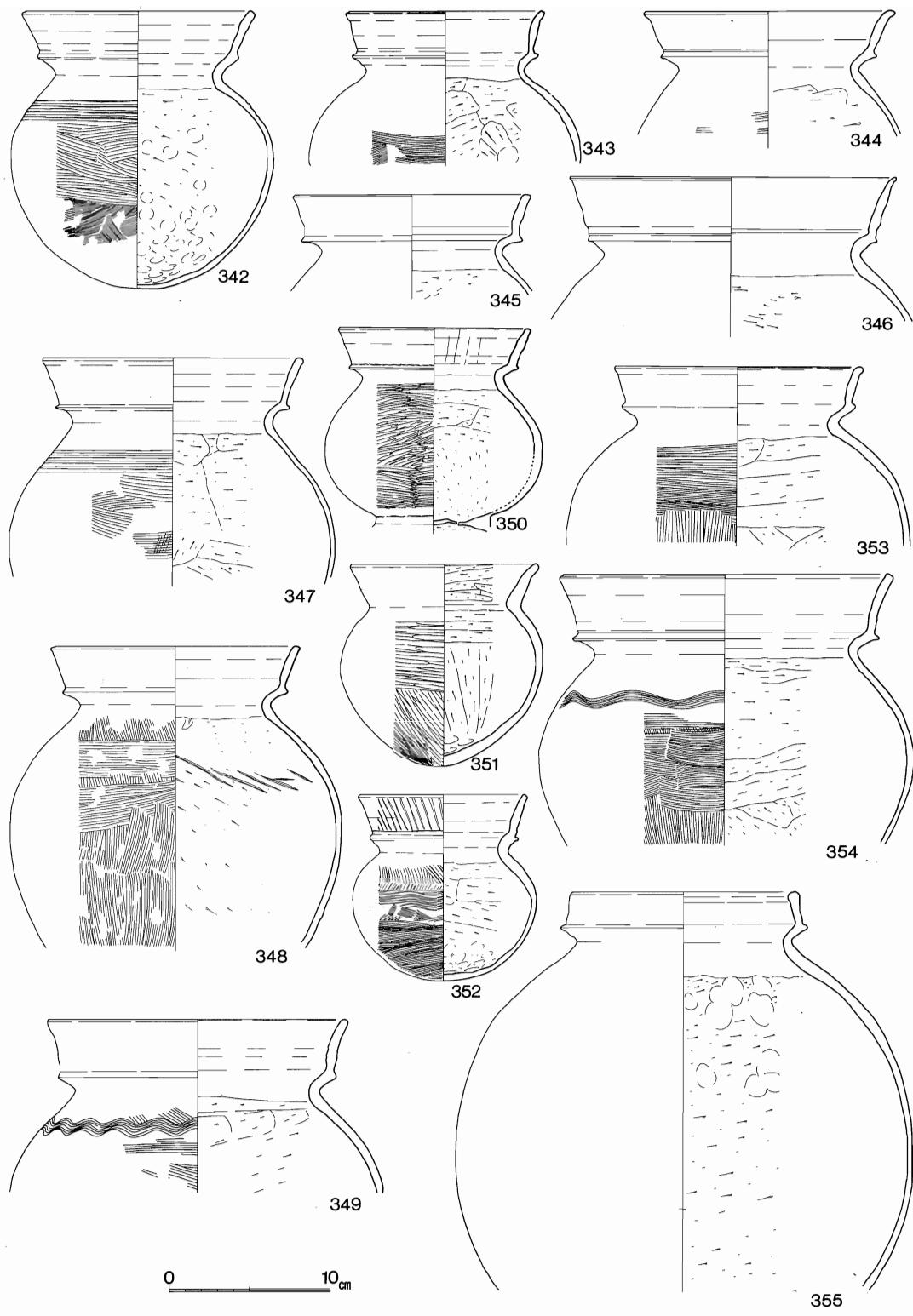


図51 F-3区出土遺物実測図（2）

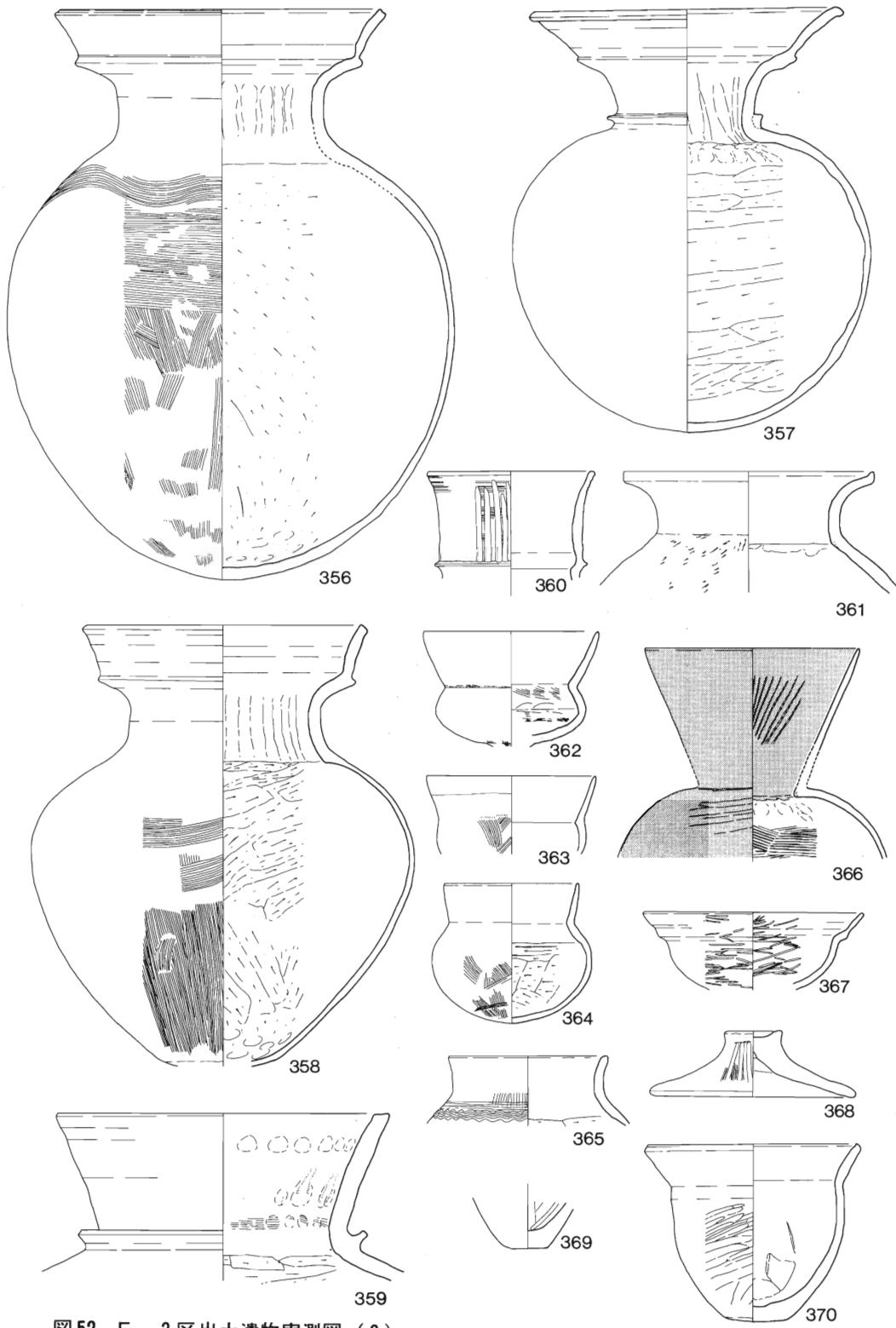


図52 F-3区出土遺物実測図（3）

0 10cm

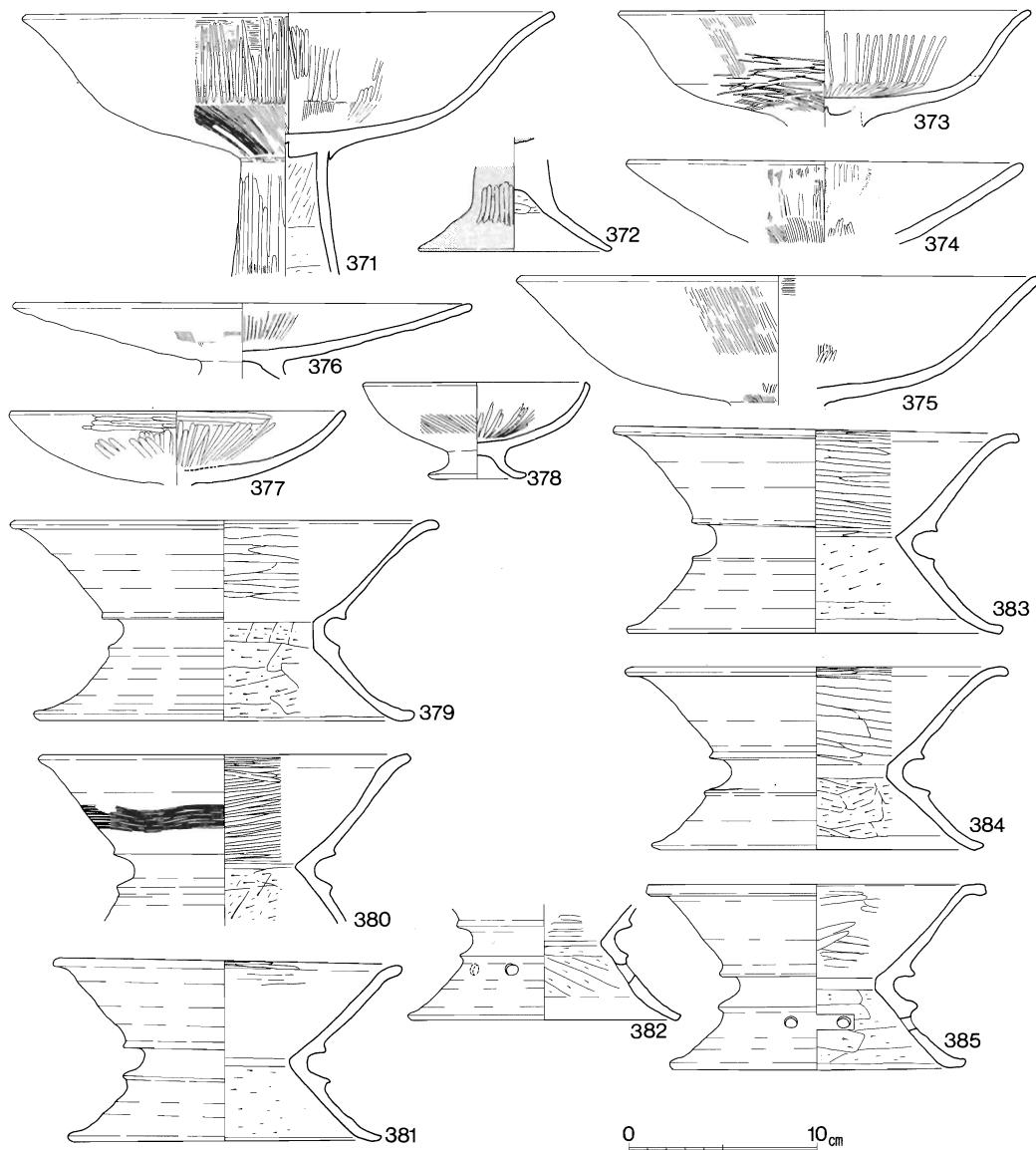


図53 F-3区出土遺物実測図(4)

E・F-2区土器溜り (図55 398~401)

398はやや小形の複合口縁甕で、球形の体部をもつ。高杯399はゆるやかなカーブをもつ杯部をもつ。内外面ともヘラミガキで仕上げる。400は大きく開く低い脚部で、4方向の円形の透し穴がある。小ぶりなやや深い杯部が付くものと考えられる。401は低脚杯で、平らな杯底部から湾曲して立ち上がる体部を有する。杯部は内外面ともヘラミガキで仕上げる。脚部は杯底部に貼り付けている。脚内面に2本線のヘラ記号がある。草田6期の遺物である。

E・F-4区土器溜り

402～412がE・F-4区

出土遺物である。402～407

は複合口縁の甕で、口縁端部を外方に折り曲げるもの、平坦面をつくるものがある。

403の口縁部は比較的薄く、複合口縁部の稜にはさほどの突出はない。408は複合口縁壺で、口縁端部は外方に折り曲げる。

低脚杯409はやや深い杯部をもつ。脚はやや高く、円形の穿孔がある。410は小形の鉢で、平底をもつ。口縁は外方に折り曲げ、その際の指頭圧痕をとどめる。鉢411は、体部外面および底面にタタキの痕跡をとどめる。小形の器台412は内外面とも粗いハケで仕上げられる。411、412の胎土は在地のものと異なる。草田6期のものであろう。

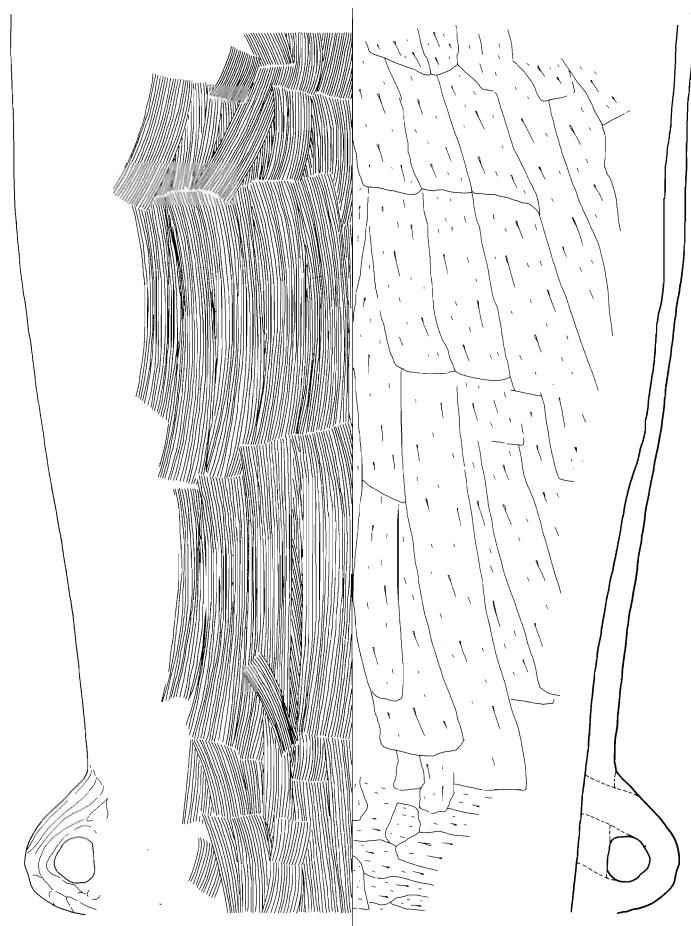


図54 F-3区出土遺物実測図(5)

0

10cm

G-6区出土遺物

単純口縁の壺413は直線的に広がる口縁部をもつ。やや縦長の体部をもち、平底の底部をもつ。口縁内外面、体部上半は粗いハケで仕上げ、体部下半は細かくヘラミガキを行う。体部各所には調整の下に粘土紐を積み上げた痕跡が観察できる。これに対応するように内面はハケメが残っており、土器製作の工程を示すものと考えられる。これ以上の体部内面にはヘラケズリ痕をとどめる。肩部にはヘラ描きの文様がある。草田5期に含まれるものと考える。

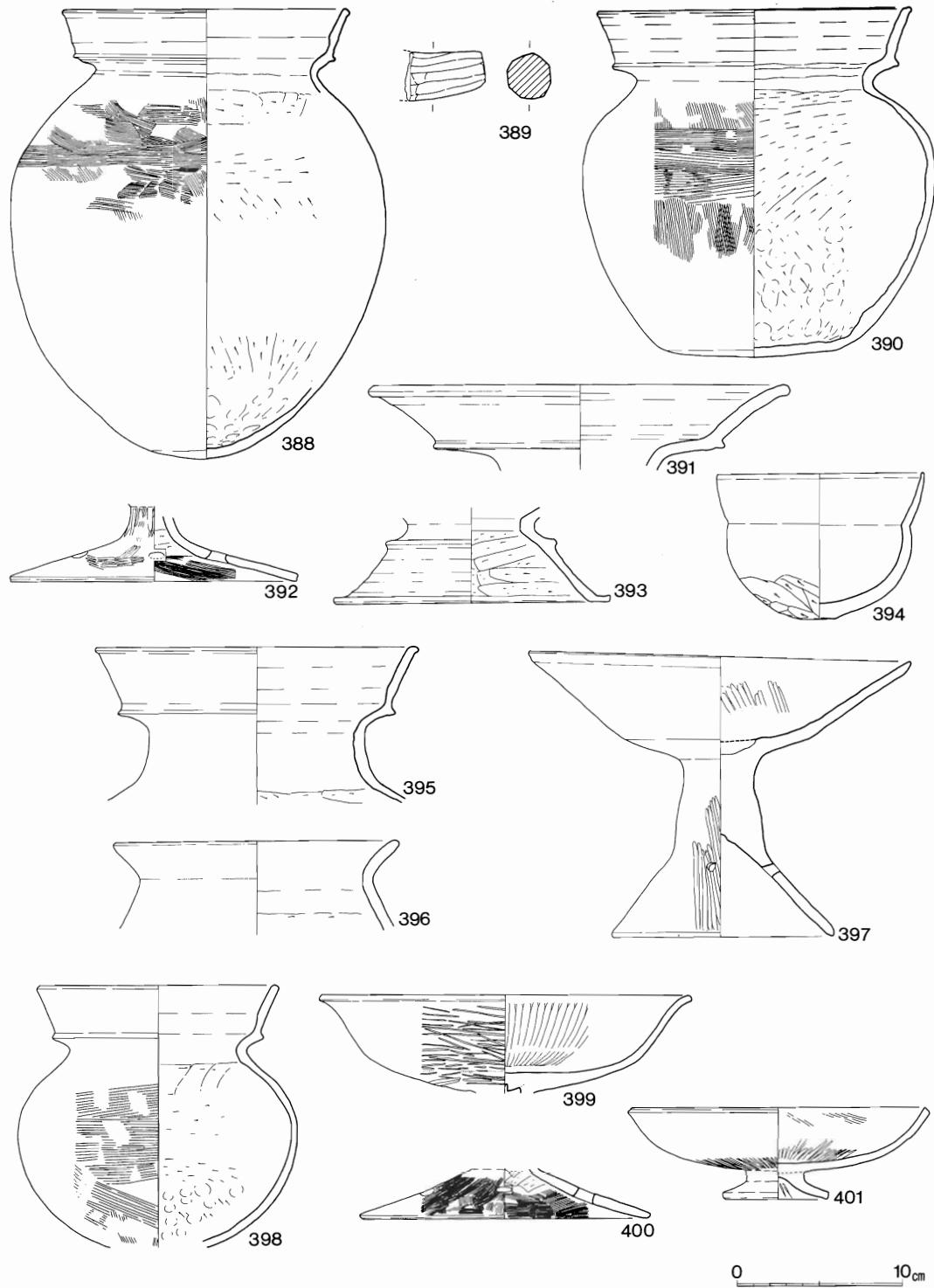


図55 C-3・4、D-5、E-F-2区出土遺物実測図

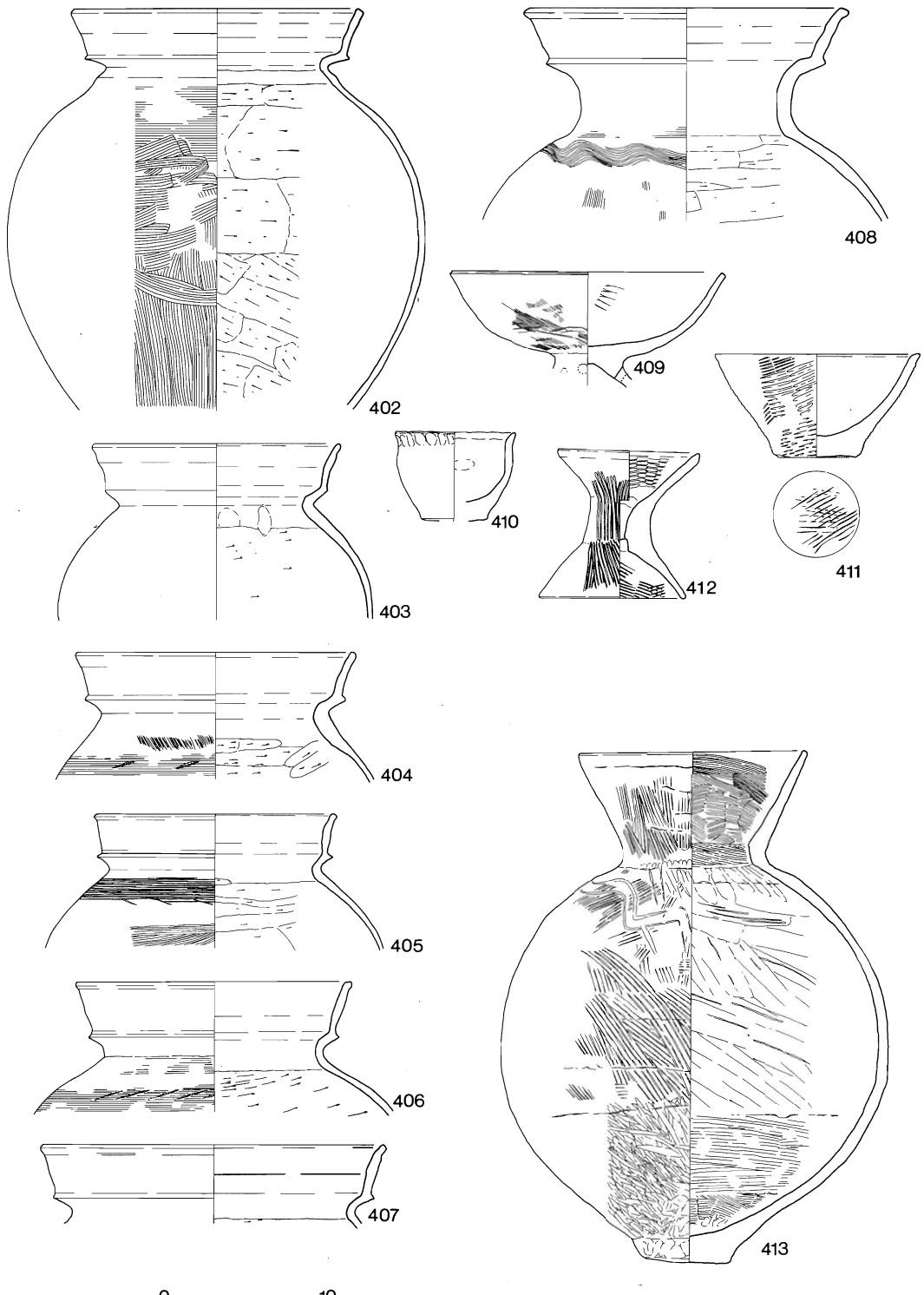


図56 EF-4、G-6区出土遺物実測図

H-2・3 区土器溜り（図57、58）

調査区南西辺に沿って検出した土器溜りで、水路SD02・03の西岸に埋没した状態で出土しているので、この土器溜りを切って、SD02・03は掘られたものだろう。

黒褐色粘質土、淡黒灰褐色土（炭を含む）を中心に遺物は包含されていた。南北5m、東西1.2mの範囲に、草田1～3期の遺物が分布しており、遺物には土器、獸骨（鹿、猪）がある。また、これら遺物に混じって、木の根もあり、当時はこうした立ち木のある環境だったものと考えられる。

甕414～417は上方へ引き上げた口縁外面に3～4条の凹線を施したもの。416は肩部に2段の列点文をめぐらす。417は1対の穴を口縁下にあけている。釣り下げたものか。外面および口縁内面に赤色顔料を塗布する。418は口縁を外方に折り曲げただけの単純口縁。複合口縁の甕419、421、423は上方へ引き上げた口縁外面にヘラによる擬凹線を描く。421は体部最大径付近に焼成後の穿孔がある。423は肩部に間隔の狭い列点文がある。420、422、424は口縁外面に貝殻腹縁と考えられる原体で平行線文を描く。420は肩部に波頂間の狭い波状文がある。

425～429は壺で、425は上方へ引き上げた口縁の外面に6条のヘラによる沈線を施し、山陰地方の土器の特徴を示すものだが、頸部は縦方向のハケメの後、ヘラで沈線を描いており、この頸部の特徴は、吉備地方の土器に通有なものである。胎土から、吉備地方の土器を手本にして、この地方で作られたものと考えられる。山陽地方との交流があったことを物語るとともに、両地方の土器の並行関係を如実に示す遺物である。426は大きく開く口縁部で、端部の平坦面に2個1対の円形の浮文を貼り付ける。427は上方にやや長く繰り上げた口縁部に貝殻腹縁と考えられる原体で平行沈線を施した後、なでて一部を消している。肩部は張らず、なだらかな体部となる。428は筒状の頸部から外反し、口縁端部には3条の凹線を引く。429も口縁に2条の凹線を施す。口縁内面に5条、頸部下半に4条のヘラによる沈線、肩部にクシ状工具による列点を施す。

底部430～434は平底で内面をヘラケズリする。430、433は外面ハケメ、431は外面ヘラミガキ。435は高杯かと考えられる破片で、内外面をヘラミガキする。鼓形器台436は上台外面に貝殻腹縁で平行沈線を施したもの。上台内面および筒部外面はヘラで磨く。437は大形のもので、復元径約30cmを計る。下台外面にはやはり貝殻腹縁の平行沈線が描かれる。

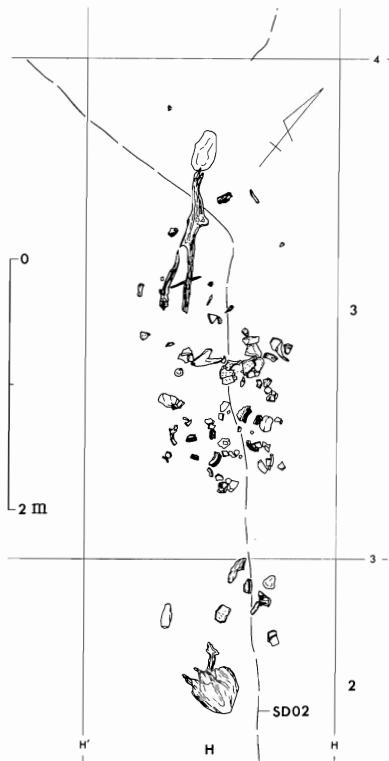


図57 土器溜り出土状況平面図(3)
H-2・3区

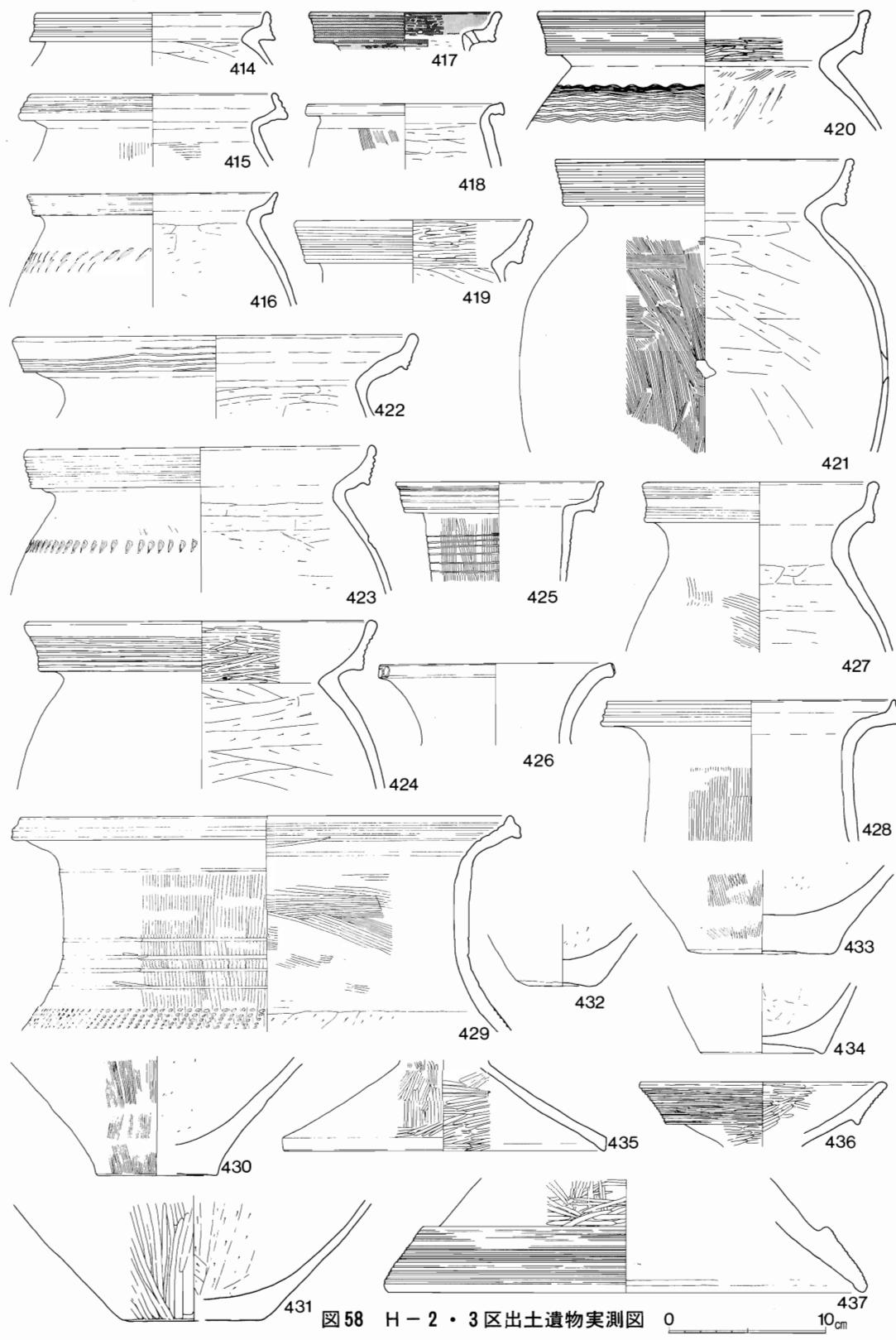


図58 H-2・3区出土遺物実測図

0

10cm

H-5 区土器溜り（図59～62）

調査区北西隅、木路SD02・03の西岸で検出した土器溜りで、土器は南北4m、東西1.5mの範囲に、高低差0.3mをもって分布していた。近畿庄内式の遺物を主体とし、これに在地の土器を混えて出土しており、特異な遺物の構成である。草田5期の遺物である。この土器溜りはさらに調査区外に広がるものと考えられる。この土器溜りに伴う遺構は精査したが、検出できなかった。下層にSX09があったが、その墓壙内から出土した土器は、この土器溜り資料より古く、直接の関係はないものと考えざるをえなかった。しかし、墓壙と土器の分布範囲はよく一致する。

438～454は在地の土器で、複合口縁の甕438～448はいずれも薄く引き出したような口縁部をもち、その端部は丸くおさめるか、ごく軽く外方に折り曲げている。複合口縁部の稜は、軽く横方向ないし下向きに突出する。449～451は複合口縁の壺で、449は薄く引き出したような口縁部が垂直に近く高く立上り、その端部は丸くおさめている。450は厚手の短い口縁をもつ。451も449同様、薄手の口縁部が高く立ち上がる。肩のよく張る体部をもつ。

鼓形器台452、453は上台、下台間がかなり縮約したものである。高杯454は長い筒状の脚をもつ。455～486、488、490は単純口縁の甕で、そのほとんどは外面に右上がりのタタキメをとどめる。これらの遺物は淡褐色ないし橙色系の色調を呈し、胎土も黒ないし茶色の摩耗した特徴的な円碟を含み、黄褐色系の在地の土器とは一見して識別できる。

455は口縁部を外方に折り曲げただけのもの。456、457は口縁端部を上方にわずかに引き上げるもの。457は体部外面のタタキの後、粗いハケを施す。458～460は口縁端部を丸くおさめるもので、460は体部のあまり張らないもの。461は口縁端部を上方にわずかに引き上げ、体部は球形に近い。外面は粗いハケの下に右上がりのタタキメが見える。内面はヘラケズリした後、上半部のみハケでなでる。462も口縁端部を上方に引き上げるが、外面にはタタキメの後、ハケなどでの調整はない。内面はハケの後、丁寧になでる。464は外反する口縁部をもち、外面はタタキの後、粗いハケでなで、内面も同様の原体で丁寧になでる。465は直線的に開く口縁をもつ。体部は粗いハケの下に左上がりのタタキが見える。内面はヘラケズリする。466は口縁端部の外面に3条の沈線をもつ。外面にかすかにタタキが見える。467、468、476は口縁端部を丸くおさめるもの、469、470は端部を軽く上方に引き上げるものである。

472、480～486、489、490はやや小形の甕で、外面にタタキメをとどめるものが多い。483はわずかに複合口縁状を呈する。490は体部下方にヘラケズリ痕を残す。

491～495は平底の底部で、外面にタタキを残す491、493、494、ヘラケズリする495がある。

496、497は鉢で、半球形の体部をもち、口縁はその端部をわずかに折り曲げる。498も同様なもの底部と考えられる。



図59 土器溜り出土状況平・立面図(4) H-5区

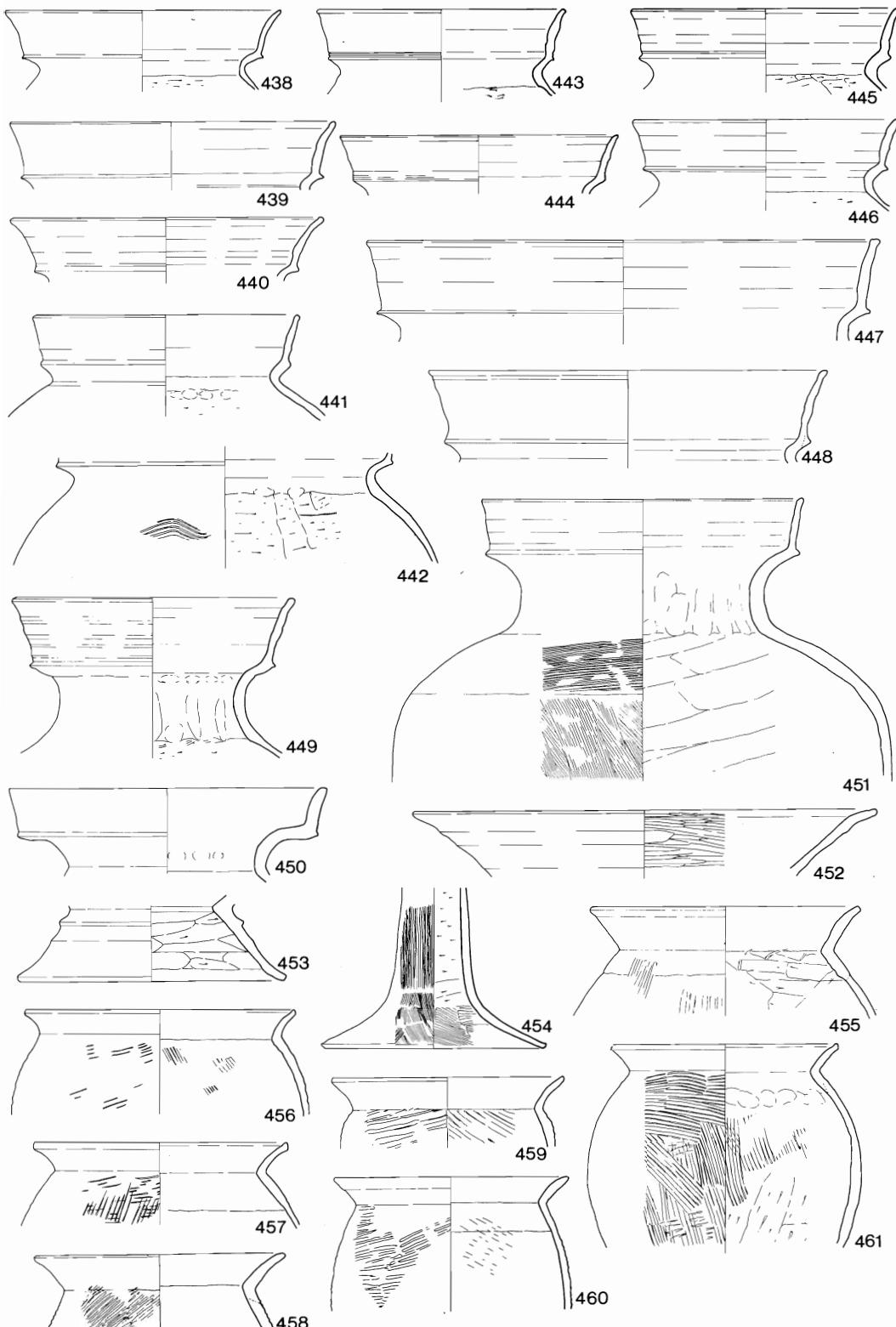


図 60 H - 5 区出土遺物実測図 (1)

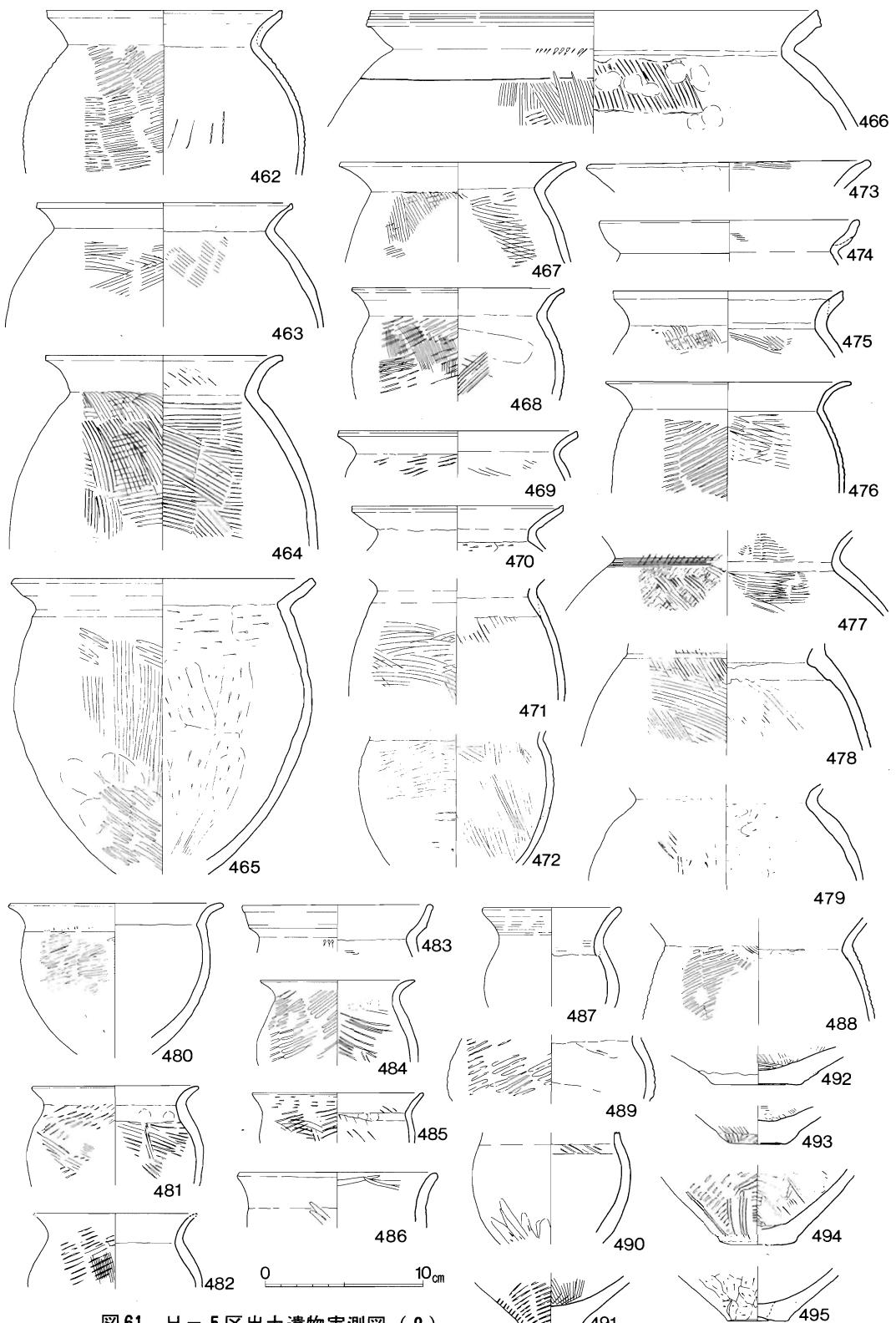


図 61 H - 5 区出土遺物実測図 (2)

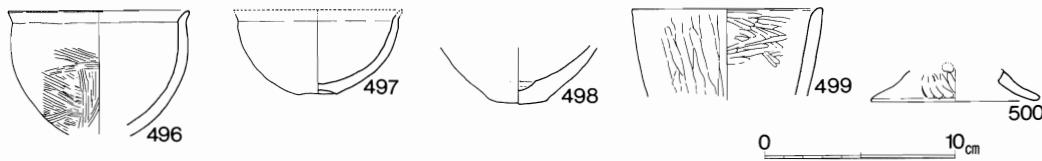


図62 H-5区出土遺物実測図（3）

D-4区上層出土遺物（図63）

包含層の上に堆積していた灰色粘土、灰褐色粘土層中からも遺物が出土している。この土層はSD02、03が埋没した際にあふれた土砂の層と考えられる。草田6～7期の遺物である。

複合口縁の甕501～511は、口縁端部を外方へ折り曲げるか、平坦面を作る。単純口縁の甕512は、口縁端を内側に肥厚させている。複合口縁の壺513は端部を外方に折り曲げ、頸部にハケ原体の板で綾杉状の文様を描く。514は端部を丸くおさめる。直口壺515はやや短い口縁、扁平な体部をもつ。

517～519は鼓形器台で、518は上台、下台間の縮約が進み、筒部内面は稜となっている。高杯杯部520はやや深い直線的な立上りをもつ。521はゆるやかなカーブの杯部。523は低く大きく開く脚部で、据に4方向の円形の透かし穴をもつ。524はラッパ状に開く脚部。525は低脚杯である。

その他の地点出土遺物（図64）

526～535はE区での出土遺物で、壺526、527は、口縁端部に3条の凹線を描く。526は口縁内面に4条の沈線がある。高杯528は脚の端部に3条の沈線がある。単純口縁の甕529は、口縁端部を丸くおさめる。530は端部に平坦面をつくる厚手のもの。高杯532は、屈曲をへて立ち上がる杯部はやや深い。533は厚手の脚部で、筒部から屈曲して開く。脚付きの椀534は杯部やや深い。内外面を丁寧に磨く。535は脚が付く甕か。

536～542はF区からの出土遺物で、単純口縁の甕536は、球形の体部にわずかに内湾する口縁部が付く。口縁端部はわずかに内側につまみあげる。複合口縁の大形の壺537は、垂直に立ち上がる口縁をもち、端部は上面に平坦面をつくる。538は截頭円錐形の土製紡錘車で、下面是わずかに内くぼみになる。径0.8cmの中心孔のほかに端部に1対の斜めの穿孔、さらにもう1つの小孔がある。小壺539は厚手で、短い口縁部をもつ。540は高杯脚で、直線状に開く。541は脚付の椀か。内外面を磨く。542はふいごの羽口と考えられる土製品で、2次的な焼成を受けている。

543～547がA、B区出土遺物である。高杯543、544は屈曲をもって立ち上がる杯部をもつ。内外面に暗文。545は小形丸底壺で内面に茶色の付着物がある。547は外面にタタキをもつ小形の甕。

548～554は調査区四周の排水路からの出土遺物。548は口縁外面にヘラ書きの沈線がある。549は単純口縁の甕。551は杯か。552は鉢。554は蓋である。中央を貫いての穿孔がある。

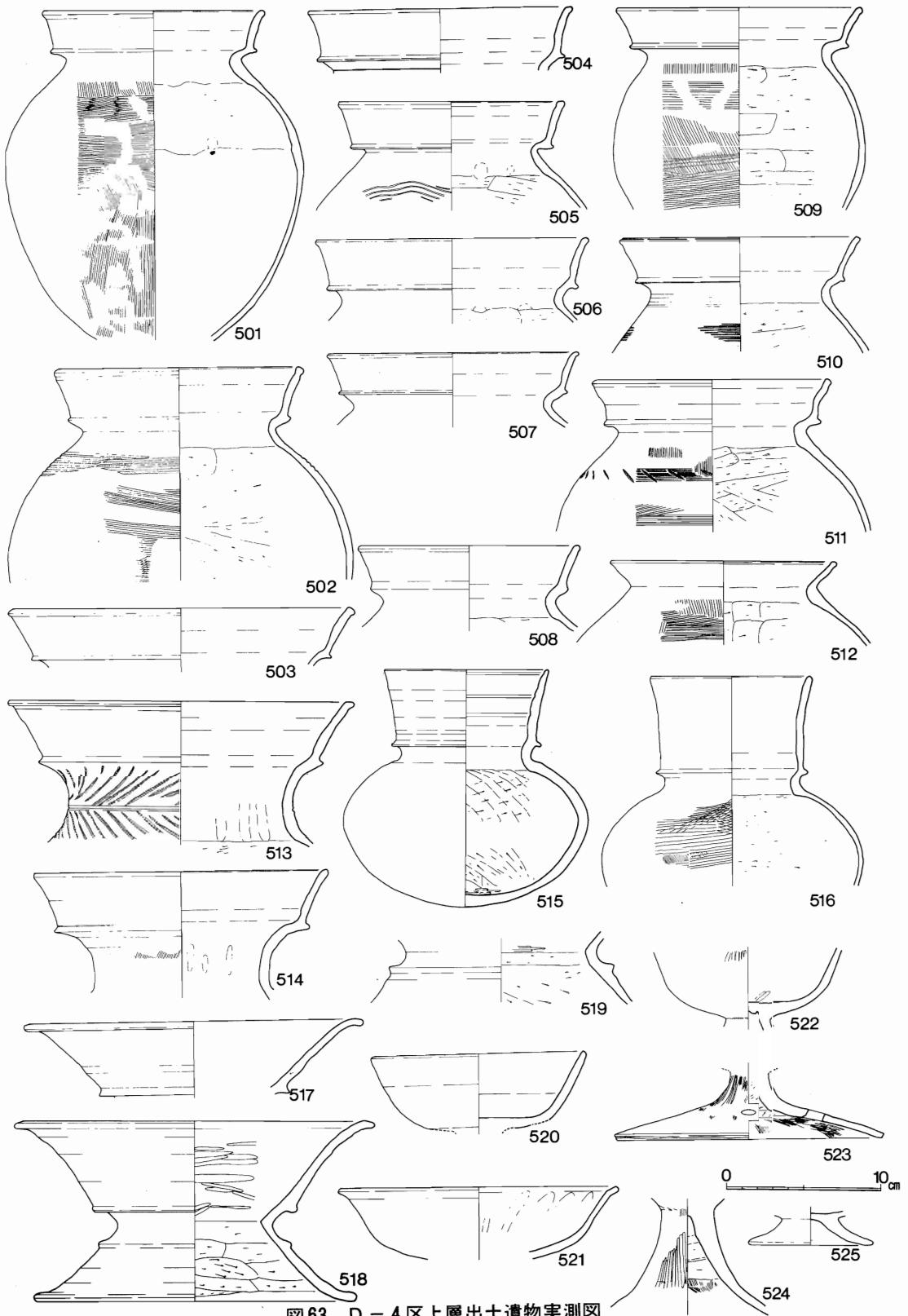


図63 D-4区上層出土遺物実測図

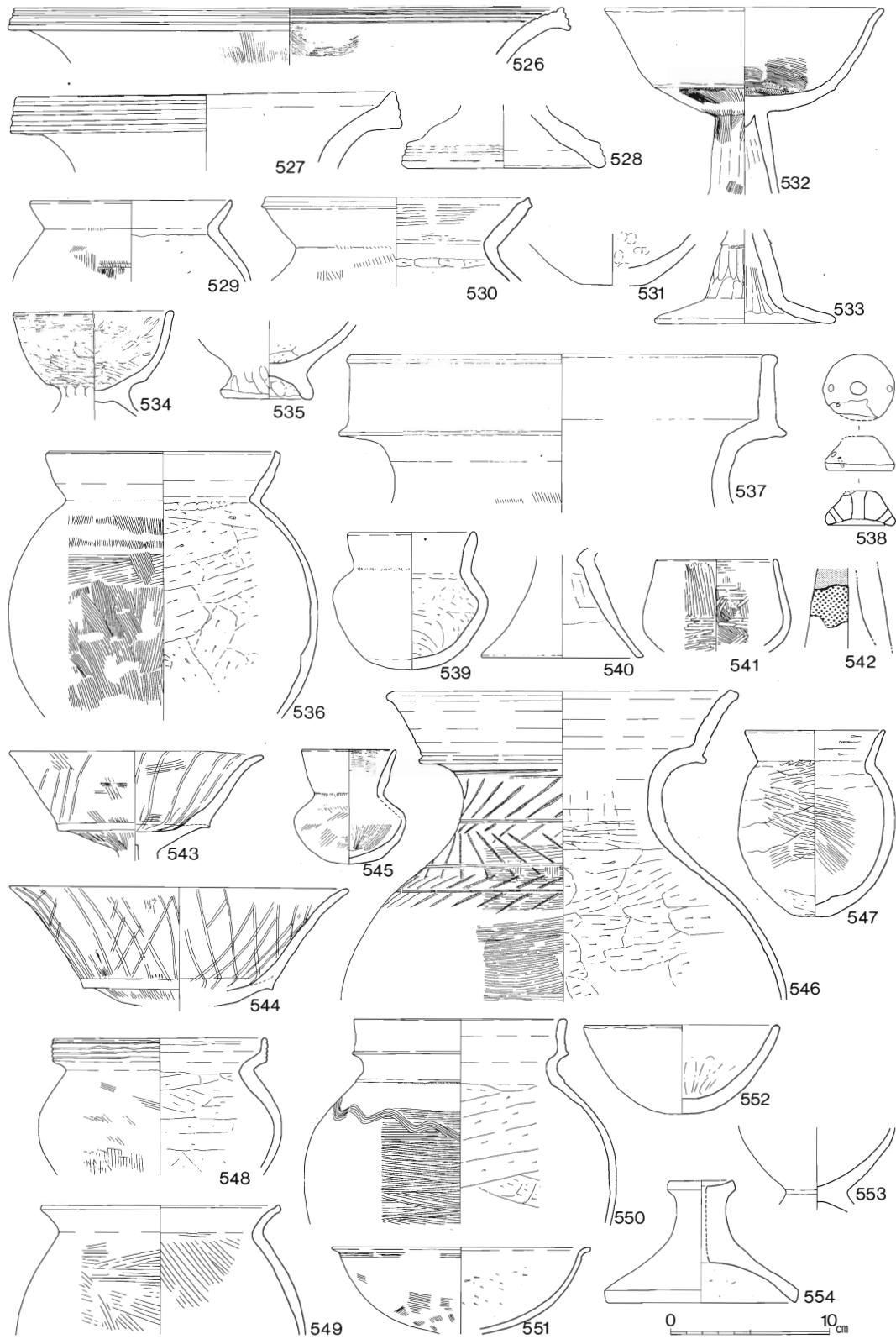


図64 その他の地点出土遺物実測図

4. 第2調査区

第1調査区の南西約35mの地点に設定した東西20m×南北5mの調査区である。

講武地区遺跡分布調査（昭和61年度）で確認していた包含層までの土砂を、重機を投入して除去した。しかし、第1調査区での作業に手間取り、予定していたような調査は実施できず、G1～G3までのテストピットを3か所設定して、この調査区でも第1調査区同様の遺物包含層が存在することを確認し、土層図を作成して終了とした。

この調査区でも基本的には1区同様、水平に土砂は堆積しているが、扇状地の端近くに位置するという地形から、調査区西半からわずかに傾斜して降っている。黒灰色混礫粘土が、1区での遺物包含層であった黒褐色土に対応するものと考えた。

第2調査区出土遺物（図67、68）

ここでは明瞭な土器溜りは認められなかったが、かなりの遺物の出土をみている。555～559がG1の遺物。555は複合口縁の甕。556、557は単純口縁の甕で、556は端部をわずかに内側に肥厚させる。558は単純口縁の壺で、外面をヘラで磨く。559は鼓形器台で、上台部外面には貝殻腹縁による平行線文があり、内面はヘラミガキを行う。

560、561はG2出土資料。560は複合口縁の甕で、口縁の断面は引き出したように先細りになる。肩部には波状文がある。561は高杯状の異形の製品で、平らな杯底部から大きく屈曲して立ち上がる体部をもつ。この体部外面には貝殻腹縁によると考えられる平行線文がある。脚は低いものであったと考えられる。

G2とG3の中間で採集した小形丸底壺562は、球形の体部をもち、口縁はさほど開かずに立ち上がる。

鍔状の木製品563は、身と柄の角度が120～130°と鈍角となることから鍔と考えられる。身と柄は

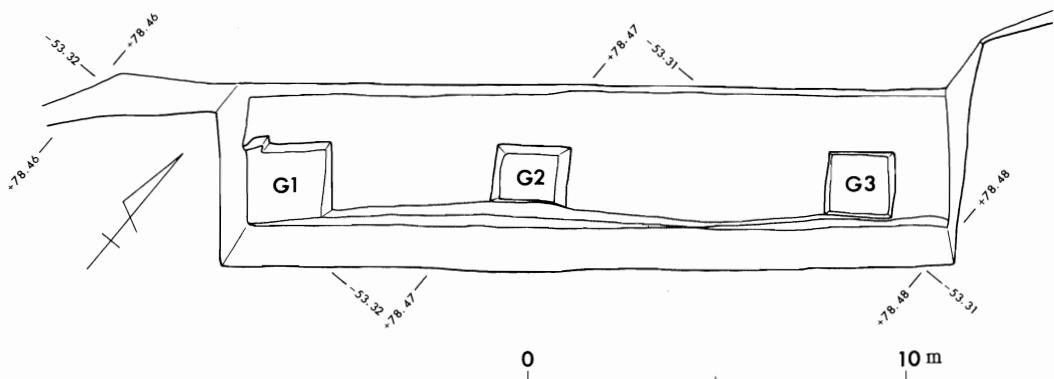


図65 2区平面図（1/200）

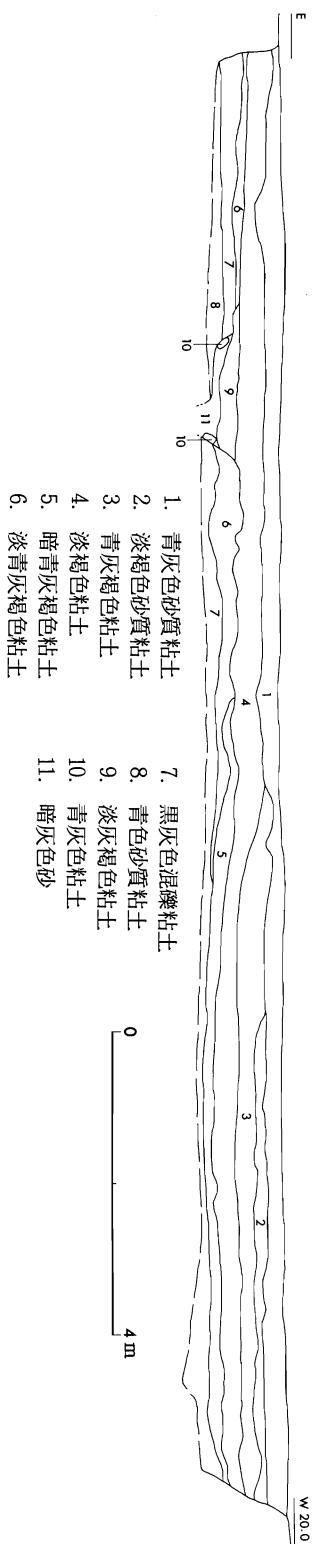


図 66 2 区土層図 (1/100)

一木から作り出されている。折損しているため、全形をうかがうことはできないが、柄を中心として折り返すと幅40cmにもなる大型のものである。身は2.7~4.5cmと厚手である。踏み込んで使用したと考えられ、身の柄側には面取りがある。

2区は、以上から草田3~7期と、1区とはほぼ同様の時期の遺物を出土しており、1区、2区間は離れてはいるものの、一連の遺構が続いているものと考えられる。

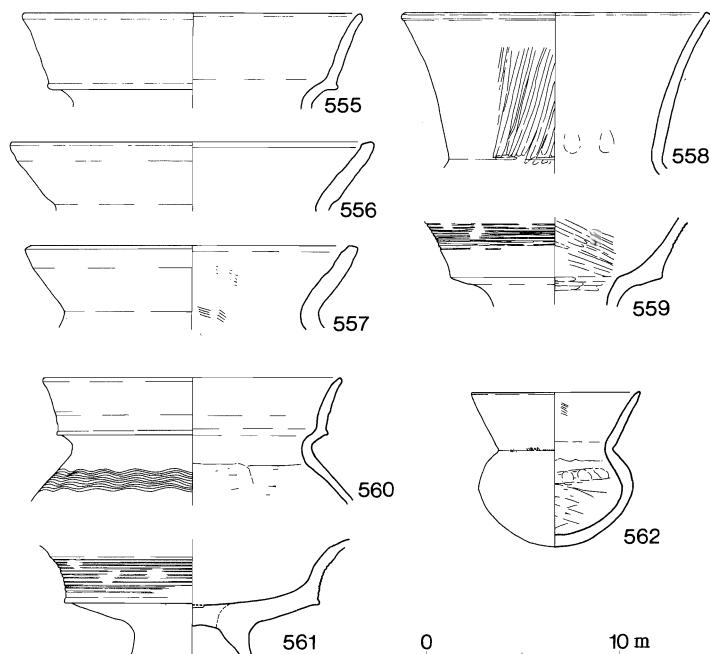


図 67 2 区出土遺物 (1)

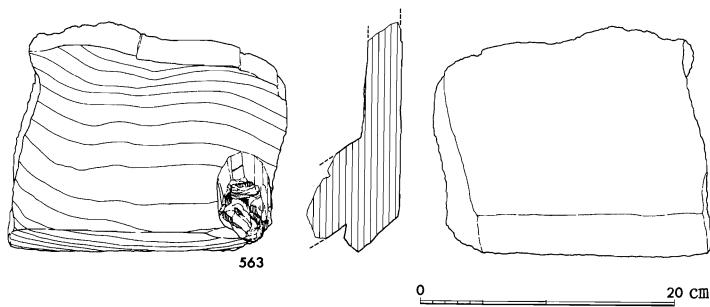


図 68 2 区 G 1 出土木製品実測図

IV. 小 結

1. 出土遺物・時期

南講武草田遺跡の調査では、多くの遺物が出土し、これらの遺物は弥生時代後期から古墳時代前期までと、古墳時代後期の2群がある。このうち数多くの遺構があるものの、まとまった土器溜りで取り上げることのできた前者について、この遺跡での変遷をとらえ、遺構の時期を考える。¹⁶⁾

草田1期

弥生時代後期前葉のもので、甕、壺の口縁は上方に引き上げられ、外面に凹線文を数条施し、内面は頸部直下までヘラケズリされている。全体のプロポーションは弥生時代中期末のものを引き継いでいる。H-2・3区土器溜りから出土している。

草田2期

甕、壺の複合口縁が上方に延長され、その外面にヘラによる擬凹線を描き、1期より多条化する。新たに出現した器種である鼓形器台にも同様の装飾が施されるが、この施文には2枚貝殻腹縁の使用が始まる。H-2・3区土器溜りから出土している。

安来市九重3号墓出土資料に類例がある。¹⁷⁾

草田3期

甕、壺の複合口縁がさらに上方に延長され、その外面に主として2枚貝の貝殻腹縁と考えられるクシ状工具を使用して平行線文を描く。口縁部外面のカーブは貝殻腹縁を押し付けて成形するものと考えられ、その曲線に近い。鼓形器台も上台、下台への貝殻腹縁による平行線文の施文を特徴とすると考えられるが、外面の施文が消えたもの(238)もある。H-2・3区土器溜り、SX08から出土している。

吉備地方からの遺物は、この時期を中心に搬入されているものと考えられる。

松江市平所遺跡玉作工房出土資料のうち、¹⁸⁾ 口縁に平行線文をもつ甕などの古式の一群や、同市的大場土壤墓資料がこの時期に相当する。¹⁹⁾

草田4期

甕、壺の複合口縁外面から平行線文が消え、口縁はやや厚手で、端部に向かい先細りとなる断面を呈する。口縁外面から平行線文が消えても、そのカーブはやはり貝殻腹縁を押し付けた3期の曲線に近い。この資料の内には、成形に貝殻腹縁を使った後、この痕跡を消したものも存在するものと考えられる。このためか、複合口縁部の稜は、斜め下向きに突出する傾向がある。肩部への施文には主として貝殻腹縁を使用している。鼓形器台でも平行線文が消え、筒部の縮約が始まるが、依然として比較的高い器高を保つ。草田遺跡では、この時期に低脚杯があらわれている。低脚杯は比

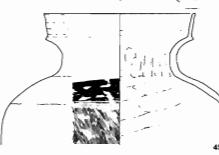
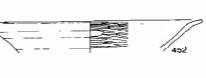
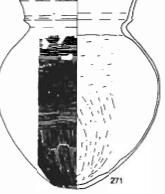
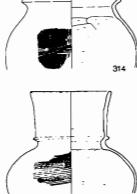
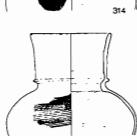
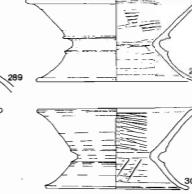
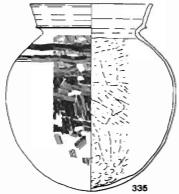
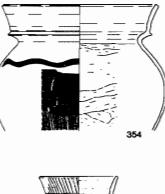
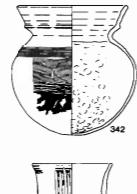
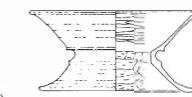
	甕	平底甕 (小形甕)	中形甕 (直口壺)	壺	鼓形器台
1				 	
2				 	
3				 	
4					
5	  		 	 	
6	 		 	   	
7	  		 	  	

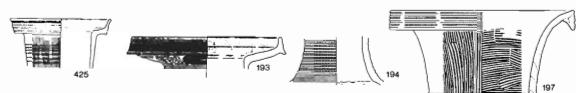
図 69 草田各期遺物変遷図（1）

低脚杯

高杯

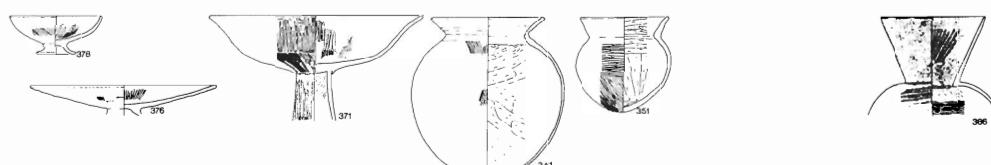
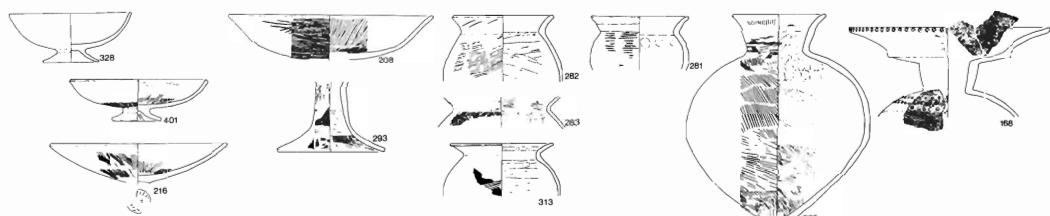
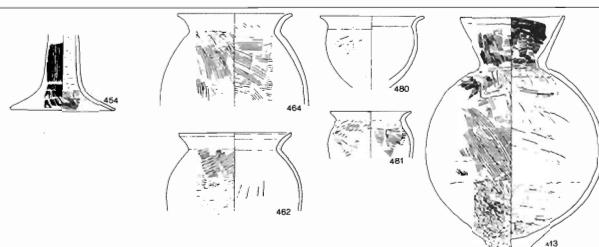
搬入系遺物

吉備系



近畿系

壺



0 10 CM

図 70 草田各期遺物変遷図（2）

搬 入 系 遺 物

1

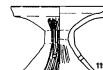
2

3

4

器台

5

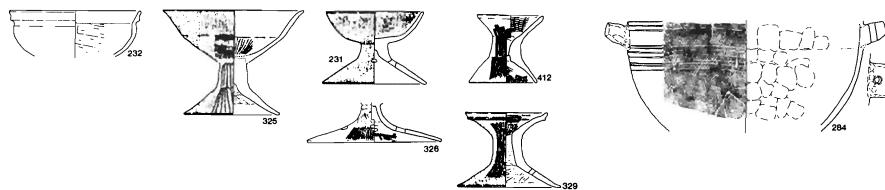


小形丸底壺 小形丸底鉢

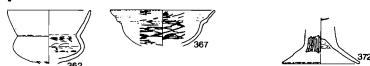
高杯

瓦質土器

6



7



0 10 CM

図 71 草田各期遺物変遷図 (3)

較的小さい口径をもつ、厚手のものである。

松江市平所遺跡1号住居址²⁰⁾、鹿島町南講武小廻遺跡²¹⁾、同名分佐太前遺跡SD04出土遺物がこの時期の良好な資料である。松江市平所遺跡1号住居址資料は、甕口縁の形態、鼓形器台がまだ高い器高をもつなど、この時期に並行するものと考えられる。

草田5期

H-5区土器溜りの資料が充てられ、甕・壺の複合口縁外面への加飾はとだえ、口縁断面は薄く引き出したようになる。複合口縁部の稜の突出はさほどものではないが、水平方向に突出する。成形に貝殻腹縁を使用することはなくなり、施文にわずかに使用されるにすぎなくなる。また、甕・壺の口縁内面をヘラミガキすることはないなり、ヘラミガキは鼓形器台、高杯、低脚杯などの小形の器種に限られるようになる。鼓形器台はこの時期に器高が低い形となる。

この時期には、近畿地方から搬入されたタタキをもつ遺物が伴っており、これらは近畿地方の土器編年では庄内式²³⁾(第六様式)に含まれる遺物である。タタキをもつ甕などの底部にはまだ平底をとどめている。

安来市鍵尾A-5号墓資料の甕は薄く引き出したような口縁をもち、鼓形器台も低くなつたものを伴っており、この時期に相当する。佐太前遺跡SK58資料もこの時期のものと考えられる。

草田6期

複合口縁の甕は口縁部がやや厚みを増し、端部を外方に折り曲げることを特徴とする。甕の体部は倒卵形で、かすかな平底をもつか、尖り底となる。底部内面には指頭圧痕をもち、丸底化の傾向をもち始める。また複合口縁の壺は、この時期から口縁の外傾をはじめる。草田遺跡では、この時期に複合口縁の直口壺が出現している。また、低脚杯には杯部のごく大形のものが現われる。CD-4、DE-3区土器溜り資料を標識とする。これらの土器溜りでもやはり庄内式期の遺物を伴っている。

東出雲町大木権現山1号「墳」1号土壤資料、鳥取県米子市尾高城址SD08資料がこれに相当する。

草田7期

甕の口縁部はさらにその厚みを増し、端部を外方に折り曲げるものがあるものの、端部に平坦面を作るものの頻度が増す。複合口縁部の稜は水平方向に突出するが、鋭さを欠くものもみられる。体部の球形化はさらに進み、底部は完全な丸底となる。肩部の文様は間隔の開いた列点文ないし、波頂間の開いた波状文が施されているが、それもほとんど省略され、粗い横ハケでこれにかえるものの比率が高くなる。鼓形器台は筒部が痕跡化し、その内面では稜線となるものが現われる。高杯は6期にくらべ杯部の深さが増す。F-3区土器溜り資料を標識とする。この遺物には近畿布留式

の単純口縁甕、小形丸底壺、小形丸底鉢などを伴っている。複合口縁の壺357は168のような壺の影響のもとに出現するものと考えられる。

²⁸⁾
安来市小谷遺跡出土資料がこれに相当する。

2. 土器溜り

第1調査区内各地点で土器溜りが検出され、その多くは下層に存在した墳墓群の上面に供えられたものと考えられたが、H-2・3区土器溜りのように下層に墳墓を伴わないものもあり、この土器溜りからは獸骨なども出土していることから、他の土器溜りとは性格を異にするものと考えられる。墳墓の上面に供えられた土器群も、墳墓用に特別に製作されたものは少なく、集落で日常的に使用されていたものである。

また、調査区内では、遺構の保存の方針がとられて以後、精査を行っていないので、土器溜りすべてに対応する遺構が検出されていない可能性がある。遺物のまとまり、量からは、検出した以外にもかなりの遺構があるものと考えられる。

3. 搬入遺物

この遺跡で数多く出土した搬入遺物は、吉備地方から搬入された小形壺形土器などの1群と、近畿地方から搬入された1群とに分かたれる。これらはいずれも在地の土器とは胎土が異なり、明らかに運び込まれたものである。

吉備地方からの土器は、同地方での特殊器台の編年で立坂型²⁹⁾と呼ばれる時期のもので、島根県東部地方でこれまで検出されているものと同時期のものである。この時期の吉備地方と山陰地方の交渉を示す例が1例増したものといえる。

近畿地方から搬入された庄内式期の土器は、それに伴う在地の土器の観察から新、古に2分でき、近畿地方からのこの地への訪問が、何次にもわたったことを暗示している。これらの土器群は図示できなかったものも含めると、百個体にも及ぶものと考えられ、かなりまとまった人数の来訪であったことが想像される。また、出土した遺物は、甕などの日常的に使用する器種が多いのも特徴的である。その産地を近畿地方と一括はしているが、産地を特定したのはCD-4区土器溜り中の1点(283)が河内産と考えられたのみで、それ以外の遺物の産地比定は今後の課題である。

これに加え、朝鮮半島製と考えられる瓦質土器も2点(284、389)ではあるが庄内式土器に伴って出土しており、近畿地方の遺物とともにどのようなルートを経てこの地にもたらされたものか興味をもたれるところである。

また、これに続く近畿地方布留式の遺物群についても、搬入されたものか、この地で製作された

ものかについて、今後胎土分析などを行う必要がある。

4. 墳墓群（表1）

この遺跡で検出した墳墓は、草田3期から6期にわたって作られており、かなり長期間営まれたことがわかる。この内、遺物を伴うものはSX03、06、08、09であり、遺物はいずれも土器である。調査区内で最も古い墳墓は、SX08、09で、これが草田3期のものである。5期にSX03が、6期にSX06が作られている。墓壙の頭位などから時期を想定できるものを加えると表2となる。かなり多くの遺物を検出したF-3区土器溜りに代表される7期の墳墓は、この時期の可能性のある壺棺墓SX10以外には検出できていない。

また、これら墳墓群には溝で区画するなど特に墓域を設定している様子はない。

墳墓は木棺墓を主体とし、遺構検出面は遺構が掘り込まれた面より低いので、確言はできないが、SX01の例をみると2段掘りのものであるので、その他のものもこうした墓壙であった可能性がある。壙内には木棺が組まれていたと考えられるものが多い。このうちSX09は6m以上になるもので、別格の長さをもっている。

木棺は副室をもつものが多く、特徴的である。こうした副室は奥才古墳群³⁰⁾でも数多く認められており、時期に若干の前後はあるものの、注目される。何らかのものを副葬したものと考えられるが、いずれの調査例でもこの副室からの出土遺物はないので、有機物を副葬するためのものである可能性がある。また、墓壙に柱状のものが立てられていたような痕跡があることも注意される。こうした痕跡があったのは、SX01、04、06である。

表1 墳墓一覧

名称	構造	規模(m)	主軸	土器溜り	備考
SX01	2段掘り、木棺	外側3.5×1.8 内側2.8×1.1	E-41°-N		柱状のもの
SX03	木棺、副室	2.8×1.0	W-37°-N	あり	
SX04	木棺、副室？	2.3×0.9	E-14°-N		柱状のもの、墓壙床面に丸太
SX05	木棺、副室	2.5×0.8	W-6°-S		墓壙に接してピット
SX06	木棺	2.7×1.1	W-33°-N	あり	柱状のもの
SX07	木棺、副室	2.8×0.8	W-33°-N		
SX08	木棺	2.7×0.6	E-14°-N		墓壙に接してピット
SX09	木棺	6以上×1.0	S-45°-E		
SX10	土器棺	掘方径0.45、深さ0.25	-		

表2 遺構、遺物の時期

時 期	土 器 溜 り	墳 墓	その他の遺構
草田 1	H-2・3区土器溜り		
2	H-2・3区土器溜り		
3	H-2・3区土器溜り	SX08、05	
4		SX09	SB01
5	H-5区土器溜り、G-6区	SX03	
6	CD-4区、DE-3区、C-3・4区土器溜り、D-5区、EF-2区、EF-4区土器溜り、D-4区上層	SX06、07	SD05
7	F-3区土器溜り、D-4区上層	SX10?	SB02、SD03、SD02

5. 水 路

調査区内で検出した水路は、SD01上層水路、SD01下層水路、SD02、SD03の4水路である。

古墳時代前期のSD02、SD03は、遺跡の立地する谷奥から流れだす水を下方の川に排水する目的をもって掘削されたものと考えられる。この時期に扇状地上ではF-3区土器溜りが形成されており、水田などが営まれた痕跡はない。当時の水田はさらに下方の現講武川沿いに開かれていたものと考えられる。一方、古墳時代後期のSD01の時点では水路は丘陵裾をめぐり、この扇状地上に存在したと考えられる水田に水をかける給水路となっている。つまり、古墳時代後期の段階にいたって、この扇状地が水田として開発されたことを示していよう。この時期までにこうした灌漑水路を掘削して水田を開発するようになっていたものと考えられる。この盆地内の開発を考える上で、貴重な資料を提供するものといえる。

今回扇状地とはいえ、丘陵地以外からこうした墳墓群が発見されたことは今後の調査のあり方を考える材料を提供したものといえよう。鹿島町域内でも四隅突出型墳丘墓の可能性がある南講武小廻遺跡（草田4期）は丘陵裾部の、木棺墓などを検出した佐太前遺跡は低湿地での調査例で、これまでの丘陵上ばかりでなくこうした地点でも調査の必要があることが明らかになったものと考える。

また、鹿島町域内では石剣、紡錘車形石製品を出土した前半期の奥才古墳群、前方部が撥形に開く前方後方墳である名分丸山1号墳などが知られており、また、隣接する松江市吉志町稻寄遺跡でも168に酷似した壺など近畿系の遺物の出土が知られており、この地域が近畿地方との密接な関係にあることが明らかになりつつあるといえよう。

いずれにせよ、このように近畿地方から大量の遺物が搬入されたことが明らかになった遺跡は、山陰地方ではいまだ知られておらず、どのような理由によるものかは現在までの知見では明らかに

できない。今後の類例を待ちたいが、地方が古墳時代を迎えるにあたっては、それまでの隣接する地域との交渉というレベルを越えた、このような近畿地方との直接的な交流をもとに展開するものと考えられる。また、その動きは出土した瓦質土器が示すように、朝鮮半島をも巻き込んだ動きであった可能性すら考えられることを確認して結びとする。

注

1. 山本 清「佐太講武貝塚」(『講武村誌』 講武村誌刊行会 1955年)
2. 金関丈夫「島根県八束郡古浦遺跡」(『日本考古学年報』 16 1963年)
金関丈夫・小片丘彦「着色と変形を伴う弥生前期人の頭骸」(『人類学雑誌』 第69巻 3・4号 1962年)
3. (a) 山本 清「古浦砂丘遺跡」(『講武村誌』 講武村誌刊行会 1955年)
(b)『佐太前遺跡』鹿島町教育委員会 1987年
- 4.『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書4 北講武氏元遺跡』鹿島町教育委員会 1989年
- 5.『志谷奥遺跡』鹿島町教育委員会 1976年
- 6.『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書1 名分塚田遺跡』鹿島町教育委員会 1984年
『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書3 名分塚田遺跡2』鹿島町教育委員会 1987年
- 7.『講武地区遺跡分布調査報告書1』鹿島町教育委員会 1987年
- 8.「南講武小廻遺跡」(『鹿島町埋蔵文化財緊急調査報告書1』鹿島町教育委員会 1986年)
- 9.『名分丸山古墳群測量調査報告書』鹿島町教育委員会 1984年
- 10.『奥才古墳群』鹿島町教育委員会 1985年
- 11.『菅田考古』16 島根大学考古学研究会 1983年
- 12.『講武地区遺跡分布調査報告書2』鹿島町教育委員会 1988年
13. 注12書
14. 天理大学置田雅昭先生のご教示による。
15. 慶星大学校申 敬澈先生のご教示による。
16. 以下の研究などを参考とした。
藤田憲司「山陰『鍵尾式』の再検討とその併行関係」(『考古学雑誌』第64巻 4号 1979年)
花谷めぐむ「山陰古式土師器の型式学的研究－島根県内の資料を中心にして－」(『島根考古学会誌』第4号 1987年)
17. 内田 才・東森市良・近藤 正「島根県安来平野における土壙墓」(『上代文化』 36 1966年)
18. (a)「平所遺跡1」(『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』 I 島根県教育委員会 1976年)
(b)「平所遺跡2」(『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』 II 島根県教育委員会 1977年)
19. 近藤 正・前島己基「島根県松江市の場土壙墓」(『考古学雑誌』 第57巻 4号 1972年)
20. 注17(a)書
21. 注8書
22. 注3(b)書
23. 置田雅昭「3. 庄内式土器」(『弥生文化の研究』 4 1987年)
24. 山本 清「山陰の土師器」(『山陰古墳文化の研究』所収 1971年)
25. 注3(b)書
- 26.『大木権現山古墳群』 東出雲町教育委員会 1979年
- 27.『尾高城址』 II 尾高城址発掘調査団、米子市教育委員会 1979年
28. 注16書
29. 近藤義郎・春成秀爾「埴輪の起源」(『考古学研究』 51号 1967年)
30. 注10書
- 31.『古代狭田王国の興亡』鹿島町立歴史民俗資料館特別展図録 挿図20 鹿島町立歴史民俗資料館 1989年

出土遺物観察表

S D 0 1

插図 番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考	
			口径	底径	器高						
1	SD 0 1	須恵器杯身	12.9	8.3	3.8	口縁端にアクセント 底部に回転糸切り痕	青灰色(口縁 外面灰茶褐色)	2mm大の砂粒 少量	良好		
2	SD 0 1 磕		12.4	—	—	口縁端にアクセント	外/暗青灰色 内/青灰色	密,白色小砂 粒を若干含む			
3	SD 0 1 上層	須恵器杯蓋	13.6	—	—	天井屈曲部に稜	外/暗灰青色 内/淡青灰色	小砂粒,ごく 少量			
4			14.0	—	—	天井屈曲部に稜 口唇内面に段	灰色	1~2mm大の 砂粒を含む			
5	SD 0 1	須恵器杯身	11.0	—	—	立ち上がり低い	淡青灰色	密,白色砂粒 ごく少量			
6	SD 0 1 上層・下層		10.6	—	4.1	下半回転ヘラケズリ		密,1mmまで の白色粒少量			
7	SD 0 1		10.2	—	—	やや高い立ち上がり	灰色~暗青灰 色	1mm前後の砂 粒をかなり含 む	やや不良		
8			10.4	—	—	直立気味の立ち上がり	暗青灰色	0.5~3mm大 の黒色粒が器 表に吹きだし ている			
9			11.2	—	—		灰色	密	良好		
10			10.4	—	—	やや高い立ち上がり	外/黒緑褐色 内/淡灰色 緑褐色の自然 釉がかかって いる	1~2mmの白 色粒			
11			11.2	—	—		青灰色	1mm以下の長 石粒			
12			13.8	—	—		淡青灰色	密			
13			11.2	—	—		青灰色				
14	SD 0 1(C-2)		11.8	—	—		外/灰色,暗 緑褐色の自 然釉がかる 内/白灰色		硬質		
15	SD 0 1	須恵器高杯	13.2	—	—	丸味をもって深い体部 立ち上がりは厚い	青灰色	1mmまでの白 色粒をかなり 含む	良好		
16	SD 0 1 上層		—	—	—	台形3方透し		1mm前後の白 色砂粒少量			
17	SD 0 1 磕		—	—	—		外/暗青灰色 内/青灰色	1mm前後の長 石粒をかなり 含む			
18			—	—	—		灰色	長石微粒をか なり含む			

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考	
			口径	底径	器高						
19	SD01上層	須恵器高杯	—	—	—	三角形3方透し 脚部にアクセント	青黒色、脚部 内面、断面は 青灰色	密、白色小砂 粒少量	良好		
20			—	—	—	三角形2方透し	外/黒灰色 内/淡灰色	1mm前後の長 石、石英粒を 多量に含む	やや不良		
21	SD01礫層中		—	8.5	—	線状3方透し	灰白色	密、小砂粒少 量	普通		
22	SD01	須恵器甕	16.2	—	—	口縁部。口唇下に稜	灰色	1mm以下の白 色粒を若干含 む	やや不良		
23			—	—	—	底部。下半をヘラケズ りする	外/灰青色 内/淡青色	1~2mm大の白 色砂粒を含む	良好		
24			—	9.0	—	底部をヘラケズり。 それ以上にカキメ	外/青灰色 内/灰色	1mmまでの白 色砂粒をかな り含む			
25	SD01, SD01下層	須恵器大甕	—	—	—	外面格子状のタタキ。 内面同心円のタタキ	外/淡灰褐色 の地に緑褐色 自然釉及び 黒灰色粒 内/青紫灰色	密1mm前後の 白色粒を若干含 む			
26	SD01	土師器甕	14.2	—	—	口唇端内側に肥厚させ る布留甕	肌色	微細な白色及 び赤褐色小砂 粒を含む			
27	SD01上層		15.2	—	—	短く折り曲げただけの 口縁	褐色	1mm以下の小 砂粒を含む			
28			15.6	—	—	外方に折り曲げた口縁 部。外面タテハケ、内 面ヘラケズリ	外/褐色~黒 褐色 内/褐色	1mm前後大の白 色砂粒を多く含む			
29	SD01		17.4	—	—		淡褐色~暗褐色	1mm以下の砂 粒を多く含む			
30			16.6	—	—	ごく短い口縁部	褐色	1mm前後の砂 粒を含む			
31	SD01上層		24.0	—	—	「く」の字に大きく屈曲 する口縁	橙褐色	1mmまでの砂 粒を含む			
32	SD01		22.5	—	—	大きく「く」の字に屈曲 する口縁	淡褐色~暗褐色	白色砂粒を若 干含む			
33			22.0	—	—		外/淡褐色 内/淡橙褐色	1mm前後の白 ~灰色の砂粒を 多量に含む			
34	SD01上層		20.6	—	—	高く立ち上がる口縁部	外/淡褐色~ 暗褐色 内/黄褐色	小砂粒を多量 に含む			
35			18.8	—	—		褐色	1mm未満の砂 粒(白色・透 明)を多量に 含む			
36	SD01		—	—	—	細く中空の脚柱部。外 面ヘラミガキ		密、微細な白 色砂粒	外面に橙色の顔 料を塗彩		
37	SD01上層		—	—	—	大形の製品。脚柱外 面にヘラミガキ	橙褐色	1~2mm大の砂 粒を多く含む	外面及び杯部内 面に赤色顔料		

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
38	SD01上層	土師器高杯	—	—	—	大形の製品。脚柱外面にヘラミガキ	橙褐色	1mm大の白色砂粒を多く含む	良好	外面赤色顔料塗彩
39	SD01	土師器小壺	—	6.6	—	平底から内湾して立ち上がる体部	橙灰褐色	1mmまでの白色小砂粒を含む		
40	SD01上層	甕	20.2	—	—	短く折り曲げた口縁	橙褐色	1mm大の白色砂粒を多く含む		
41	SD01		23.0	—	—	外方に開く口縁	外 / 暗褐色 内 / 褐色	1mm前後大の砂粒を多く含む		
42	SD01上層		23.2	—	—	湾曲して開く口縁	淡褐色	1mm前後大の砂粒(白色・半透明)を多量に含む		
43			24.9	—	—		薄茶色	1mm大の砂粒を多量に含む		
44	SD01上層	カマド	—	—	—	カマド焚き口ひさし部分	肌色	小砂粒を多く含む		
45	SD01礫層中		—	—	—		淡褐色	1mm前後の砂粒を多量に含む		
46	SD01	コシキ	—	—	—	コシキ把手。角状に上を向く		白色小砂粒を多く含む		
47	SD01下層	須恵器杯蓋	13.5	—	—	湾曲した大ぶりな体部 天井部回転ヘラケズリ	淡灰青色	密		
48	SD01下層礫		13.3	—	—	天井屈曲部に稜 口唇内面に段	灰青色			
49			13.0	—	—	天井屈曲部に稜 天井部回転ヘラケズリ	外 / 黒灰色 内 / 淡紫灰色		硬質なるも 数ヶ所に燒き歪み気泡 あり	
50	SD01下層		12.4	—	—		暗灰色	密, 白色小砂粒を若干含む	良好	
51			11.8	—	—		外 / 青灰色 内 / 淡青灰色	密		
52	SD01下層礫		12.8	—	—		淡灰色～暗灰色			
53		須恵器杯身	11.0	—	3.5	低い立ち上がり 底部回転ヘラ切り	外 / 暗青灰色 内 / 青灰色 断 / 茶褐色	1mmまでの白色砂粒を若干含む		
54	SD01下層		—	—	—	外面底部ナデて仕上げる	暗灰色 (外面に黄白色の自然釉)	1mm大の砂粒を若干含む		
55			10.4	—	—	低い立ち上がり	外 / 黑灰色 内 / 灰色	密		
56			11.8	—	—	直立気味の立ち上がり	灰青色	白色小砂粒少量含む		

插図番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考	
			口径	底径	器高						
57	SD01下層	須恵器杯身	11.4	—	—	低い立ち上がり	灰色	1mm以下の白色粒少量	良好		
58			10.4	—	—	直立気味のやや高い立ち上がり 下半回転ヘラケズリ		1mm大の砂粒を多量に含む			
59	SD01下層疊		12.4	—	—	偏平な製品 下半回転ヘラケズリ	青灰色	1mm以下の白色粒少量			
60	SD01下層		11.5	—	—	やや高い立ち上がり 下半回転ヘラケズリ	淡灰色	密、白色小砂粒をわずかに含む	やや軟質		
61	SD01下層疊		11.4	—	—		青灰色	3~5mm大の砂粒を点々と含む	良好		
62			9.8	—	—	短く直立する口縁	灰白色	密			
63		須恵器壺	—	—	—	偏平な体部、肩部カキメ	淡青灰色	密、白色小砂粒少量			
64	SD01下層		—	—	—	くびれる頸部から大きく開く口縁	外/青灰色 断/紫灰色	密			
65	SD01下層疊	須恵器高杯	—	10.6	—	端部を上方に引き出し 平坦面を作る脚	暗青灰色				
66		17.9	—	—	「く」の字に折れ曲がり 外方へ大きく広がる口縁部	淡褐色	1mm大の茶褐色、暗褐色砂粒を多く含む				
67		19.1	—	—		黄茶褐色	1mm以下の小砂粒を多く含む				
68		23.0	—	—		外/淡黄褐色 内/淡橙褐色	1mm前後の砂粒を多く含む (暗灰色、白色半透明)				
69	SD01最下層		25.3	—		—	淡茶褐色	1mmまでの砂粒を多量に含む			
70	SD01下層疊		28.9	—	—	「く」の字に折れ、外方へ大きく広がる口縁部 体部外面タテハケ、内面横方向のヘラケズリ	黄灰白色	1mm前後の茶灰色、暗灰色の砂粒を多く含む			
71	SD01下層	土師器甕	20.4	—	—		淡黄灰褐色	1mm未満の砂粒(白色、灰色、~暗灰色、半透明等)を多く含む			
72			20.3	—	—		淡茶色	1mm未満の砂粒多			
73			21.2	—	—		淡褐色	1mm大の砂粒を多量に含む			
74			20.9	—	—	立ち上がった後に折れ曲がる口縁		白色小砂粒を含む			
75		高杯	17.1	—	—	屈曲して開く杯部。 内外面ヘラミガキ	外/橙色~ 内/淡橙灰色	密、白色小砂粒少量			

插図番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
76	SD 01 下層	椀	14.6	—	—	やや深めの体部 内面放射状のヘラミガキ	淡茶褐色	密, 白色砂粒(1mm前後)を若干含む	良好	外面, 口縁内面に赤色塗彩
77			13.8	—	—	やや深めの体部 内面ヘラケズリ	茶褐色	1mm前後の白色及び灰色砂粒を含む		
78	SD 01 下層礫	壺	13.0	—	—	短く直立して立ち上がる口縁部。外面タテハケ、内面横方向のヘラケズリ	外 / 淡褐色 内 / 淡褐色、口縁部赤色	密, 1~2mmまでの砂粒少量	下半分にスス付着し黒褐色を呈す	
79	SD 01 下層	カマド	—	—	—	焚き口ひさし部分	褐色	密, 1mmまでの白色砂粒を含む		
80			—	—	—	上端受け部。 外面タテハケ、内面ヘラケズリ。 口縁内外面ヨコナデ	外 / 橙灰色~褐灰色 内 / 橙褐色、頭部以下黒褐色(スヌ)	1mm前後の砂粒(白色、半透明)を多く含む		
81			—	—	—	裾端部。内外面ヘラケズリ	橙褐色	1mmまでの白色砂粒を含む		
82			—	—	—	裾端部。外面ナデ、内面ヘラケズリ	淡橙褐色	1mm前後の砂粒(白色、半透明、透明)を多く含む		
83		コシキ	—	—	—	把手。角状に上を向く	淡褐色	1~2mm大の白色砂粒を多く含む		
84			—	11.4	—	底部。棧を受ける円孔がある。外面タテハケ、内面ヘラケズリ		1mmまでの白色及び透明な砂粒を多く含む		
85	SD 01 西上端	石製紡錘車	上面径 2.7	底面径 5.3	3.0	孔径 0.7 cm。山形の文様を基調とした線刻	灰白色	砂岩質の石材	—	残存重量 35 g

S D 0 2

86	SD 02	甕	21.0	—	—	口縁外面にクシ状工具(貝殻腹縁)による平行線文	淡赤褐色	1mm前後の砂粒かなり含む	普通	外面一部スス付着
87			24.0	—	—	口縁下半天にクシ状工具による平行線文		1~2mmの砂粒非常に多い		
88	SD 02 磕層		17.3	—	—	全体に厚手。肩部に貝殻腹縁による列点文	外 / 淡褐色 内 / 乳灰褐色	1mmくらいの砂粒多い、2mmくらいのものもある	良好	
89	FG-2 SD 02		14.9	—	—	複合口縁。口縁比較的高く立ち上がる	黄褐色 外面一部黒色	0.5mmくらいの砂粒多い、1mmくらいのものもある		
90	SD 02		17.1	—	—		淡赤褐色	1mm以下の砂粒多い		
91	GH-5 磕		12.4	—	—		灰褐色	金雲母目立つ石英、長石		
92	SD 02		14.5	—	—		内 / 乳黄色	1mm前後の砂粒多い、0.5mm前後非常に多い	やや不良	外面全体にススが付着していたと思われる

挿図 番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
93	H-1 排水路下層礫	小壺	5.0	—	—	漆を保存したもの。肩部に列点沈線。下半はヨコ方向のヘラミガキ	黄灰色～灰色	石英、長石の細砂粒含	良好	漆壺、木の葉で蓋をしていたものが、葉の葉脈様のもの見える
94	G-1 S D 0 2	甕	7.9	—	—	口縁部は短く内傾する	灰褐色	1～0.5mmの砂粒含む	普通	
95	H-5 磨	壺	35.7	—	—	大形品。複合口縁部鋭く外方に突出。口縁端は水平面をなす	淡灰色	やや密、1～2mmの石英含む		
96	S D 0 2		18.0	—	—	口縁部は短く内傾する厚手	淡褐色	0.5mm以下の砂粒多く含む	良好	
97		底部	—	—	—	かすかに平底をとどめる。内外面ハケ	外/黒色 内/乳褐色	—		
98	G H-5 磨	低脚杯	—	—	—	脚部に円形の透し	外/淡桃褐色 内/淡褐色	1mm前後の長石、石英、雲母をかなり含む	やや不良	透しあり 内/薄くスス付着
99	S D 0 2	高杯	—	14.0	—	大きく広がる脚端部。 長い筒部をもつ	外/淡褐色 一部黒灰色 内/黒灰色 一部淡褐色	0.5mm以下の砂粒多い。1mm前後のものもみられる		
100			—	15.6	—		淡灰褐色	0.5～1.0mm砂粒多い。 1.0mm以上の物もみられる	不良	
101		鼓形器台	—	—	—	上台、下台間の間隔比較的広い	淡褐色	1mm前後の砂粒多い。 2mmくらいのものもみられる	やや不良	
102			24.1	—	—			1mm前後の砂粒多く含む。 2mmくらいの物もみられる	普通	外面黒色を呈する
103	G H-5 磨		18.8	—	—		石英	良好		
104	面壁排水路		—	—	—		外/暗灰褐色 内/灰褐色	1mmまでの長石、石英粒を多量に含む	普通	
105	S D 0 2		—	16.4	—		汚れた肌色	1mm以下の砂粒多い		
106	G H-4 磨		17.5	15.2	9.5	やや厚手の製品。外面はタテのヘラミガキで仕上がる	暗黄褐色	石英、長石のφ1mm前後のもの含む	良好、堅緻	
107	S D 0 2		—	18.5	—	上台、下台間の間隔比較的短い	灰褐色	0.5mm以下の砂粒とても多い。 1mmくらいの物もある	良好	
108	G H-5 磨	甕	14.9	—	—	単純口縁。口縁内外面ハケメ。体部外面右上がりのタタキ。内面ナデ	外/淡肌色 内/淡灰褐色 ～淡橙色	1mmまでの長石、石英、茶褐色砂粒		
109			11.2	—	—	体部外面右上がりのタタキ。内面ハケメ	外/橙赤褐色	石英を含む	不良	
110	G-5 磨		13.4	—	—	単純口縁。肩部水平のタタキ。体部右上がりのタタキ内のちハケ内面ヘラでなでるか	外/肌色 内/淡灰肌色	5mm大的灰色砂粒。 2～3mmの肌色砂粒 1～2mmの茶褐色砂粒。 1～2mm白色砂粒	良好	外/体部下半にスス付着

插図番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考	
			口径	底径	器高						
111	排水路	甕	17.2	—	—	単純口縁。肩部水平のタタキ。のちタテハケ。内面ナデ	外 / 暗赤褐色 内 / 暗赤褐色	密, 1~2mmの白色、灰色砂粒をかなり多量に含む	やや不良	良好	
112	西壁排水路		—	—	—	外面肩部ナデ。底部付近ハケ。内面ハケののちナデ	外 / 肌色~黒褐色(スス) 内 / 肌色	密、白色、茶褐色の細砂粒少量			
113	G-2 瓢		—	4.0	—	底部。外面右上りのタタキ。内面ハケ。底部粘土接合痕あり。凹状になる	暗灰褐色	密、長石細粒若干			
114	G-1 S D 0 2	底 部	—	4.3	—	平底。内外面ナデ	外 / 黑色 内 / 褐色	1~2mmの砂粒含む	普通	外面下半スス付着	
115	S D 0 2 G H - 4 瓢	甕	17.5	—	—	単純口縁。口縁端を内側に肥厚させる	外 / 灰褐色 内 / 暗黄褐色	石英、長石の細砂粒含	良好		
116	S D 0 2	小形丸底壺	10.3	—	—	比較的短い口縁部。外面ヨコナデ、底部ヘラケズリ。内面底部細かいハケメ	内 / 淡赤褐色	微細砂粒多い 0.5~1mmのものもみられる	普通		
117	G-5 瓢		9.5	—	—	比較的長い口縁部。体部外間にハケメ	橙赤褐色	密	良好		
118			10.3	—	8.2		茶灰褐色	微小な長石、石英粒			
119	G H - 5 瓢 西壁排水路北方	小形器台	12.7	10.0	9.1	外面タテ方向のヘラミガキ。脚内面シボリメ。三方透し	乳白色	φ 2mm前後の砂粒含。あずき色の粒子含	普通		
120	S D 0 2	高 杯	—	14.2	—	外面・杯内面ヘラミガキ。三方透し	乳褐色	0.5~1.0mmの砂粒少し含む	良好	外 / 口縁部スス付着	
121	南西隅疊層		16.4	—	—	深く屈曲する杯部。屈曲部にヘラによる4条の沈線	淡肌色	1mm未満の茶色砂粒を多量に含む			
122	G-1 S D 0 2		—	—	—	直線的に大きく開く脚部。4方透し	灰褐色	1mm前後の砂粒多い。2mm位の物もある	普通		
123	G H - 4 瓢	須恵器甕	—	—	—	口縁端に平坦面。外面口縁下に隆帯。クシによる波状の文様	外 / 黑灰色 内 / 緑がかかった灰色	密	良好		

S D 0 3

124	S D 0 3	甕	32.2	—	—	口縁に4条の凹線。肩部に2段の列点	暗褐色	1mm前後の砂粒含む。0.5mmくらいのもの多い	普通	外 / スス付着
125			16.1	—	—	口縁に3条の凹線。肩部に列点	灰褐色	1mmくらいの砂粒少しみられる。微細砂粒多い	良好	外 / スス付着
126			18.5	—	—	口縁に4条の凹線	淡褐色	1~0.5mmの砂粒含む	やや不良	外 / 口縁部スス付着
127			17.9	—	—	口縁に8条の擬凹線	淡灰褐色	1mm以下の砂粒少し含む	普通	外面一部スス付着
128			16.0	—	—	口縁に貝殻腹縁による沈線	乳褐色	1mmくらいの砂粒多い		外 / スス厚く付着

插図番号	出土地点	器種	法量 cm			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
129	SD 0 3	甕	23.9	—	—	口縁にクシ描きの平行沈線。下半はナデて消す	淡灰褐色	1~2mmの砂粒多く含む	普通	外/全面にスス付着
130			32.0	—	—	口縁に貝殻腹縁による沈線。上部ナデて消す	外/淡赤黄色 内/灰色	1mm以下の砂粒多い。1mm以上のものも多い	やや不良	
131			13.0	—	—	口縁に貝殻腹縁による沈線	灰褐色	0.5mmくらいの砂粒がごく少量みられるきめが細い	普通	外/スス付着
132			18.1	—	—			1mm前後の砂粒含む	不良	
133			18.0	—	—	口縁外面文様なし。内面ヘラミガキ	外/淡赤黄色 内/灰褐色	1mm以下の砂粒少し含む	良好	
134			36.0	—	—	口縁外面にクシ状工具による波状文	淡赤黄色	0.5mm以下の砂粒非常に多い	やや不良	
135	壺	壺	18.2	—	—	口縁外面に3条の凹線。頸部に刺突文	淡い褐色	1mm前後の砂粒多い	普通	
136			24.2	—	—	ラップ状に開く口縁部。端面に4条の凹線	淡赤褐色	1mm程度の砂粒含む		
137	甕	甕	—	—	—	肩部に連続する刺突文	淡灰褐色	1mm以下の砂粒多い	内外面に一部スス付着	
138			20.2	—	—	単純口縁。端部にナデによるアクセント	暗赤褐色	1mm前後の砂粒多くみられる		
139	鼓形器台	鼓形器台	—	—	—	外面貝殻腹縁による平行沈線。筒部、内面ヘラミガキ	淡褐色	1~2mmの砂粒少し含む	やや不良	
140			—	—	—		赤灰褐色	1mmくらいの砂粒含む		
141		—	—	17.6	—	下台部外面貝殻腹縁による平行沈線。内面ヘラミガキ	暗褐色	1mm以下の砂粒多い。2mmくらいのものもみられる	普通	
142			15.4	—	—	上台、下台間比較的縮約	濃褐色	断面には1mm以上の砂粒もみられる		
143	脚付鉢	脚付鉢	20.6	—	—	大形で深い杯部。外面ハケメ。内面暗文状のヘラミガキ	淡黄褐色	0.5mm以下の砂粒多い	良好	
144	甕	甕	18.0	—	—	複合口縁。薄く引き出したような口縁部	内/灰褐色	0.5mm以下の砂粒含む	普通	外/スス付着
145			20.2	—	—		外/淡褐色 内/灰褐色	0.5~1.0mm以下の砂粒多い		やや不良
146		—	16.2	—	—	複合口縁。口縁端部丸くおさめる。肩部に貝殻腹縁による平行線文と文様帶	淡黄褐色	0.5mm以下の砂粒多い	普通	外面一部スス付着
147			19.0	—	—		外/黒褐色 内/灰褐色	1~2mmの砂粒多い		やや不良

插図番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
148	SD 03	壺	25.9	—	—	複合口縁。比較的高い口縁部は端部を外方に折り曲げる	淡黄褐色	2mmくらいの砂粒少しみられる。1mm以下のもの多い	普通	
149			19.6	—	—		乳褐色	0.5mm以下の砂粒多く含む	やや不良	外面一部にスス付着
150			14.9	—	—	複合口縁。口縁端面に1条の沈線	外/濃肌色 内/濃肌色~汚れた肌色	0.5~1mmの砂粒多く含む	不良	外/一部スス付着
151			13.2	—	—	複合口縁。口縁端丸くおさめる	外/淡赤褐色 内/褐色	0.5mm前後の砂粒多い		
152			16.0	—	—	複合口縁。口縁端をわずかに内側に折り曲げる	乳褐色	1mm以下の砂粒多い	やや不良	
153			13.9	—	—	複合口縁。口縁端に平坦面をつくる	外/砂色 内/淡赤灰褐色	1mmくらいの砂粒少し含むそれ以下のもの多い	普通	外/一部スス付着
154			17.4	—	—		明るい肌色	0.5mm以下の砂粒多い。1mmくらいのものもある	やや不良	
155	SD 03上層	底部	—	—	—	かすかな平底。外面ハケメか。内面ヘラケズリ。底部に指頭圧痕	内/ごく淡い赤褐色	1mm以下、特に0.5mm以下の砂粒非常に多い	不良	外/全体にススが付着していたと思われる
156	SD 03	壺	14.6	—	—	単純口縁。口縁内外ハケ。体部外面左上がりのタタキ。内面ケズリのち粗いハケメ	外/灰褐色 内/淡褐色	長石、石英、茶褐色の粒子	良好	外/一部スス付着
157			10.9	—	—	単純口縁。端部を内側に肥厚させる	灰褐色	0.5mm程度の砂粒を少量含む		
158			15.0	—	—	単純口縁。端部は丸くおさめる	淡褐色	0.5mm以下の砂粒少し含む全般的に密である	やや良好	
159			15.8	—	—	単純口縁。端面に1条の沈線。端部を内側に肥厚させる	淡灰褐色	石英、長石の細砂粒含	普通	
160			18.8	—	—	単純口縁。端部丸くおさめる	灰色	0.5mm以下の砂粒多い	やや不良	
161			14.1	—	21.6	複合口縁。比較的短い口縁は端部を折り曲げ、平坦面をつくる。球形に近い体部	黄褐色	石英の細砂粒含むが、比較的密	良好	口縁部対向する位置に黒斑あり。火にはかけなかったものかスス付着せず。底部穿孔
162			12.7	—	—	短く内傾する口縁	乳褐色	0.5~1mmの砂粒含む	普通	
163			22.1	—	—	複合口縁。口縁端は外方に折り曲げる。頸部に刺突文	淡褐色	0.5~1mmの砂粒非常に多い		
164			—	—	—	内外面ハケメ。内面頸部下に指頭圧痕	外/乳褐色 内/灰褐色	0.5mm以下の砂粒非常に多い	やや不良	
165			—	—	—	頸部片。「S」「O」のスタンプをおす	淡赤黄褐色	0.5mm以下の砂粒非常に多い	普通	

挿図 番号	出土地点	器種	法量 cm			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考		
			口径	底径	器高							
166	SD 03	壺	20.1	—	—	複合口縁。口縁端を折り曲げ端部に平坦面をつくる	汚れた黄褐色	0.5~1.0 mmの砂粒を多く含む	普通	外面一部スス付着		
167			25.1	—	—	複合口縁。口縁端を外方に折り曲げる。頸部ハケ原体による刺突	乳黄褐色	1 mm以下の砂粒多い				
168			26.1	—	—	複合口縁。頸部を欠く。口縁端、肩部に円形浮文。肩部、口縁内面に鋸歯文	口縁 / 乳白色 外 / 淡茶褐色 内 / 乳白色	φ 1 mm前後の大粒のもの含む。角のとれた丸い粒目立つ。体部片茶色の粒多い	やや不良	口縁 / 内側黒斑あり		
169	底 部	甕	10.5	—	—	「く」の字に外方へ折り曲げた口縁。端部丸くおさめる	外 / 黒灰色 内 / 淡褐色(肌色)	1 mm以下の砂粒多く含む	普通	やや不良		
170		底 部	—	3.2	—	内凹になる小形品の底部	外 / 灰褐色 内 / 灰色	1~3 mmの砂粒含む	不良			
171		短頸壺	6.3	—	—	短く直立する口縁をもつ小形の壺。肩部に文様がある	淡赤黄色	1 mm前後の砂粒多く含む				
172	底 部	甕	8.0	—	—	短く折れ曲がる口縁。端部は丸くおさめる	灰褐色	微細砂粒多い	普通	1 mmくらいの砂粒少し含む		
173		底 部	—	5.3	—	平底。調整不明	淡灰褐色	1 mmくらいの砂粒少し含む				
174		—	—	4.4	—	平底。外面ヘラミガキ。内面ハケ	灰褐色 内面は少し白っぽい	微細砂粒多い 1 mmくらいのものもある				
175	高 杯	杯	16.2	—	—	ゆるやかに屈曲して開く杯部。内面底部放射状のヘラミガキ	暗黃褐色	0.5 mm以下の砂粒多い。1~2 mmのものもみられる	やや不良	やや不良		
176		—	15.8	—	—	外面横方向のヘラミガキ。内面放射状のヘラミガキ	淡黃灰褐色	1 mmまでの細かい砂粒を多く含む	良好			
177		—	—	10.4	—	中空の脚柱	淡赤褐色	微細砂粒多い 0.5~1 mmくらいのものもごく少量	普通			
178		—	—	—	—	中実の脚柱。外面タテ方向のヘラミガキ	灰褐色	1 mm以下の砂粒多く含む	やや不良			
179		—	—	—	—	穿孔のある高杯脚。外面はタテ方向のヘラミガキ	外 / 朱色 内 / 乳褐色	1 mmくらいの砂粒含む。 0.5 mm以下のもの多い	良好	外面、杯内面に赤色塗彩		
180	小形器台	—	—	—	—	大形品の脚柱部。外面タテのヘラミガキ。内面ヘラケズリ	淡黃褐色	1 mmくらいの砂粒多い。 1.5 mmくらいのものもある。	普通	やや不良		
181		10.0	—	—	—	浅い受部。上端は短く立ち上がる。内外面ヘラミガキ	淡褐色 口縁部外面黒色	1 mm以下の砂粒含む	不良			
182		高 杯	—	—	—	杯底部から屈曲して大きく開く脚部。透し穴数不明	外 / 淡褐色 内 / 暗桃色	0.5~1 mmの砂粒非常に多い				
183	低脚杯	—	—	—	—	穿孔のある脚部。内外面ヘラミガキ	乳赤黄褐色	微細砂粒多く含む	1 mm前後の砂粒多い	やや不良		
184		11.1	4.5	3.1	—	比較的小ぶりな脚に浅い杯が接合する	淡赤褐色					

插図番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考				
			口径	底径	器高									
185	SD 03	低脚杯	—	—	—	比較的小ぶりな脚に浅い杯が接合する	灰褐色	0.5mm以下の砂粒含む	普通					
186		鼓形器台	28.6	—	—	大形の製品。外面ヨコナデ。上台内面ヘラミガキ。下台内面ヘラケズリ。筒部内面は稜線となる。186,187は同一個体の可能性あり	淡赤黄褐色	2~3mmの砂粒もみられる 1mm以下のもの多い						
187							赤黄褐色	良好						
188		コシキ	14.0	—	—	コシキ形土器口縁部か。 直立する口縁	外 / 淡褐色 内 / 淡い灰褐色	1~1.5mmの砂粒含む。1mm以下のもの多い	普通					
189														
190		装飾壺	23.0	—	—	口縁、頸部各部に平坦面をつくり、板による刺突で飾る。「U」字形スタンプは口縁外面	外 / 口縁部黒色、口縁以下淡褐色~淡黄褐色	石英、長石、雲母含む	良好	内面に赤色顔料をとどめる				
191		ハニワ												
192		タテ方向のハケメ。内面工具によるヨコナデ				淡褐色	大粒の石英、長石含む	外面上に赤色顔料を塗布するか						

吉備系土器

193	SD 02	吉備系壺	19.9	—	—	直立に近い口縁外面に6条の沈線。頸部にも同様の沈線。内外面ヘラミガキ	褐色	金雲母、黒色の光沢ある砂粒含む。比較的密	良好	外面、口縁部内面赤色塗彩
194	E-4 磬灰粘		—	—	—	頸部。外面タテハケのち、ヘラによる沈線	明淡褐色	密、白色小砂粒を少量含む		
195	北壁排水路		—	—	—	平行沈線を欠く。内外面ヨコナデ	淡褐色	密、白色小砂粒を含む		淡赤茶色の顔料を内外面に塗彩
196	E-4 磬灰粘		—	—	—	頸部。外面タテハケ。内面ヨコのヘラケズリ	内 / 灰褐色 断 / 暗灰色	1mm前後の白色砂粒を多く含む		外面赤色顔料塗彩
197	H-2,3 土②		23.8	—	—	口縁端部を折り曲げ、その端面に4条の平行沈線。内外面粗いハケメ	外 / 暗褐色 内 / 暗褐色~黒色	黒色の細砂粒、金雲母含む		
198	FG-4 磬 灰色粘		26.0	—	—	複合口縁。口縁部直立に近く立ち上がる。内面にカキメ状のハケメ	淡褐色	長石細砂粒目立つ		内外面とも赤色塗彩
199	南西隅礫層		25.1	—	—	大きく開く口縁。端部を折り曲げ平坦面を作る。外面ヘラミガキ、内面ハケのちナデ	外 / 茶灰色 内 / 灰褐色	1mm前後の砂粒を多量に含む(白色、灰色、赤褐色、黒色)		
200	SD 02 磬層		—	—	—	肩部。外面はタテ方向のヘラミガキ。内面はヨコ方向のヘラケズリ	暗褐色	石英、長石、黒色の光沢ある石、余色の粒子含む	普通	外面赤色塗彩

「土」は土器溜りの略

S X 0 3

捕団番号	出土地点	器種	法量 cm			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
201	D-2・3土 SX01墓壙内 C-2黒褐	甕	19.4	-	-	複合口縁。口縁端に平坦面をつくる	外 / 灰白色～淡赤褐色 内 / 淡赤褐色	φ1mm以下の石英・長石・金雲母含む	普通	
202	D-2・3土 D-2・3土④ SX01 SX01墓壙内 D-3黒褐 D-2黒褐 C-2黒褐		22.3	-	-	複合口縁。長く立ち上がる口縁部。複合口縁部下方にたれる。肩部に波状の文様	淡赤褐色	φ1mm前後の長石目立つ	不良	
203	D-2・3土 D-2 SX01 SX01墓壙内		23.3	-	-	複合口縁。長く立ち上がる口縁。肩部に刺突文	黒っぽい赤褐色	石英、長石の細砂粒多い	やや不良	
204	D-2・3土①		15.0	-	-	単純口縁。端部に1条の沈線	灰褐色	石英、長石φ1mm前後のもの目立つ。やや砂質		
205	D-2・3土④		15.9	-	-	単純口縁。端部丸くおさめる	淡橙色	石英、長石の細砂粒含。やや砂質	普通	
206	D-2・3土④		17.5	-	-	複合口縁。長く立ち上がる口縁。端部に平坦面をつくる	外 / 淡褐色 内 / 黄褐色	石英、長石の細砂粒含		外面スス付着
207	D-2・3土⑤	壺	15.6	-	-	複合口縁。内傾する口縁部。口縁端は外方に短く折り曲げる	肌色	摩耗して丸くなったり赤褐色 黒茶色の砂粒含む。近畿系の土器の胎土	良好	外面赤色顔料塗布か。外面スス付着
208	D-2・3土③ D-2・3土④ D-2・3土⑤ D-2・3土 C-2黒褐	高杯	27.0	-	-	大形の製品。やや深い杯部。内外面ともヘラミガキ	赤褐色	細砂粒含。金雲母含		赤褐色を呈する色調は二次焼成を受けたためのものか
209	D-2・3土④ C-2黒褐 D-2黒褐		25.8	-	-	大形の製品。やや浅い杯部。内外面ともハケメ	淡赤褐色	φ1mm以下の石英、長石、金雲母含		
210	D-2・3土④ D-2黒褐		-	-	-	長い筒状の脚部。外面ヘラミガキ		石英、長石の細砂粒やや多い	やや不良	
211	D-2・3土①		-	-	-	長い筒状の脚部。外面タテハケ	外 / 黄灰色 内 / 暗赤褐色	石英、長石など細砂粒含	良好	
212	D-2・3土④ D-2黒褐		-	14.9	-	脚裾部。外面タテのヘラミガキ	淡赤褐色	石英、長石、金雲母含		内面に5本線のヘラ記号
213	D-2・3土 D-3黒褐		-	-	-	筒状の脚部。外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ		1mm以下の砂粒含む		
214	D-2・3土④ D-2黒褐		-	15.2	-	脚下半部。外面ヘラミガキ。内面ハケメ。透穴11個残存	淡褐色	微細な砂粒多		
215	D-2・3土 D-2・3土④ SX01墓壙内 C-2黒褐	低脚杯	21.8	-	-	直線的に開く浅い杯部	淡赤褐色	φ1mm前後の石英、長石含む	やや不良	
216	C-2黒褐 C-3黒褐 D-2黒褐 D-2・3土器溜		23.5	-	-	大形の製品。わずかに内湾する杯部。外面ハケ、内面放射状のヘラミガキ。脚接合時の刻み目がみえる	淡赤灰褐色	1mm前後の砂粒を多く含む	良好	

「土」は土器溜りの略

插図 番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
217	D-2・3土 D-2・3土⑤ D-2黒褐	鼓形器台	21.2	18.8	10.3	上台、下台間縮約したもの。上台端面は平坦面をつくる	外 / 淡褐色 内 / 黄灰色～淡褐色	石英、長石の細砂粒含む	普通	
218	D-2・3土 D-2・3土④ D-2・3土⑤		24.7	21.4	11.8	大形の製品。上・下台間縮約する。端部丸くおさめる	淡赤褐色	1mmまでの小砂粒を含む	良好	
219	D-2・3土② D-2・3土④ D-2・3土⑤		24.3	22.4	11.8		淡赤橙色	1mm未満の長石、石英粒を多く含む	おおむね良好 一部軟質	
220	D-2・3土① D-2・3土④ C-2黒褐 C-3黒褐 D-2黒褐 D-3黒褐 SX01		31.7	28.1	13.9	極大形の製品。上・下台間縮約。端部に平坦面をつくる	赤褐色	石英、長石の細砂粒多い	普通	赤褐色の色調は二次的に焼かれたものか

S X 0 6

221	C・D-4土⑤	甕	17.5	—	—	複合口縁。薄く引き出したような口縁	淡灰褐色	1mmまでの長石、石英粒をかなり含む	やや不良	
222	D-4土③		15.1	—	—	複合口縁。口縁端を丸くおさめる	黄灰褐色	φ1mm以下の石英目立つ	普通	
223	D・E-3土④		16.0	—	—	複合口縁。口縁端は外に折り曲げる。肩部に雜に刺突文	灰褐色	小砂粒を含む(白色、金色、灰色)	良好	
224	D・E-3土③		18.8	—	—	複合口縁。口縁端は外に折り曲げる。肩部に雜に波状文	白褐色 (口縁端 黒褐色)	1mm未満の長石、石英粒をたくさん含む		
225	D-4土②		14.7	—	—	複合口縁。薄く引き出したような口縁部。肩部平行線文	淡橙色	φ1mm位の長石、石英		
226	D・E-3土③ D・E-3土①～④括		15.7	—	—	複合口縁。薄く引き出す口縁部。肩部に雜な平行線文	外 / 茶褐色 内 / 黄褐色～茶褐色	石英、長石 φ1mm以下の砂粒含む	普通	
227	D・E-3土④		15.3	—	—	複合口縁。比較的短い口縁は端部を丸くおさめる	外 / 灰褐色～暗褐色 内 / 黄褐色	石英など細砂粒含む	良好	外面スス付着
228	D・E-3土⑥		21.3	—	—	複合口縁。比較的高い口縁部。端部は外に折り曲げ、平坦面をつくる。肩に雜な刺突文	外 / 灰褐色～肌色 内 / 淡黄褐色	石英、長石 φ1mm前後のもの目立つ		
229	D-4土①		14.1	—	22.8	複合口縁。短く立ち上がる口縁はわずかに内傾。かすかな平底	淡黄灰色	細砂粒含む、あさき色の砂粒	普通	下半にスス厚く付着
230	D-4土③ D-4灰褐粘		22.1	—	34.6	複合口縁。高い口縁部。端部は平坦面をなす。かすかな平底		石英砂粒(φ1mm以下)目立つ		外面肩部以下スス付着
231	D-3土 D・E-3土⑥	高杯	12.8	13.8	9.8	やや深い杯部に屈曲して開く脚部。4方透しか	淡灰褐色	細かい砂粒を含む	やや不良	赤褐色の顔料塗彩
232	SX06	小形丸底鉢	17.4	—	—	稜をもつ口縁部から屈曲してやや深い杯部にいたる	外 / 淡灰褐色 内 / 灰色	石英、長石目立つ	普通	
233	D・E-3土① D・E-3土②	高杯	22.9	—	—	丸味をもった杯部。脚柱内面接合時の深い刺突	淡褐色～肌灰色	小砂粒を多く含む		

「土」は土器溜りの略

捕団番号	出土地点	器種	法量 cm			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
234	D・E-3 土①	鼓形器台	21.7	-	-	比較的高い上台部。内面ヨコ方向のヘラミガキ	外 / 淡灰褐色 内 / 淡橙色	石英、長石などφ1mm前後の大粒の砂粒多い	不良	
235	C・D-4 土⑤		-	18.5	-	比較的低い下台部。端部に平坦面をつくる	淡褐色～灰褐色	2mmまでの砂粒を多量に含む(長石、石英、茶色砂粒)	良好	

S X 0 8

236	SX08ピット内	甕	23.5	-	-	複合口縁。貝殻腹縁2単位による平行沈線	乳白色	φ1mm前後の大粒の石英、長石含む	普通	
237	SX08ピット上面	器台	36.5	-	-	大形の製品。上下に拡張した端部に凹線。内面細かいヘラミガキ	黄褐色	石英、長石の細砂粒含む	良好	
238		鼓形器台	-	-	-	大形の製品。上台部。上台下端は下方にたれ下がる内面細かいヘラミガキ				

S X 0 9

239	SX09	鼓形器台	34.5	-	-	大形の製品。高い上台。上台下端貝殻による2段の刺突文	外 / 赤褐色 内 / 黄褐色～赤褐色	石英、長石などφ1mm前後のもの含む	普通	
240		高杯	-	-	-	大形の製品。脚外面ヘラミガキ。杯内面放射状のヘラミガキ。3方透し	外 / 黄褐色～淡赤褐色 内 / 淡赤褐色	金雲母、石英、長石の細砂粒含む。土は精選されたものか	良好	

S X 1 0

241	SX10	甕	17.9	-	36.7	単純口縁。わずかに内湾して直線的に立ち上がる。球形の体部。外側は細かいハケメ。内面ヘラケズリ	外 / 肌色～淡赤褐色～灰色～黒灰色 内 / 肌色	1～3mmの摩耗した凹凸を多量に含む	やや不良	
-----	------	---	------	---	------	--	------------------------------	--------------------	------	--

S B 0 1

242	SK11(SB01)	甕	16.9	-	-	複合口縁。薄く引き出す口縁。端部丸くおさめる	赤味がかった淡褐色	石英、長石の細砂粒含むが密	良好	外面スス付着	
243	SK06(SB01)	鼓形器台	-	18.2	-	上・下台間比較的広い。下台部比較的高い	灰色がかった淡黄褐色	石英、長石、茶色の砂粒かなり目立つ	やや不良		
244	SK05(SB01)	低脚杯	10.9	5.7	4.7	小ぶりな厚手の杯部。やや深い。直線的に開く脚部	淡黄灰色～灰褐色	石英、長石の大粒の砂粒含む			

S B 0 2

245	SB02	甕	16.2	-	-	やや厚手の口縁部。端部かすかに折り曲げ、平坦面をなす	肌色 断面 / 黑灰色	白色微砂粒を含む	良好	
246		高脚杯	14.4	-	-	厚手の小ぶりな杯。外側かすかにハケメ	茶橙色	密、白色小砂粒を含む	やや不良	
247		壺	8.2	-	-	口縁下にかすかに屈曲をもつ	淡橙灰色	密、白色、暗灰色の微砂粒を含む	良好	

「土」は土器溜りの略

C D - 4 区土器溜り

捕団 番号	出土地点	器種	法量 cm			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
248	C・D-4 土②	甕	15.6	—	—	複合口縁。比較的長い口縁部をもち、端部は軽く外方に折り曲げるか、丸くおさめる	外 / 淡褐色 内 / 淡橙褐色	密, 1mm未満の長石, 石英, 灰色の砂粒を含む	普通	口縁部にスス付着
249			16.1	—	—		濃灰茶色	密, 1mm未満の長石, 石英	良好	
250	C・D-4 土⑦		17.4	—	—		淡肌色	1mm未満の長石, 灰色, 茶色の砂粒をかなり含む	普通	
251	C・D-4 土③		16.8	—	—		淡褐色	1mmまでの長石, 石英, 雲母, 茶色砂粒をたくさん含む		口縁部外面に黒褐色のススが一部付着
252	C・D-4 土⑯		19.1	—	—		淡褐色～暗灰褐色	1mm未満の長石, 石英粒を多量に含む		
253	C・D-4 土⑥		20.5	—	—		淡褐色～淡灰褐色	1mm前後の長石粒及び灰～暗灰色砂粒を多量に含む	やや不良	
254	C・D-4 土⑦		20.0	—	—		淡褐色～暗灰褐色	密, 1mm前後の長石粒を含む	良好	
255	C・D-4 土②		20.7	—	—		淡肌灰色	1～2mmの長石, 石英0.5mm以下の雲母を多量に含む	やや不良	
256	C・D-4 土⑬		21.9	—	—		外 / 肌色～暗灰色 内 / 肌色	密, 微小な長石, 石英粒を含む	良好	
257	C・D-4 土⑯		20.5	—	—		淡橙色～灰褐色	1mmまでの長石, 石英粒をかなり含む	普通	
258	C・D-4 土⑯		17.0	—	—		淡褐色～灰茶色	1mm前後の白色, 灰色, 透明の砂粒を多量に含む		
259			15.0	—	—		橙灰色	1mm未満の白色砂粒を多く含む	やや不良	
260	C・D-4 土⑩		16.7	—	—		淡褐色	密, 1mmまでの長石粒少量	良好	外面の一部にスス付着
261	C・D-4 土②		15.2	—	—		淡茶灰色	密, 1mm以下の長石, 石英粒		外面にはスス付着
262	C・D-4 土⑧		14.5	—	—		淡褐色	密, 長石, 石英, 雲母, 茶褐色等の細胞粒をかなり含む		
263	C・D-4 土⑯		18.6	—	—		灰褐色	密, 1mm未満の砂粒をかなり含む		
264	C・D-4 土⑨		16.9	—	—		外 / 灰褐色 内 / 淡橙色	密, 微細な長石, 石英粒		外 / 一部スス付着

「土」は土器溜りの略

挿図 番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
265	C・D-4土⑧	甕	16.3	-	-	複合口縁。比較的長い口縁部をもち、端部は軽く外方に折り曲げるか、丸くおさめる	淡褐色	1mm未満の長石、雲母等の砂粒をかなり含む	良好	口縁外面に黒斑 一部スス付着 一部赤味を帯びる
266			13.8	-	-		淡橙褐色	1mm未満の長石、雲母、灰色の砂粒含む		
267	C・D-4土⑪		18.7	-	-		淡褐色	密、1mmまでの長石、石英粒をかなり含む		
268	C・D-4土⑦		16.8	-	-		1mm前後の長石粒をかなり含む			
269	C・D-4土⑥		17.8	-	-		淡肌色	1mm大の白色及び暗灰色砂粒を多く含む		
270			29.8	-	-	複合口縁。比較的長い口縁部をもち、端部を軽く外へ折り曲げる	淡褐色(口縁外面橙褐色～暗褐色)	1mmまでの長石、石英粒	普通	
271	C・D-4土⑦ C・D-4 土⑥⑦下層	甕	15.7	3.7	25.4	複合口縁。比較的長い口縁。端部を外へ折り曲げる。倒卵形の体部。かすかな平底	外/淡褐色～ 内/淡褐色	石英、長石φ 1mm以下のもの含む	良好	外/スス付着 内/炭化物付着
272	D-4土⑤		16.9	-	29.2	口縁端部丸くおさめる。倒卵形の体部。かすかな平底	淡黄灰色	φ1mm以下の石英、長石含む。やや砂質	不良	外面スス付着
273	C・D-4土⑯		19.2	-	-	複合口縁。口縁端は丸くおさめる。よく張った肩部	淡褐色	1mm前後の砂粒を多量に含む(白色、灰色透明)	良好	口縁と体部外面に一部スス付着
274	C・D-4土⑦		15.0	-	-	複合口縁。口縁端は狭い平坦面をつくる		~1mmの長石粒を多量に含む		体部と口縁の一部にスス付着
275	C・D-4土⑥	甕	15.8	-	-	複合口縁。高い口縁。端部は外に軽く折り曲げる。肩部に板による刺突文	外/淡褐色～ 内/淡褐色	1mm前後の砂粒を多量に含む	普通	外/下半にスス付着
276	C・D-4土④⑥		36.2	-	-	大形の甕。複合口縁。口縁上端で平坦面をつくる	淡褐色	1mm前後の砂粒(白色、灰色透明、茶色等)を多量に含む	良好	口縁外面に一部黒斑
277	C・D-4土⑯		19.2	-	-	複合口縁。比較的長い口縁部は、端部をわざかに外方に折り曲げる	淡橙褐色	密		
278	C・D-4土⑦		15.6	-	-		淡褐色～灰褐色	1mmまでの長石粒をかなり含む		
279	C・D-4土⑩		17.8	-	-		淡赤灰色	1mm前後の砂粒を多量に含む	不良	
280	C・D-4土②		18.8	-	-		淡灰褐色	密、1mm前後の砂粒をかなり含む。2～3mmの砂粒を若干含む	普通	口縁の一部と胴部下半にスス付着
281	S D 0 5 土坑部	甕	12.8	-	-	単純口縁。丸味をもった体部。外面に水平のタタキ	灰赤色	1～3mmの白色、暗灰色の砂粒	良好	体部下半スス付着
282	C・D-4土⑥		13.2	-	-	単純口縁。右上がりのタタキ。内面ヘラケズリ	灰茶色	密、2mmまでの白色粒を含む		

「土」は土器溜りの略

捕図 番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
283	C・D-4土⑥	甕	—	—	—	単純口縁。右上がりの細かいタタキ。のちハケ。口縁内ヨコハケ。体部内面ヘラケズリ	濃褐色～一部黒褐色	長石,石英,雲母の細砂粒をかなり含む	良好	
284	C・D-4土①⑥ C・D-4土 D-5黒褐下層 D-2黒褐	瓦質土器	—	—	—	半球形の体部。1対の平面四角な把手。円孔をもつ。外側は辺2～3mmの菱形のタタキ。内面は當て具の痕跡か。把手上下にヘラ沈線	灰色	精選されるが微砂粒を含む		
285	D-4土⑥ D-3土	甕	12.0	2.5	14.6	単純口縁。球形に近い体部。痕跡は見えないが、タタキで整形か。小さい平底	淡黄褐色	石英約1mm前後の目立つ。赤褐色の粒子含む。	普通	外/胴部最大径以下スス付着 内/底部付近スス付着
286	C・D-4土⑥	壺	17.5	—	—	複合口縁。口縁端をわずかに外方に折り曲げる	淡褐色	密、1mmまでの白色砂粒を若干含む	良好	外/体～底部にかけてスス付着
287	C・D-4土⑨⑩ D-4礫灰色粘		23.5	—	—		外/灰褐色 (一部黒色) ～淡橙色 内/灰褐色～淡褐色	1mm前後の長石、石英粒をかなり含む		
288	C・D-4 土⑥⑦下層 SD05土坑部 C・D-4土⑩ F-3土⑯ D-4黒褐下層 D-4灰褐		12.5	2.8	27.3	単純口縁。屈曲して開く口縁。体部外面タタキのちヘラミガキ。かすかな平底。肩部内面は口縁接合時の指頭圧痕	外/淡褐色 内/灰色～灰褐色 底部黒褐色	1mm前後の暗灰色、茶褐色、白色の砂粒を含む		
289	C・D-4土②		21.2	—	—	複合口縁。比較的長い口縁部をもつ	淡褐色(口縁外面の一部黒灰色)	長石,石英,雲母等の微細な砂粒を含む		
290	C・D-4 土⑥⑦下層	高杯	26.5	—	—	浅く屈曲して開く杯部	黄褐色	1mm前後の砂粒含む	普通	
291	C・D-4土②		—	—	—	丸味をもつ杯部。脚接合時の刺突痕が見える	淡灰褐色	細かい砂粒を多量に含む	良好	
292	C・D-4土⑩		—	12.7	—	やや長い脚柱部。外面タテハケ。内面ヘラケズリ。裾内面ハケメ	淡褐色	1mmまでの細砂粒を多量に含む	普通	
293	C・D-4土⑪⑯		—	13.9	—		淡褐色(一部黒斑)	密、1mmまでの長石,石英,雲母	良好	
294	C・D-4土⑥	直口壺	10.3	—	—	直立する口縁部。肩部にクシ状工具による平行沈線	褐色	1mm未満の長石粒を多量に含む		
295	C・D-4 土⑥⑦下層	小形丸底鉢	10.0	—	—	短い口縁。やや深い体部。外面一部をミガくか	茶灰色	密		
296	C・D-4土⑥	鉢	12.6	—	—	深めの杯部。内外面にヘラケズリ	淡橙褐色			
297	C・D-4土⑩	鼓形器台	23.9	20.8	11.0	上・下台間縮約した製品。端部を折り曲げる。外面ヨコナデ、上台内面ヘラミガキ、下台内面ヘラケズリ	灰色がかった淡桃褐色	1mm以下の長石,石英粒、1～2mmの灰色砂粒をかなり含む	普通	外/胴部最大径以下スス付着 内/底部付近スス付着
298	C・D-4土⑦		22.7	—	—		淡橙褐色	密		
299	C・D-4土⑯		22.7	—	—		淡灰褐色			

「土」は土器溜りの略

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
300	C・D-4土⑧	鼓形器台	21.1	18.5	10.8	上・下台間縮約した製品。端部を折り曲げる。外面ヨコナデ、上台内面ヘラミガキ、下台内面ヘラケズリ	淡灰褐色	φ1mm以下の石英、長石かなり含む	普通	脚台内面に2本線のヘラ記号
301	C・D-4土		20.0	—	—		灰橙色	白色小砂粒を多く含む	やや不良	
302	C・D-4土⑥		21.5	—	—		薄肌色	白色、透明、茶褐色の細砂を多量に含む	普通	
303			—	—	—		外 / 淡桃褐色 内 / 淡褐色～暗灰褐色	1mm未満の長石、石英粒を含む	良好	
304			—	—	—		淡褐色	茶褐色、透明、白色の細砂を多量に含む		
305	C・D-4土⑩		—	19.0	—		外 / 灰褐色 内 / 淡褐色	1mmまでの白色及び灰色の砂粒を含む	普通	

D E - 3 区土器溜り

307	D・E-3土⑧	甕	16.1	—	23.4	複合口縁。比較的高い口縁部。倒卵形の体部。痕跡的な平底	外 / 肌色～淡赤褐色 内 / 淡灰褐色	石英、長石φ1mm前後のもの多い	不良	
308	D・E-3土⑭		22.7	—	—	複合口縁。比較的高い口縁部。端部を外方に軽く折り曲げる	明淡褐色	1mm未満の白色砂粒及び微小な透明砂粒を含む	良好	
309	E-3土⑪		23.0	—	—		淡褐色	細かい砂粒をかなり含む		
310	D・E-3土⑭		20.2	—	—			1～2mm大の砂粒を多く含む。4～5mm大の砂粒少量		
311			16.6	—	—		橙褐色	1mm前後の砂粒(白色透明)を多く含む		外面スス付着
312			13.0	—	—	複合口縁。内面は頸部から直線的に立ち上がる	乳灰色	白色、茶色、透明等の微砂粒を多く含む	普通	
313			13.5	—	—	単純口縁。丸味をもった頸部から直線的に開く口縁部。	淡灰褐色	1mm前後の大砂粒(白色、透明)を多く含む	良好	
314			13.8	—	—	複合口縁。比較的短い口縁部。端部をわずかに外方に折り曲げる	灰褐色	1mm未満の白色及び透明な小砂粒を多く含む	普通	
315			17.0	—	—			白色砂粒を含む	良好	
316			23.2	—	—		淡褐色	1mm未満の小砂粒を含む		
317	E-3土①		16.6	—	—			1mm前後の長石、1mmまでの石英、金雲母多量		外面スス付着

「土」は土器溜りの略

插図番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
318	E-3 土②	甕	12.8	-	-	複合口縁。短く内傾する口縁部	淡茶褐色	1mmまでの砂粒若干	良好	外面の一部にスス付着
319	D・E-3 土⑭		16.4	-	-	複合口縁。やや短い口縁は、端部を外方に折り曲げる	淡灰褐色	白色微砂粒を多く含む		
320			15.9	-	-		肌灰色	微砂粒を含む(石英、長石)		
321			20.1	-	-	複合口縁。比較的長い口縁は端部で平坦面をつくる	外 / 橙灰褐色 内 / 淡肌灰色	白色、透明、灰色、茶褐色等の微小な砂粒を多く含む	普通	良好
322	E-3 土⑦		15.2	-	-		淡褐色～灰茶褐色	1mm前後の長石多数		
323	E-3 土⑥	高杯	17.2	-	-	丸味をもってやや深い杯部。厚手。内外面ヘラミガキ	薄肌色	1mmまでの石英、茶褐色、灰色砂粒をたくさん含む		
324	E-3 黒褐	脚付杯	12.4	-	-	小ぶりな丸味をもった杯に中実の脚が接合する。内外面ヘラミガキ	淡茶褐色	密、1mm前後の長石、石英粒		
325	D・E-3 土⑭ D-3 土 D-3 黒褐	高杯	18.6	12.6	13.9	屈曲をもち、やや深い杯に中実の脚が接合する。外面、杯内面ヘラミガキ	淡赤褐色	石英、長石含む。どことなく在地のものと土が異なる	普通	外面・内面赤色顔料塗布
326	E-3 土③		-	17.5	-	短い筒部から大きく述べて開く裾部へいたる。4方透し	淡褐色～淡灰褐色	0.5mmの大い砂粒(白色、暗褐色、金色等)を多量に含む	良好	
327	E-3 土⑤		-	14.1	-	長い筒部の脚。外面ヘラミガキ。内面シボリメ、裾部ハケ	淡褐色	1mm未満の細かい砂粒をかなり含む		
328	D-3 土	低脚杯	16.0	7.4	6.5	丸味をもち、比較的深い杯部	外 / 淡褐色～褐色 内 / 淡橙褐色	1mmまでの長石、石英、雲母多	やや不良	脚及び杯外底部スス付着か
329	E-3 土④	小型器台	10.7	13.4	10.0	口縁下に突帯のある受部。大きく開く裾部。4方透し	淡灰褐色	細砂粒含むが比較的密	良好	外面、受部赤色塗彩
330	D・E-3 土⑩ E-3 土		9.1	-	-	突帯のある受部。中実の脚柱部	淡橙褐色	1mmまでの白色、暗灰色の砂粒を含む		
331	D-4 碓灰色粘 D-4 灰色粘 D・E-3 土⑩	鼓形器台	21.1	19.1	11.3	縮約のすんだ上・下台。外面ヨコナデ、上台内面ヘラミガキ。下台内面ヘラケズリ	肌灰色～灰橙褐色	1～2mmの大い長石、石英粒を多く含む	やや不良	
332	D・E-3 土⑩		20.8	-	-		淡褐色～淡橙褐色	1mm前後の長石、石英を多く含む	良好	
333	D・E-3 土⑧		22.2	-	-		淡褐色	1mm前後の砂粒(白色灰色)を多く含む	普通～ やや不良	

F-3 区土器溜り

334	E・F-3 土⑤	甕	14.4	-	21.8	複合口縁。全体に厚手。肩部に波状文。体部上半粗いヨコハケ。下半細かいタテハケ。球形に近い体部	淡灰褐色	石英、長石の細砂粒含む。比較的密	良好	口縁部余り丁寧に仕上げない。体部に焼成後の穿孔。外面スス付着
-----	----------	---	------	---	------	--	------	------------------	----	--------------------------------

「土」は土器溜りの略

插図番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
335	F-3 土⑬	甕	16.2	—	24.9	複合口縁。比較的高い口縁部は端部を外方に折り曲げ、端部に平坦面を作る。球形に近い体部	外 / 淡灰色 内 / 淡黄灰色	石英、長石含むが比較的密	良好	
336	E・F-3 土⑥		16.5	—	—	複合口縁。口縁端に平坦面をつくる。肩部に波状文。球形に近い体部。体部上半粗いハケ。下半細かいハケ	淡灰褐色			外面スス、内面炭化物付着。底部穿孔か
337	F-3 土⑯		17.1	—	—	複合口縁。端部を外方に折り曲げる	淡乳褐色	1mm前後の砂粒少し含む。 0.5mm以下のもの多い	普通	外面一部スス付着
338			15.9	—	—		乳褐色	1mm前後の砂粒少し含む。 0.5mm前後のものが多い	やや不良	
339	F-2・3 土③		16.2	—	—	複合口縁。口縁端外方に折り曲げ平坦面をつくる。肩部刺突文を施すが一周しない	淡黄褐色	石英、長石、金雲母の細粒含む	良好	
340	F-2・3 土⑥		14.9	—	—	複合口縁。口縁端に平坦面をつくる。肩部に刺突。体部上半に細かいヨコハケ。下半に細かいタテハケ	淡灰褐色	石英φ1mm～2mmの砂粒含むが比較的密		外面スス付着
341	F-3 土⑯ F-2・3 土③		14.3	—	—	単純口縁。端部内側に肥厚し、平坦面をなす。内面屈曲部の少し下までをハラケズリする	桃色がかったオレンジ	微砂粒多く含む石英、赤色粒子		
342	E・F-3 土⑪		14.4	—	17.3	複合口縁。端部に平坦面をつくる。肩部に平行沈線。球形に近い体部	淡黄灰色	石英、長石の細砂粒含む	普通	外面スス付着
343	F-3 土⑯		11.7	—	—	複合口縁。端部を外方に折り曲げる。肩に刺突文があるが一周しない	淡橙灰色	石英、長石φ1mm以下のもの多い	良好	底部以下スス付着
344	F-3 土⑤		15.0	—	—	複合口縁。端部を外方に折り曲げる	明るい肌色	1.5mmくらいの砂粒少量含む。 1mm以下のもの多い	普通	
345	F-3 土⑯	脚付小形甕	14.6	—	—	複合口縁。端部を平坦面とする	淡赤褐色 内面一部灰褐色	1mm前後の砂粒多い		外面スス付着
346	F-2・3 土⑧		20.2	—	—	複合口縁。薄くひき出したような口縁。端部を外方に折り曲げる	外 / 淡肌色 内 / 汚れた赤褐色～灰褐色	1～1.5mmの砂粒かなり含む	やや不良	
347	F-3 土⑦		16.2	—	—	複合口縁。比較的高い口縁部。端部を外方に折り曲げる	淡灰褐色	石英、長石など細砂粒多いやや砂質		
348	F-2・3 土⑦		15.5	—	—		黃白色	全体に砂質	普通	外面にスス付着
349	F-3 土④		18.6	—	—	複合口縁。比較的高い口縁部。端部は丸くおさめる。肩部に波状文	肌色	1mm未満の茶色と暗灰色、白色砂粒を多量に含む		
350	E・F-3 土⑧	脚付小形甕	11.8	—	—	複合口縁。脚が付く。外面部に丁寧にみがく。底部にヒビ	淡灰白色	φ1mm前後の石英、長石含む		口縁内に4本線のヘラ記号
351	F-3 土⑯	甕	11.6	—	12.6	単純口縁。突り気味の底部。外面部にミカキで光沢をもつ	淡灰褐色	精選され密	良好	外面スス付着

「土」は土器溜りの略

插図番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
352	E・F-3土⑩	壺	10.4	—	11.6	複合口縁。口縁端軽く外へ折り曲げる。口縁外面縁のヘラミガキ	淡茶褐色	石英、長石含むが密	良好	
353	F-2・3土④		15.3	—	—	複合口縁。端部外方に折り曲げる	明褐色	1mm未満の小砂粒を多く含む		外面スヌ付着
354	F-2・3 土④⑤⑧ F-3土⑯		19.9	—	—	複合口縁。比較的高い口縁。端部には平坦面をつくる。肩部に波状文	外/淡灰褐色 内/淡黄灰色	石英、長石の細砂粒含む	普通	
355	F-2・3土①		15.3	—	—	複合口縁。低く内傾する口縁。端部丸くおさめる。球形に近い体部	淡灰白色	石英、長石の大粒の砂粒含む、砂質	不良	
356	F-3土⑭	壺	20.1	—	35.5	複合口縁。端部に平坦面をつくる。球形に近い体部。肩部に雑な波状文		石英、長石の細砂粒含む	良好	外面肩部に赤色顔料付着か
357	F-2・3土②		19.5	—	26.3	複合口縁。大きく開き端部を折り曲げる口縁。頸下端に突帯。球形の体部	外/橙色～肌色 内/淡赤褐色～肌色	石英、長石の細砂粒や目立つ	普通	
358	F-3土⑥		17.7	—	—	複合口縁。端部に平坦面をつくる。よく張った体部。平底	肌色～淡褐色	石英、長石など細砂粒含む	良好	底部穿孔か。底部の破片を欠く
359	E・F-3土⑩		20.7	—	—	単純口縁。直線的な口縁。端部は平坦面とする。頸下端に突帯	淡黄灰色	1～3mmの大暗灰色、茶褐色砂粒を多く含む		外面の一部黒褐色、スヌによるものか
360	F-3土⑫	直口壺	10.5	—	—	複合口縁。筒状の口縁部。端部丸くおさめる。口縁外面にタテのヘラミガキ	淡黄褐色	0.5mm以下の細かい砂粒多い。ごく少量1mm以上のものも含む	普通	
361	F-3土③	壺	15.6	—	—	単純口縁。外反して立ち上がる口縁。端部は上方に引き上げる。外面かすかにタタキ痕をのこす	淡灰黄色～淡灰橙色	1～3mmの大茶褐色、灰褐色、白色の砂粒を多く含む	良好	
362	E・F-3土①	小形丸底壺	10.9	—	—	偏平な体部から、内湾して立ち上がる口縁部。脚があるものだったか。内外面部的にハケメをとどめる	外/だいぶ風化しているうすいオレンジ色 内/口縁部うすいオレンジ色、胴部-白褐色	1mm以下の砂粒多く含む 石英、長石含む		
363	F-3土⑭		10.5	—	—	直線的に立ち上がる口縁部。体部外面にハケメ	赤褐色	0.5～1mmの砂粒ごく少量含む	不良	
364	F-3土⑭		8.4	—	8.7	偏平な球形の体部から直線的に立ち上がる口縁部	灰白色～淡灰色(黒斑)	石英、長石の細砂粒含む、砂質	やや不良	
365	F-3土③ F-3 黒褐色土下層	壺	9.9	—	—	短く直立する口縁部。肩部に波状文	肌色	茶褐色、暗褐色、白色の砂粒(1mm大)を含む	良好	口縁部外面にスヌ付着
366	F-3土⑯⑮⑯ F-3疊 E・F-2黒褐色 E・F-2アゼ内 E・F-3黒褐色	直口壺	13.2	—	—	直線的に開き、高く立ち上がる口縁部。偏平な球形になると考えられる体部。体部外面へラミガキ。口縁内面に暗文	外/茶褐色 内/灰褐色	比較的精選される。白色の粒子(長石か)含む	普通	外面、頸内面、赤色塗彩
367	E・F-3土②	小形丸底鉢	13.7	—	—	屈曲のある口縁から、比較的浅めの体部。内外面へラミガキ	淡褐色	1mmの大暗褐色砂粒を多く含む。長石、石英粒若干	良好	

「土」は土器溜りの略

挿図 番号	出土地点	器種	法量 cm			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
368	F-3 土⑪	蓋か	-	12.4	-	大きく開く裾部。全体に厚手。外面ヘラミガキ、内面ナデ	淡黄褐色	1~2mmの砂粒がみられる	普通	
369	F-3 土⑯	底部	-	2.2	-	小形品の底部。平底。内面ヘラケズリのちナデ	赤褐色	1~1.5mmの砂粒含む		
370	F-3 土⑮ D-4 土	鉢	13.5	4.0	11.0	単純口縁。端部をわずかにつまみ上げる。平底。外面ヘラミガキ。内面ケズリのちナデ	外/淡赤褐色 内/黄褐色	細砂粒含むが比較的密	良好	外面スス付着
371	E・F-4 土⑨ F-3 黒褐色土下層	高杯	28.3	-	-	大形の製品。ゆるやかに開き、やや深い杯部	淡褐色	長石、石英、暗灰色砂粒等の微粒を多く含む		
372	F-3 土⑯		-	10.0	-	中実の脚柱部。短い脚裾部	灰色~灰褐色	密、小砂粒を若干含む		杯部内面、脚部外面に赤色顔料塗彩
373	F-2・3 土⑦		21.9	-	-	ゆるやかに開き、やや深い杯部。脚柱内面に脚接合時の刺突痕	灰白褐色	1mm以下の細かい砂粒(白、茶、灰色等)を多く含む		
374	F-3 黒褐色土下層		21.1	-	-	直線的に開く浅い杯部。内外面ハケのちヘラミガキ	淡肌色	1mmまでの砂粒(白色、暗灰色、半透明)を多く含む		一部黒斑
375	F-3 土⑦		27.9	-	-	大形の製品。ゆるやかに開くやや深い杯部	淡褐色	1mm未満の細かい砂粒を多く含む		
376	F-3 土① F-3 線	低脚杯	24.4	-	-	大形の製品。直線的に開く浅い杯部。外面ハケ、内面ヘラミガキ	淡褐色~淡橙褐色	1mmまでの長石、石英粒多		
377	F-2・3 土⑥		17.9	-	-	湾曲して開くやや深い杯部。外面ヘラミガキ。底部に脚接合時のハケメが残る	外/淡赤褐色 ~淡橙灰色 内/淡赤褐色 ~灰褐色	0.5mm大の砂粒を多く含む		外/一部黒斑
378	F-3 土⑩⑪ F-3 黒褐		12.1	5.2	5.2	湾曲して立ち上がるやや深い杯部。比較的高い脚が接合する。外面ハケ、内面ヘラミガキをとどめる	淡灰褐色~黒灰色	石英、長石含		
379	F-3 土⑦⑧	鼓形器台	22.8	19.2	10.6	上・下台間縮約したものの。筒部内面をヘラケズリする	淡赤褐色		普通	
380	F-3 黒褐下層		19.8	-	-	筒部内面は稜に近くなったもの。上台外面に1単位の平行線文	淡灰褐色	石英、長石、金雲母含む	良好	
381	E・F-3 土⑪		18.5	16.0	9.6	やや厚手。上・下台間縮約したもの	淡明褐色	1mm未満の砂粒を多く含む	普通	
382	E・F-3 土⑨		-	14.2	-	下台に3方透し。焼成後、丸い穴をあける	灰褐色	1mm前後の長石、石英及び暗灰色砂粒を多く含む	やや不良	
383	F-3 土⑫		21.5	19.6	18.8	上・下台間縮約したものの。筒部内面は稜線になる	淡黄褐色	石英、長石など大粒の砂粒含むが比較的密	良好	
384	F-2・3 土⑧⑨		20.4	16.7	9.7	上・下台間縮約したもの	黄灰色	石英、長石の細砂粒含むが比較的密		
385	E・F-3 土⑥⑦		18.1	15.7	9.9	下台に2個の穿孔。焼成前に丸い穴をあける	淡褐色	1~2mm大の砂粒多い		

「土」は土器溜りの略

捕図番号	出土地点	器種	法量 cm			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
386	F-3土③ F-3黒褐下層	コシキ形土器	-	-	-	円筒状の体部。下端近くに1対の環状の把手を縦に接合する	肌色～淡橙色	φ1～2mmの石英目立つ	良好	
387	F-3土②		-	14.0	-	386とは別個体。下端口縁部。口縁付け根に1条の突帯	外/淡桃灰色 内/淡灰褐色	1mm未満の白色砂粒、透明砂粒を含む	普通	

C-3・4区土器溜り

388	C-3・4土⑥	甕	17.3	-	27.4	複合口縁。比較的高い口縁部。端部外方に折り曲げ、平坦面をつくる。倒卵形の体部	淡黄灰褐色	石英が目立つ φ1mm以下	普通	
389	C-2黒褐	瓦質土器	-	-	-	把手。円柱状。ヘラケズリにより面取りする	外/黒灰色 断面/白色	細砂粒含むが密	良好	
390	C-3・4土②	甕	19.0	10.4	21.2	複合口縁。端部外方に折り曲げ平坦面をつくる。平底	外/黄褐色～茶褐色 内/黒	比較的密	普通	外面下半スス付着、ただし底部には付着せず
391	C-3黒褐	壺	25.4	-	-	複合口縁。大きく開く口縁。端部外方に折り曲げる	淡灰褐色	1～2mm大の長石、石英粒	良好	
392	C-3黒褐	高杯	-	17.3	-	短い筒部から大きく開く脚裾部にいたる。4方透し	橙灰褐色(一部赤褐色)	1mmまでの長石、石英粒を多く含む		
393	C-3黒褐	鼓形器台	-	16.1	-	下台端部を水平に仕上げる	淡灰褐色	1～2mm大の白色粒を多く含む		
394	C-3・4土①	鉢	12.5	2.1	8.9	半球形の深い体部。短く内湾する口縁部。かすかな平底。外面ヨコナデ。外面底部ヘラケズリ	淡灰褐色 底部黒色	細砂粒多い(長石、石英)	普通	

D-5区土器溜り

395	D-5黒褐下層	壺	19.6	-	-	複合口縁。比較的高い口縁部。端部外方に折り曲げる	明淡褐色	白色小砂粒を含む	やや不良	
396		甕	17.2	-	-	単純口縁。「く」の字に折り曲げる。端部丸くおさめる	橙灰色	1～2mm大の長石、暗灰色及び茶褐色砂粒を多く含む		
397		高杯	23.0	13.4	17.0	直線的に開くやや深い杯部。中実の脚柱から直線的な脚端部。4方透しか	橙色を帯びた淡褐色	1～2mmの砂粒を多く含む	普通	

E F-2区土器溜り

398	E・F-2土③	甕	14.6	-	-	複合口縁。口縁端部でかすかな平坦面をつくる。球形の体部	淡褐色	1mm未満の砂粒を多く含む	良好	胴部下半スス付着
399	E・F-2土⑤	高杯	22.4	-	-	屈曲して開くやや深い杯部。脚柱内面に接合時の刺突痕	淡褐色(一部橙灰褐色)	1mm前後の砂粒を多く含む		
400			-	17.5	-	大きく開く脚裾部。4方透し。内外面に細かいハケメ	淡赤褐色	密1mm前後の砂粒を含む		
401	E・F-2土①	低脚杯	18.2	6.4	5.6	ゆるやかに立ち上がるやや深い杯部。杯、脚端部は平坦に仕上がる	淡褐色	1mm未満の砂粒多		

「土」は土器溜りの略

E F - 4 区土器溜り

捕団番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
402	E・F-4土⑥	甕	17.7	-	-	複合口縁。口縁端は平坦面をつくる。体部外面上半粗いヨコハケ、下半粗いタテハケ	赤褐色	φ1mm前後の石英、長石含むが比較的密	良好	外面スス付着
403			15.1	-	-	複合口縁。うすく引き出したような口縁部。複合部の突出度低い	灰桃色	長石、石英、灰色砂粒をかなり含む	やや不良	
404			17.0	-	-	複合口縁。口縁端をわずかに外方に折り曲げる	淡褐色	密1mmまでの長石、石英、雲母をかなり含む	良好	外面に薄くスス付着
405			14.8	-	-		灰橙色	1mm前後の長石、石英粒をかなり含む	普通	
406			16.8	-	-		淡褐色～黒褐色	長石、石英、雲母の細粒をかなり含む		
407			21.0	-	-		肌色～灰褐色	1mm未満の長石、石英粒を多量に含む		
408	E・F-4土⑧	壺	19.7	-	-	複合口縁。端部を外方に折り曲げ、平坦面をつくる。肩部に波状文	淡褐色～灰褐色	1mmまでの長石、石英粒をかなり含む	良好	
409	E・F-4土⑤	低脚杯	16.7	-	-	ゆるやかに立ち上がり、やや深い杯部。脚に2穴の穿孔	外 / 暗灰褐色 内 / 淡赤灰色 ～肌色	1mmまでの長石、石英粒を多量に含む。 1～2mmの長石粒若干	やや不良	
410	F-4土③	ミニチュア鉢	7.3	4.0	5.5	口縁に手づくね痕。平底	肌色	微砂粒を含む	良好	
411	E・F-4土④	鉢	12.5	4.7	6.3	平底からわずかに内湾して立ち上がる。外面右上がりのタタキ。底部も叩く	淡赤灰色	摩耗した黒色 あざき色の砂粒含む	普通	
412			8.6	8.9	9.0	中空の筒部から上下に短く広がる。内外面粗いハケ。上台内面簾状のハケ	オレンジがかかった灰白色	摩減した砂粒含む		良好

G - 6 区

413	G-6 黒褐	壺	13.9	5.3	31.1	単純口縁。平底。肩部にヘラ描きの文様。口縁・体部外面上半ハケ。体部外面下半ヘラミガキ。体部内面上半ヘラケズリのちナデ。下半ハケ。粘土輪積み痕残る	黄褐色～淡橙色	φ2～3mm、茶、黒色の摩耗した円錐目立つか密	良好 肩部、底部に一对の黒斑	外面、口縁内面赤色顔料塗布か
-----	--------	---	------	-----	------	--	---------	-------------------------	-------------------	----------------

H - 2・3 区土器溜り

414	H-2・3土	甕	15.5	-	-	上方にくり上げた口縁 外面に3～4条の凹線。 口縁は内傾する	淡褐色	1mm大の白色 及び透明な砂粒を含む	良好	
415	H-3土		17.1	-	-		灰褐色	1mm未満の小砂粒(白色)を含む		

「土」は土器溜りの略

插図 番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
416	H-2・3土	甕	15.9	-	-	くり上げた口縁に3条の凹線。肩部にヘラ状工具による2段の刺突	肌色	半透明の小砂粒を含む	良好	
417		壺	12.2	-	-	口縁に4条の凹線。口縁2穴の穿孔	淡橙褐色	1mm前後の砂粒(白,透明,半透明)を含む		口縁部内外面に赤色塗彩
418		甕	12.6	-	-	外方に折り曲げた単純口縁。端部に平坦面をつくる	外/黒褐色 内/淡橙灰色	1mm大の砂粒を含む		
419			15.1	-	-	長くくり上げた口縁外面に6条の擬凹線。口縁内面へラミガキ	外/黒褐色 内/淡褐色~褐色	白色及び透明な小砂粒(1mm大)を含む		スス付着
420	H-3下層		21.1	-	-	長くくり上げた口縁外面に貝殻腹縁による平行線文。肩部にも同原体による波状文	明肌色	1mm未満の砂粒(灰色,透明茶色,白色)を多く含む		
421	H-2・3土⑯		19.0	-	-	口縁外面に擬凹線。体部に焼成後の穿孔	淡茶褐色~暗褐色	1mm大の白色砂粒を含む		
422	H-2・3土⑰		25.7	-	-	口縁に貝殻による平行沈線。上半はナデて消す	淡肌色	白色,肌色の小砂粒を含む		
423	H-2・3排水路 黒色土		22.4	-	-	口縁に擬凹線。肩部に刺突による列点文	淡褐色~橙褐色	1mm大の砂粒を含む(半透明,明白,金色)	良好	スス付着
424	H-2土		22.4	-	-	口縁に貝殻による平行沈線。口縁内面丁寧なへラミガキ	淡褐色~灰褐色	1mm大の白色砂粒を含む		
425		壺	13.1	-	-	くり上げた口縁外面に6条の擬凹線。頸部外面タテハケののち,へラ描きの擬凹線	外/灰褐色 内/暗灰褐色	1mm大の砂粒(白色,茶褐色,暗灰色,光沢のある黒色等)を多く含む		
426	H-3土		14.9	-	-	単純口縁。口縁端に2個1対の円形浮文	乳褐色(ススによって大部分は黒褐色)	1~2mm大の半透明砂粒を含む	良好	スス付着
427	H-6サブトレ		15.0	-	-	口縁に貝殻による平行沈線のちナデ	淡褐色	白色砂粒を含む		
428	H-2・3排水路 黒色土		19.2	-	-	口縁外面に3条の凹線。筒状の頸部内面にはシリメ	肌色	白色及び半透明の小砂粒を含む		
429	H-2・3土⑲		32.5	-	-	口縁外面に2条の凹線。口縁内に5条、頸部下半に4条のへラ描沈線。肩部にクシ状工具による列点	淡肌色 断面三層	白色小砂粒を多く含む		
430	H-3下層	底部	-	7.7	-	平底。外面ハケ、内面へラケズリののちナデ	外/乳灰色 (一部淡橙色) 内/灰褐色	1mm大の砂粒(白色,半透明等)を多く含む		
431	H-2・3土		-	8.4	-	平底。外面へラミガキ、内面へラケズリ	乳褐色 底部一黒	1~2mm大の砂粒を多く含む		
432	H-2土		-	4.2	-	上げ底気味の平底。内面へラケズリ	外/淡赤褐色 内/淡褐色	1mm前後の砂粒(半透明,白色)を多く含む		
433	H-3下層		-	8.6	-	平底。外面ハケ、内面へラケズリ	外/暗褐色 内/灰褐色	1mm未満の白色及び透明砂粒を多く含む		

「土」は土器溜りの略

捕団番号	出土地点	器種	法量 cm			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
434	H-3下層	底部	-	7.7	-	上げ底気味の平底。内面ヘラケズリ	橙褐色～暗褐色	1mm大の砂粒(白色,透明)を多く含む	良好	スス付着
435	H-2・3土	高杯か	-	20.2	-	直線的な脚裾部。端部で平坦面をつくる。内外面ハケのちへラミガキ	肌色	密,白色小細粒を含む		
436		鼓形器台	15.7	-	-	上台外面に貝殻腹縁による平行沈線。内外面丁寧なヘラミガキ	淡灰褐色～暗灰褐色	密,1mm未満の砂粒(白色)を若干含む		
437			-	30.2	-	下台部外面に貝殻による平行沈線。外面へラミガキ, 内面ナデ	淡灰褐色	1mm大の砂粒(白色,半透明)を多く含む		

H-5区土器溜り

438	H-5土	壺	17.0	-	-	複合口縁。薄く引き出したような比較的高い口縁部。端部は丸くおさめるものが多い	淡灰色	0.5～1mmの石英を含む砂質	不良	口縁外面の一部 スス付着
439			20.1	-	-		淡褐色	密	良好	
440	H-5土⑩		19.3	-	-		淡灰色,一部 淡灰褐色	やや密,金雲母含む	やや良 一部不良	
441	H-5土		16.6	-	-		淡褐色	粗1～2mmの長石,石英他の砂粒を多量に含む	やや不良	
442			-	-	-		淡灰褐色	密,1.5mm程度他石英比較的多	不良	
443	H-5土⑧		15.4	-	-			やや密	普通	
444	H-5土		17.2	-	-		外/淡褐色～暗灰色 内/淡褐色～暗赤褐色	1mmまでの長石,石英粒を多量に含む	やや不良	スス付着
445	H-5土⑪		16.7	-	-		灰褐色	長石目立つ,石英少量	普通	
446			16.5	-	-		淡褐色～淡灰褐色	長石,石英の細砂粒を多量に含む	一部不良	
447	H-5土		31.8	-	-	複合口縁。薄く引き出した比較的高い口縁部。端部に平坦面	黒灰色～淡褐色	やや粗φ1mm以下の石英目立つ	良好	
448			24.6	-	-	複合口縁。薄く引き出した比較的高い口縁部	淡灰褐色	やや粗3mmの砂粒あり	やや不良 (一部不良)	
449		壺	17.5	-	-	複合口縁。薄く引き出した比較的高い口縁部	外/赤味を帯びた暗茶褐色 内/茶灰色～淡褐色	1mmまでの長石,石英を多量に含む	やや不良 ～不良	やや不良
450			19.6	-	-	複合口縁。直立する短い口縁。全体に厚手	内面共淡褐色 断面黒灰色をはさんだサンド状	1mm前後の長石,石英粒を多量に含む		
451	H-5土 H-5土⑥⑩ G・H-5疊		19.9	-	-	複合口縁。直立に近い薄く引き出したような口縁部。肩部で張る	外/淡橙灰白色 内/灰白色	石英,長石の砂粒多い。砂質		

「土」は土器溜りの略

捕団番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
452	H-5土⑦	鼓形器台	28.7	-	-	外面ヨコナデ、内面ヘラミガキ	暗褐色	φ1mm未満の石英、長石含むが密	良好	普通
453	H-5土⑨⑪		-	16.6	-	外面ヨコナデ、内面ヘラケズリ	淡灰白色	1mmまでの長石、石英粒		
454	H-5土	高杯	-	13.9	-	長い筒状の脚部	淡褐色	長石、石英		
455	H-5土④⑤⑧	甕	16.7	-	-	単純口縁。体部外面粗いハケ。粘土接合痕がみえる	外/淡褐色 内/灰褐色	長石、石英多		スス付着
456	H-5土⑤		16.7	-	-	単純口縁。口縁端を軽くつまみ上げる。体部外面右上がりのタタキ。内面ハケののちナデ	外/橙赤褐色 内/暗橙褐色～橙赤褐色	2mmまでの白色、暗灰色の砂粒をかなり含む		
457			15.7	-	-	単純口縁。口縁端を軽くつまみ上げる。体部外面右上がりのタタキののち粗いハケ。内面ナデ	外/橙褐色 内/橙色～暗赤褐色	1mm以下の長石、1～2mmの灰色砂粒、1～2mmの黒灰色砂粒を大量に含む		
458	H-5土⑨		15.5	-	-	単純口縁。体部外面右上がりのやや細かいタタキ。内面ナデ	外/淡橙色 内/淡灰色	φ1～2mmの大粒の砂粒多く含むが密	良好	口縁外面にスス付着
459			14.4	-	-	単純口縁。体部外面右上がりの粗いタタキ。内面粗いハケ	淡褐色	1mm以下の長石、茶褐色砂粒を含む		
460	H-5土 H-5土⑧		14.6	-	-	単純口縁。体部外面右上がりのタタキ。内面ハケののちナデ	外/淡橙色 内/淡橙灰色	長石(1～2mm)目立つ、石英		スス付着
461	H-5土③⑤⑥ G・H-5疊		13.9	-	-	単純口縁。口縁端軽くつまみ上げる。体部外面右上がりのタタキののち、粗いハケ。内面ヘラケズリののちハケ	淡黄灰色	大粒の砂粒含む、赤褐色の粒子(φ1～2mm)のもの目立つ	普通	外面スス付着
462	H-5土①⑥		14.8	-	-	単純口縁。口縁端軽くつまみ上げる。体部外面右上がりの粗いタタキ。内面丁寧になでるが、ハケ原体あと見える		細砂粒含む		
463	H-5土⑦		16.1	-	-	単純口縁。口縁端軽くつまみ上げる。体部内外面ハケ	淡赤褐色～橙色	長石、石英、茶褐色の砂粒をかなり含む	不良～やや不良	
464	H-5土⑤		14.9	-	-	単純口縁。口縁は大きく外反する。体部外面右上がりのタタキののち、粗いハケ。内面粗いハケ	外/黒色 内/黄味がかった灰白色	長石砂粒含む、茶色の砂粒含む	良好	外面スス付着
465	H-5土⑧		19.2	-	-	単純口縁。短く開く口縁部。体部外面左上がりのタタキののち粗いハケ、内面ヘラケズリ	淡黄褐色	φ1～2mmの摩耗した砂粒含む、茶色の円疊多い	普通	外面スス付着
466	H-5土		28.6	-	-	単純口縁。口唇端に3条の沈線。外面タタキののちハケ、内面ハケ	淡橙褐色	密、大粒の砂粒含む		
467	H-5土⑥		14.9	-	-	単純口縁。体部外面右上がりのタタキののちハケ、内面ハケ	外/淡褐色～黒褐色 内/淡褐色	密、長石粒及び褐色砂粒少量	良好	スス付着

「土」は土器溜りの略

挿図番号	出土地点	器種	法量 cm			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
468	H-5 土	甕	13.4	—	—	単純口縁。体部外面右上がりのタタキのち細かいハケ、内面ケズリのちハケ	外 / 赤褐色 内 / 淡橙色	φ 1mm前後の砂粒含む、砂質	やや不良	スス付着
469			15.1	—	—	単純口縁。体部外面右上がりのタタキ、内面ハケ	外 / 橙褐色 内 / 橙褐色～茶褐色	1～4mmの砂粒をかなり含む	普通	
470	H-5 土⑤		13.3	—	—	単純口縁。口縁端軽くつまみ上げる。体部内面へラケズリ	淡褐色	長石、石英を含む	良好	口縁部の外面と内面の一部にスス付着
471			—	—	—	体部外面粗いハケ、内面粗いハケのちナデ	橙褐色～暗灰褐色	1mm前後の長石、石英粒	普通	
472	H-5 土④		—	—	—	体部外面水平の粗いタタキ。下半はタタキ痕をなでて消す。内面粗いハケ	外 / 淡褐色～黒褐色 内 / 淡褐色	密、長石、石英 茶褐色の砂粒若干	良好	スス付着
473	H-5 土		17.9	—	—	単純口縁。口縁端丸くおさめる。口縁内面ハケ	肌色	茶褐色及び暗灰色の砂粒をかなり含む	普通	一部スス付着
474			16.3	—	—		淡肌色	1～3mmの茶褐色及び灰色砂粒を多量に含む		
475	H-5 土⑥⑦		14.5	—	—	単純口縁。口縁端に平坦面をつくる。体部外面右上がりのタタキのち粗いハケ、内面ハケ	外 / 淡褐色～黒色 内 / 淡褐色	1～2mmの長石粒及び茶褐色砂粒を若干含む		スス付着
476	H-5 土		15.4	—	—	単純口縁。口縁大きく外反する。体部外面右上がりのタタキ、内面粗いハケ	外 / 黒褐色 内 / 淡褐色	密、1～2mmの茶褐色砂粒を若干含む	良好	
477	H-5 土⑥		—	—	—	体部外面右上がりのタタキのちハケ。内面ハケ	外 / 淡褐色～黒褐色 内 / 淡褐色	1mm前後の茶褐色砂粒を含む		
478	H-5 土⑦		—	—	—	体部内外面粗いハケ	外 / 淡褐色 内 / 淡灰白色	長石及び茶褐色砂粒をかなり含む		
479	H-5 土⑧		—	—	—	体部外面へらでなでるか。内面へラケズリ	淡褐色 体部下半黒褐色	長石、石英を含む		スス付着
480	H-5 土⑥		13.6	—	—	単純口縁。体部外面右上がりのタタキ、下半へラケズリ。内面ナデ	灰褐色	石英多い。やや砂質		
481	H-5 土		10.6	—	—	単純口縁。体部外面右上がりのタタキのちハケ、内面ハケ	橙色	1mm前後の白色、茶褐色砂粒	普通	口縁～肩の一部にスス付着
482	H-5 土⑧		—	—	—	単純口縁。体部外面右上がりのタタキのち細かいハケ。内面ナデ	淡橙色 一部濃橙色	1～2mmの砂粒を含む(若干)やや粗い	やや不良	
483	H-5 土⑥		12.1	—	—	複合口縁。わずかな屈曲で短く立ち上がる口縁。体部内外面ハケのちナデ	外 / 淡褐色～黒褐色 内 / 淡褐色	1mm前後の茶褐色砂粒。長石、石英粒をかなり含む	良好	スス付着
484			9.8	—	—	単純口縁。体部外面右上がりのタタキ、内面ハケ	濃橙色と灰橙色	長石粒を含む	一部不良	
485	H-5 土		10.8	—	—	単純口縁。口縁・体部外面にタタキ痕。体部外面タタキのちハケ、内面ハケのちナデ	外 / 淡茶褐色～黒色 内 / 淡茶褐色	密、1～2mmの白色、黒褐色砂粒を少量含む	良好	スス付着

「土」は土器溜りの略

番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
486	H-5 土⑩	甕	12.2	-	-	単純口縁。体部外面へラミガキ	淡褐色	密, 長石若干含む	良好	
487	H-5 土⑪	小壺	8.8	-	-	球形の体部からゆるやかなカーブで口縁部にいたる。内外面ナデ	淡褐色～暗灰褐色	3mmまでの茶褐色及び暗灰色の砂粒を含む	普通	
488	H-5 土⑦	甕	-	-	-	体部外面右上がりのタタキ。部分的にハケ。内面ナデ	淡灰褐色	1mm前後の灰褐色～褐色砂粒をかなり含む	良好	スス付着
489	H-5 土		-	-	-	体部外面右上がりの粗いタタキ、内面ケズリのちナデ		φ1mm前後の砂粒含む		
490	H-5 土⑥		-	-	-	外面下半ヘラケズリ、内面ナデ、部分的にハケ	淡褐色	やや粗、茶褐色砂粒		
491	H-5 土		底部	-	4.0	平底。外面右上がりのタタキ。内面粗いハケ		やや粗、石英含む、砂質	普通	
492				-	5.4	平底。外面ナデ、内面ハケ	外 / 灰褐色～黒褐色 内 / 灰褐色	2mmまでの暗灰色、茶色、白色砂粒を多量に含む	スス付着	
493				-	3.6	平底。外面底部付近タタキ、以上ハケ。内面指頭圧痕、ハケ	外 / 灰橙色 内 / 茶褐色～黒褐色	茶褐色、黒褐色の砂粒(1～2mm)を多量に含む	良好	
494	H-5 土①			-	4.8	平底。外面タタキのちタテハケ。内面ハケ	外 / 淡赤褐色～黒褐色 内 / 暗褐色	密		
495	H-5 土⑥			-	3.9	平底。外面ヘラケズリ。内面ナデ。底部中央に挿入された粘土塊が断面に見える	淡灰褐色	φ1～2mmの小石(摩耗した物) φ1mm前後の長石		外面スス付着
496	H-5 土	鉢	9.6	-	-	端部を折り曲げただけの短い口縁。球形の体部。外面下半にハケ	淡灰色	長石粒及び茶褐色の砂粒(1～2mm)を含む	普通	
497			-	-	-	端部を折り曲げただけの短い口縁。半球形の体部。上げ底の底部。内外面ナデ	外 / 淡赤灰色～淡褐色 内 / 赤灰色～淡赤灰色	3mmまでの長石粒及び暗灰色砂粒をかなり含む	やや不良	
498	H-5 土⑨	底部	-	3.3	-	不安定な平底。内外面ナデ	外 / 灰黄色～暗灰色 内 / 灰黄色断 / 暗灰色	密、長石、細砂若干、石英少量	普通	
499	H-5 土⑩	壺か	10.0	-	-	直線的に立ち上がる口縁部。内外面ヘラミガキ	乳褐色	φ1mm程度の長石、石英、あざき色の摩耗した粒子含む	良好	
500	H-5 土⑥	高杯か	-	8.9	-	小ぶりな脚端部。円孔の透し。外面ヘラミガキ、内面ナデ	淡褐色	密		

D-4 区上層

501	D-4 灰褐粘土	甕	14.5	-	-	複合口縁。比較的短い口縁部。端部を外方に折り曲げる。倒卵形の体部	外 / 淡褐色 内 / 暗灰褐色	細かい長石、石英粒をたくさん含む	良好	外 / 一面にスス付着
502			16.2	-	-	複合口縁。比較的高い口縁部。端部直下をなでてアクセントをつける	淡肌灰色	1～3mmの砂粒をたくさん含む		体部下半にスス付着

「土」は土器溜りの略

捕図 番号	出土地点	器種	法量 cm			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
503	D-4 磨灰色粘土	甕	22.5	-	-	複合口縁。口縁端を外方に折り曲げて平坦面をつくる	肌灰色	細かい砂粒(白,灰色,茶色)をたくさん含む	やや不良	外面の一部にスス付着
504			17.2	-	-		外 / 淡灰褐色 内 / 淡橙色	密, 細かい長石粒若干含む	良好	
505			14.7	-	-		外 / 淡褐色 内 / 肌色	細かい長石, 石英, 暗灰色砂粒をたくさん含む		
506			17.8	-	-	複合口縁。口縁端を外方に折り曲げる	灰褐色	細かい長石, 石英粒をたくさん含む	普通	
507			16.4	-	-		桃灰褐色	1~2mmの長石, 石英	不良	外面の一部黒色(スス?)
508			14.4	-	-		淡桃褐色	1mm前後の砂粒を多く含む		
509	D-4 磨灰色粘		16.0	-	-	複合口縁。口縁端を外方に折り曲げる。体部外面ハケ, 内面ヘラケズリ	淡褐色	1mmまでの長石, 石英粒をかなり含む	良好	口縁の一部と体部下半にスス付着
510			15.2	-	-		淡灰褐色	細かい砂粒をたくさん含む		
511			15.6	-	-		肌灰色	密, 1~2mmの砂粒をかなり含む		
512	D-4 灰褐色粘		14.7	-	-	単純口縁。口縁端部はわずかに内側に肥厚する	灰褐色	白色, 小砂粒を多く含む		
513			22.5	-	-	複合口縁。高い口縁部は端部を外方に折り曲げ, その上面に平坦面をつくる。頸部にハケ原体による羽状文	淡橙褐色	細かい長石, 石英及び黒灰色砂粒をたくさん含む		
514			19.0	-	-		淡灰褐色			
515	C-4 磨灰色粘 D-3 黒褐色粘 D-4 磨灰色粘	直口壺	10.6	-	15.4	タガ状の複合口縁部から直立に近く立ち上がる口縁。偏平な体部	乳白色	ø 1mm前後の石英, 長石	普通	
516			10.5	-	-		淡褐色	細かい長石, 石英粒をたくさん含む		
517			22.0	-	-	縮約化が進んだ製品。上台端は水平にのびる	茶灰色	1mmまでの長石, 石英, 暗灰色砂粒をかなり含む		
518	D-4 磨灰色粘 D-3 黒褐色粘 D-4 磨灰色粘	鼓形器台	23.3	20.9	11.7	縮約化が進んだ製品。筒部内面は稜線となる	黄橙褐色(内面暗褐~黒褐部分多し)	1mm前後の長石, 石英粒を多く含む		
519			-	-	-	筒部~下台部片。外面ヨコナデ, 内面ヘラケズリ	淡褐色	1~2mmの砂粒を含む		
520			14.0	6.7	4.5	杯部。脚接合痕を削り取っており, 杯として再利用したものか。内外面ナデ	淡黄褐色	ø 1mm未満の石英多数		

捕図番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
521	D-4灰褐色粘	高 杯	18.2	—	—	ゆるやかに開く杯。端部を外方に折り曲げる	肌灰色	1mm以下の長石、石英粒、暗灰色、茶褐色の砂粒をかなり含む	良 好	
522			—	—	—	小ぶりでやや深い杯部。内外面ともヘラミガキ痕をかすかにとどめる	外 / 淡褐色 内 / 暗灰褐色	1mmまでの長石、石英、雲母を含む	やや不良	
523	C-3黒褐		—	17.4	—	低い脚。裾部は大きく広がる。4方透し	赤みがかったオレンジ	微砂粒多い、石英、長石	良 好	
524	—		—	—	ゆるやかに広がる脚部。外面へラミガキ。内面へラケズリ、ハケ	灰橙褐色	1~2mmの茶褐色、暗灰色砂粒をたくさん含む			
525	低脚杯	—	7.8	—	外方に大きく広がる脚。内外面ヨコナデ	淡褐色	1mmまでの長石、石英、暗灰色砂粒を含む			

その他の地点

526	E-2礫	壺	34.5	—	—	大きく広がる口縁。端面に3条の凹線。口縁内に4条の沈線	外 / 暗褐色 内 / 褐色	細かい長石、石英、雲母を含む	良 好		
527	E-2ピット		24.7	—	—	大きく広がる口縁。上方にくり上げ、端面に3条の凹線	桃灰色	1mm前後の砂粒を多く含む			
528	E・F-2 黒褐色土	高 杯 か	—	12.8	—	脚端面に3条の凹線。全体に厚手	外 / 乳褐色 内 / 黒色	1~2mmの砂粒含む	やや不良		
529	E-3礫		12.7	—	—	単純口縁。短い口縁。体部外面ハケ、内面へラケズリののちナデ	外 / 淡赤褐色 内 / 淡褐色	密	良 好	外 / 口縁外面にスス	
530			16.5	—	—	単純口縁。口縁端に平坦面をつくる。体部外面、口縁内面ハケののちナデ。体部内部へラケズリ	淡褐色	密、1mm以下の長石、石英、暗茶色砂粒を含む			
531	E-2ベルト内	底 部	—	4.5	—	不安定な平底。外面ナデ、内面指頭圧痕ののちナデ	褐色	密、小砂粒少量			
532	E-3礫	高 杯	17.5	—	—	水平な底部から立ち上がり、やや深い杯部	淡茶褐色	精選されている			
533			—	11.3	—	脚柱部から屈曲して開く裾部。杯底部の穴に挿入して接合	淡橙褐色、脚端の一部黒色	密、1mm大の砂粒少量			
534	E-2ベルト内	脚付 梵	9.8	—	—	小ぶりで深い杯部。杯部内外面へラミガキ	淡橙色	密、1mm大の白色砂粒を若干含む		赤色顔料塗布か	
535	E-3礫	脚付 壺 か	—	5.5	—	低い手づくねの脚が付く。体部内面へラケズリ	茶色	密			
536	F-3礫	壺	14.8	—	—	単純口縁。口唇端をわずかに内側につまみ上げる。球形の体部	淡灰褐色	長石の砂粒含む	普 通		
537			28.1	—	—	複合口縁。大形品。垂直に立ち上がる口縁は上端部に平坦面をつくる	淡黄褐色	0.5mm前後の砂粒多い。1mmくらいのものもみられる	良 好		

插図番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
538	F-3 SX02東	土製紡錘車	1.8	4.0	2.2	中心孔径 0.8 cm。端部に1対の斜めの穿孔。その他にも1個の小孔がある。底面内凹みになる	淡橙灰色 底面 / 灰色	白色, 暗灰色, 茶褐色の小砂粒を含む	良好	残存重量 28 g
539	E・F-4 礫灰色粘	小壺	8.2	-	8.7	小ぶりな体部から短く立ち上がる口縁部。厚手	淡褐色	1mm前後の長石, 石英粒を多く含む		口縁外面の一部と体部。最大径より下は黒褐色ススによるものか
540	F-3 矶	高杯	-	10.2	-	ラッパ状に開く脚部。内面シボリメ。粘土紐の積上げがみえる	淡明褐色	1mm前後の砂粒多い	普通	
541		椀か	7.6	-	-	小ぶりで深い杯部。口縁部は内湾して立ち上がる。外面ヘラミガキ、内面ハケののちヘラミガキ	外 / 暗灰褐色 内 / 灰褐色	密, 微砂粒を含む	良好	
542	F-4 矶灰色粘	ふいご羽口	-	-	-	孔径 1.2 ~ 3.0 cm。二次的な焼成を受け、色調が3段階に変化している	淡褐色~暗灰褐色~暗赤灰色	白色小砂粒を含む		
543	A-4 土⑤	高杯	16.0	-	-	杯底部から稜をもつ屈曲を経て開く。端部を外面に折り曲げる。内外面ハケののちナデ。内外面に暗文	淡褐色(肌色)	微砂粒精選された胎土		
544	B-3 黒褐		21.3	-	-		暗黄褐色	非常に精製されている。石英含む、微砂粒含む		
545	B-5 矶灰色粘	小形丸底壺	6.0	-	7.2	偏平な体部から短い口縁部にいたる	茶橙色	1mm未満の長石粒を含む		内面に茶褐色の付着物。塗か
546	B-4 土④	壺	22.3	-	-	複合口縁。高い口縁部は端部を外に折り曲げる。頸部から肩部にかけて3段のハケ原体による刺突	黄褐色	φ1mm前後の石英、やや目立つ		
547	B-4 土⑥	甕	8.8	2.2	11.7	単純口縁。かすかな平底から細長い体部。体部外面肩部、下段は右上がりのタタキ。中段は左上がりのタタキ。内面ナデ。粘土紐積上げが見える	黄褐色 下半赤褐色	φ3~4mmの砂粒含むが比較的よくしまる。赤褐色の粒子含む		下半ス付着
548	H-2・3 排水路 黑色土		13.5	-	-	偏平な体部。上方にくり上げた口縁には4条の沈線。体部外面ハケ、内面ヘラケズリ	灰白褐色	密1mm未満の砂粒(白、半透明、灰色)を含む		スス付着
549	西壁排水路		15.2	-	-	単純口縁。口縁端部を上方にわずかに引き上げる。体部内外面ハケ	赤褐色~暗褐色	1~3mm大の砂粒(白、暗灰色、茶褐色)を多く含む。5mm~1cmに及ぶ砂粒も含む	やや軟質 (摩滅がすんでいる)	
550	東壁排水路		13.4	-	-	複合口縁。口縁は短く直立する。肩部に波状文	乳灰色~淡赤灰色	1mm未満の砂粒を多く含む	良好	外面にスス付着
551		杯か	16.3	-	-	丸い杯部。端部は外に折り曲げる。外面ハケ、内面ケズリののちナデか。薄手	橙灰色	1mm未満の砂粒(白色、透明等)を多く含む		

「土」は土器溜りの略

捕団 番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
552	北壁沿	鉢	12.4	—	5.6	丸味をもった体部。端部丸くおさめる。内面底部ユビナデ	淡黄褐色～淡橙褐色	1～2mm大の砂粒を多く含む(茶褐色,暗灰色,白色等)	やや軟質	
553	東壁排水路	低脚杯か	—	—	—	小ぶりな深い杯部。内外面ナデ	灰褐色～褐色	密,微砂粒を含む	良好	内外面赤色顔料を塗布するか
554	北壁排水路	蓋か	4.0	7.7	11.8	ラッパ状の蓋本体に円筒状の把手がつく。外面ナデ,蓋内面ヘラケズリ。貫通孔(径0.8cm)あり	淡灰褐色,一部暗灰褐色	1mm前後の茶褐色,灰褐色砂粒を多く含む		

2 区

555	G 1 黒褐	甕	17.8	—	—	複合口縁。比較的高い口縁。端部は丸くおさめる	暗紫褐色	白色微砂粒を含む	やや不良		
556			19.0	—	—	単純口縁。端部をわずかに内側に肥厚させる。厚手	淡茶褐色	1mm未満の白色暗灰色砂粒を多く含む	良好		
557			17.4	—	—	単純口縁。端部で平坦面をつくる		白色小砂粒を含む			
558		壺	16.2	—	—	単純口縁。薄く、高く立ち上がる口縁。外面ヘラミガキ、内面ナデ	外/淡褐色 内/灰褐色	1mm未満の砂粒(白,茶,灰)を含む			
559		鼓形器台	—	—	—	上台～筒部片。比較的長い筒部をもつもの。上台上半に貝殻腹縁による平行線文。内面ヘラミガキ	灰褐色	1mm大の砂粒(白,半透明)を若干含む			
560	G 2 黒褐	甕	15.6	—	—	複合口縁。口縁端部は丸くおさめる。肩部にクシ状工具による波状文	明褐色	1mm未満の白色及び透明砂粒を含む	一部軟質		
561		高脚杯か	—	—	—	平らな杯底部から外反して立ち上がる体部。外面にはクシ描きの平行沈線。杯内面ヘラミガキ	淡茶褐色	白色,透明,黒色(光沢あり)の砂粒を含む	やや軟質		
562	G 2・G 3 中間	小形丸底壺	8.8	—	8.1	球形に近い体部に比較的短い口縁部が接合する。外面ナデ、一部ハケ。体部内面ヘラケズリ	外/淡肌色 内/淡肌色～黒灰色	密,1mm未満の砂粒を含む	普通		

図 版

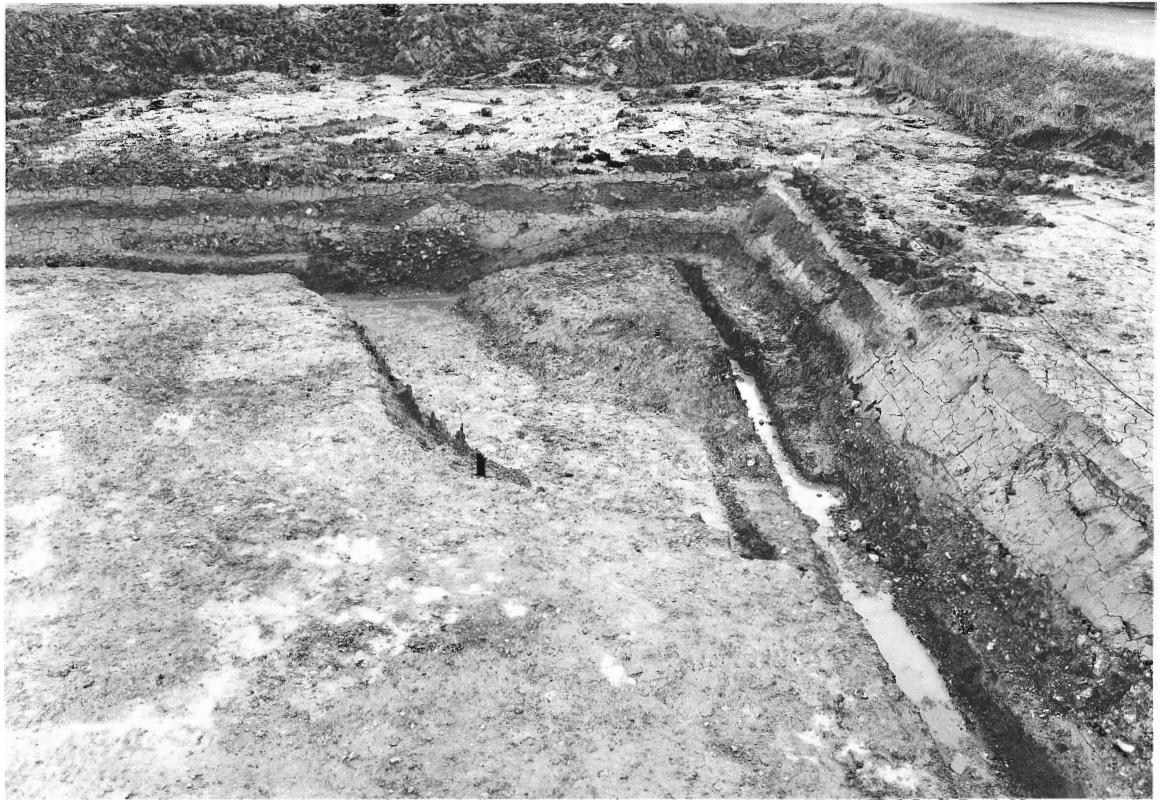


遺跡周辺の航空写真（白丸が南講武草田遺跡）



南講武草田遺跡 1区全景（南西から）

図版 2



SD 01 上層水路（南西から）



SD 01 下層水路（南西から）

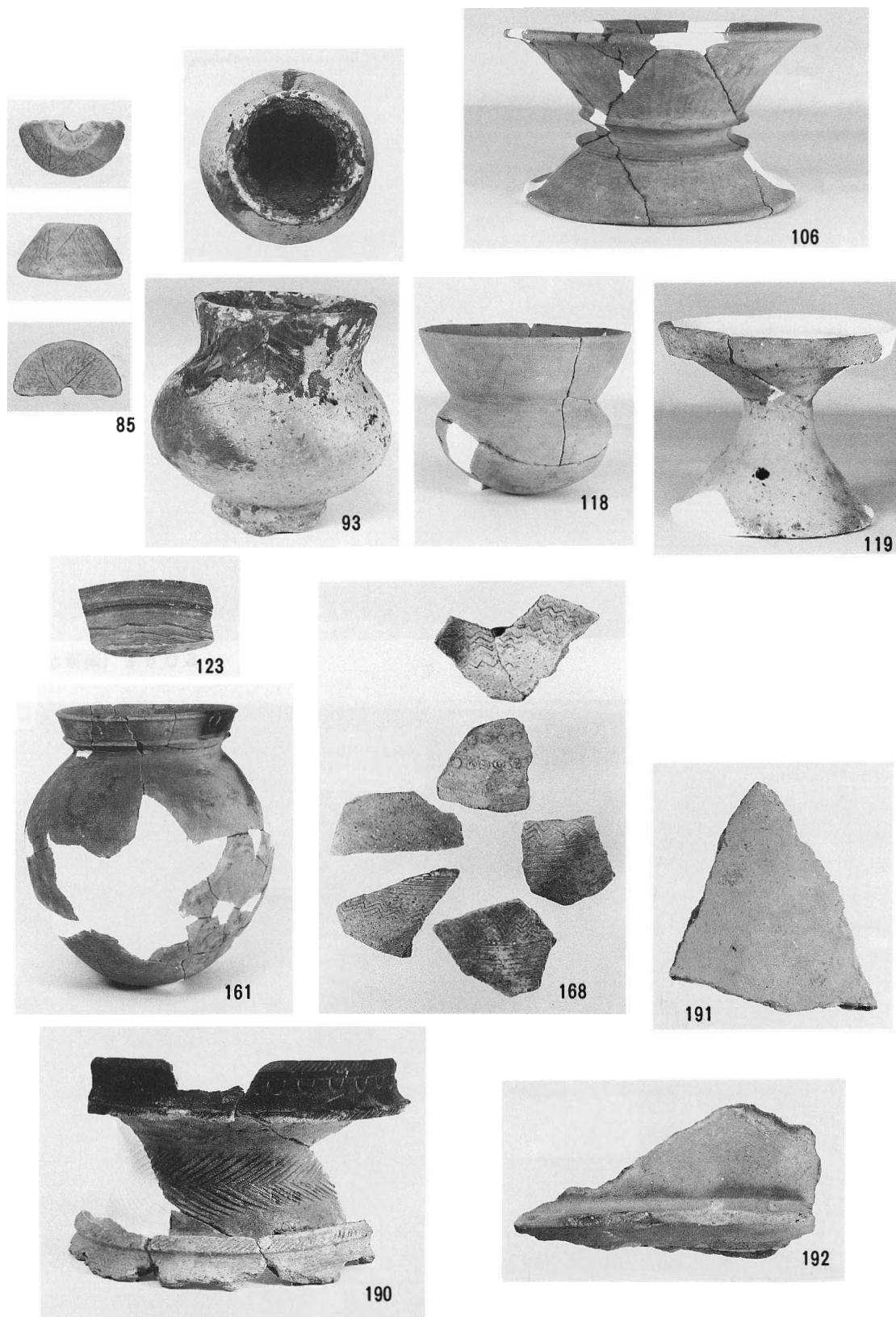


S D 0 2 (南東から)



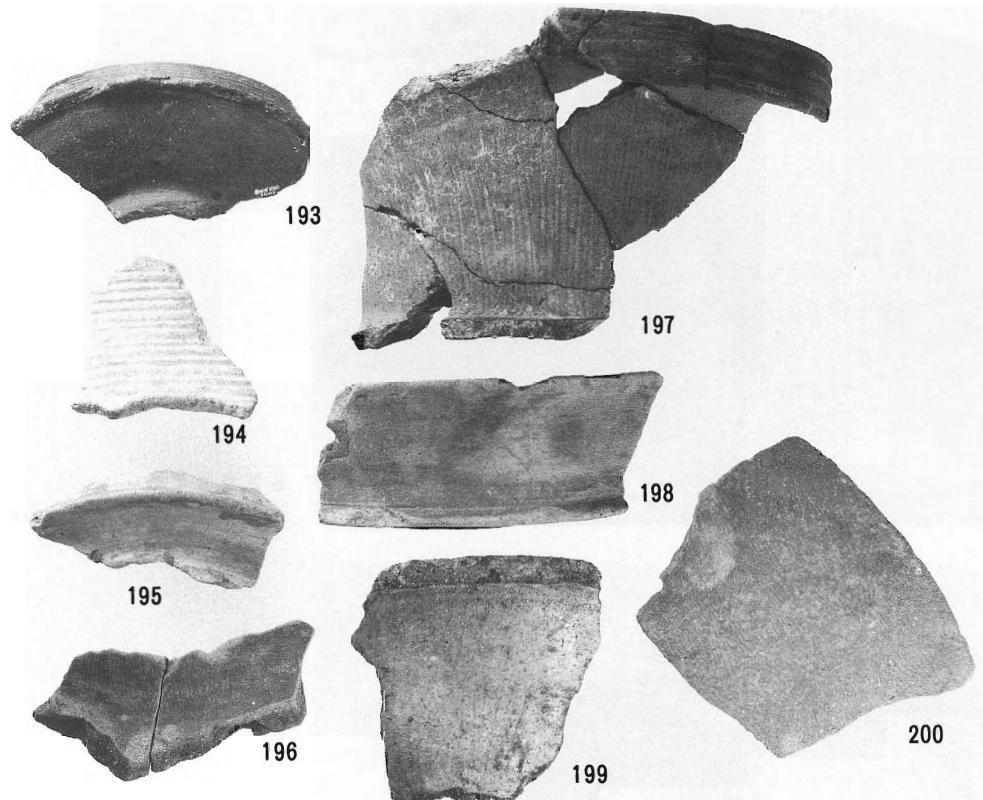
S D 0 3 (北西から)

図版 4



SD 01~03 出土遺物

図版 5

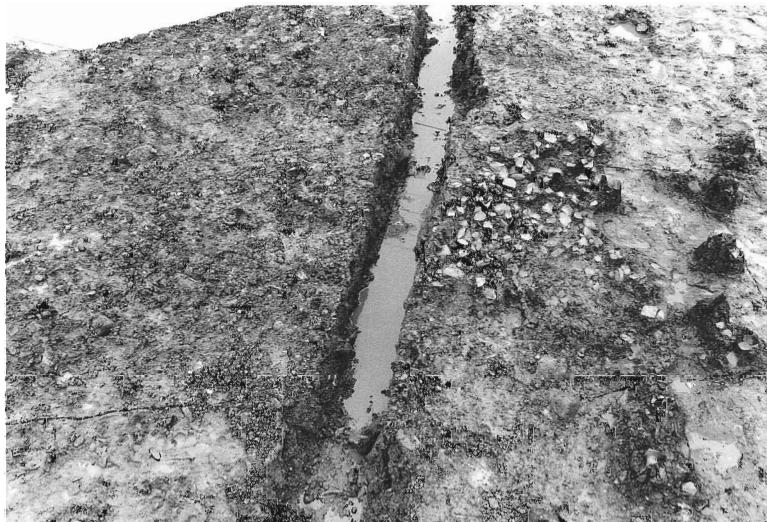


吉備系遺物



S X 01・03 (北西から)

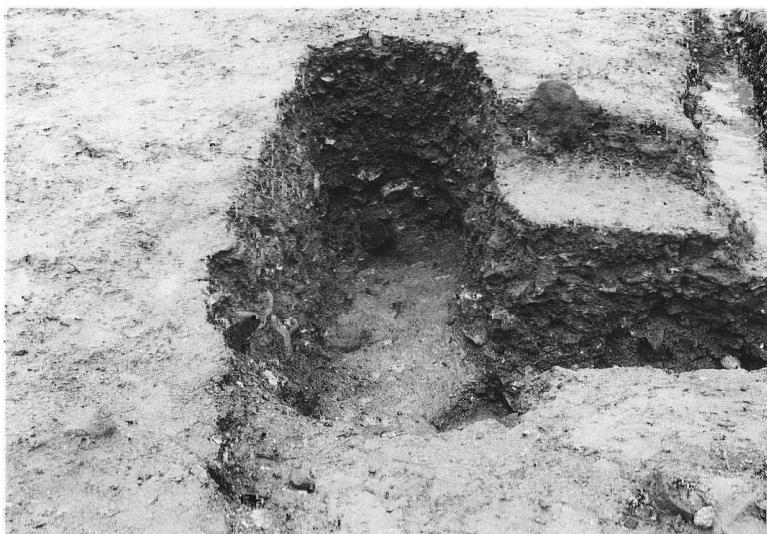
図版 6



S X 0 3 上面
遺物出土状態（北西から）



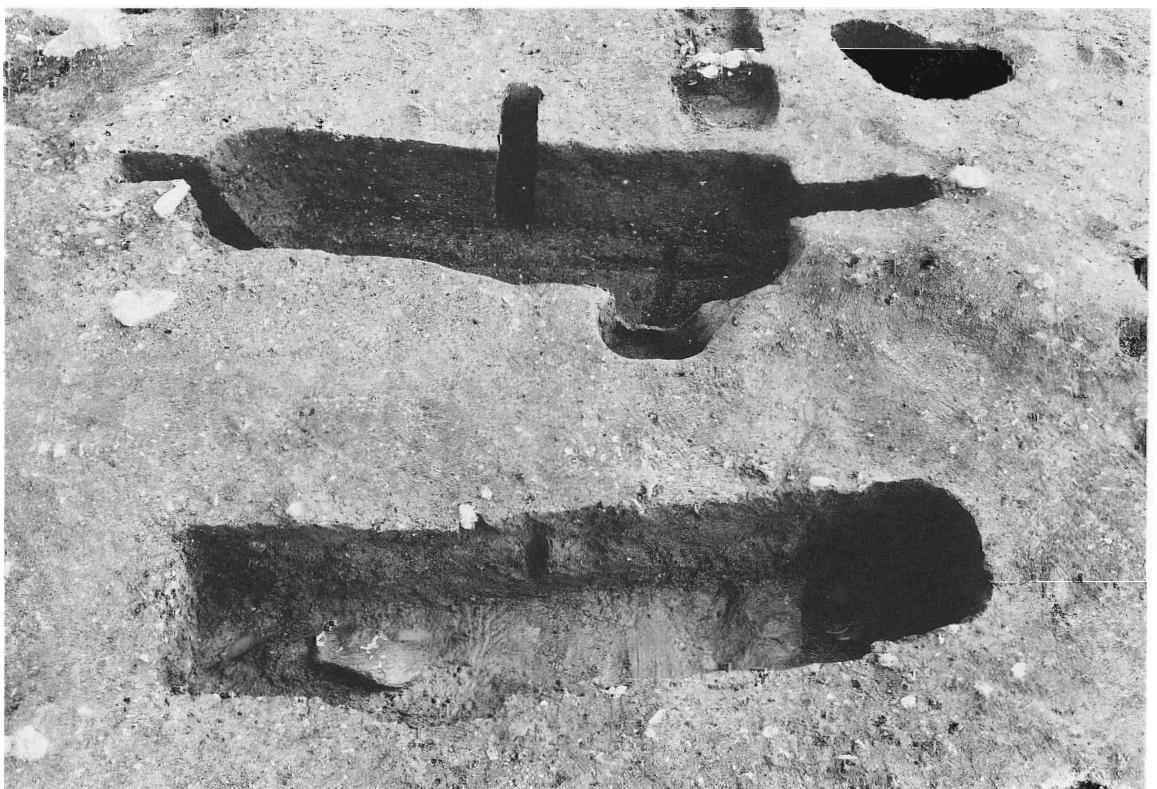
S X 0 1 北端部（南から）



S X 0 3 （南東から）



S X 0 4 (南から)



S X 0 5 (奥) • S X 0 8 (手前) (北から)

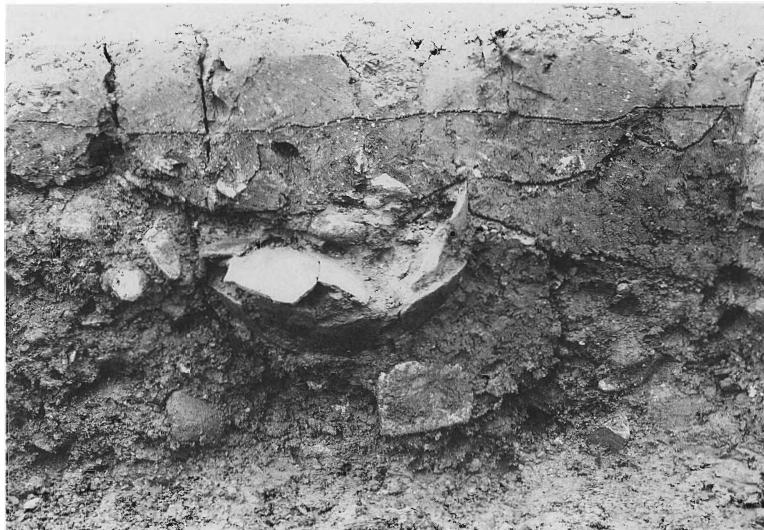
図版 8



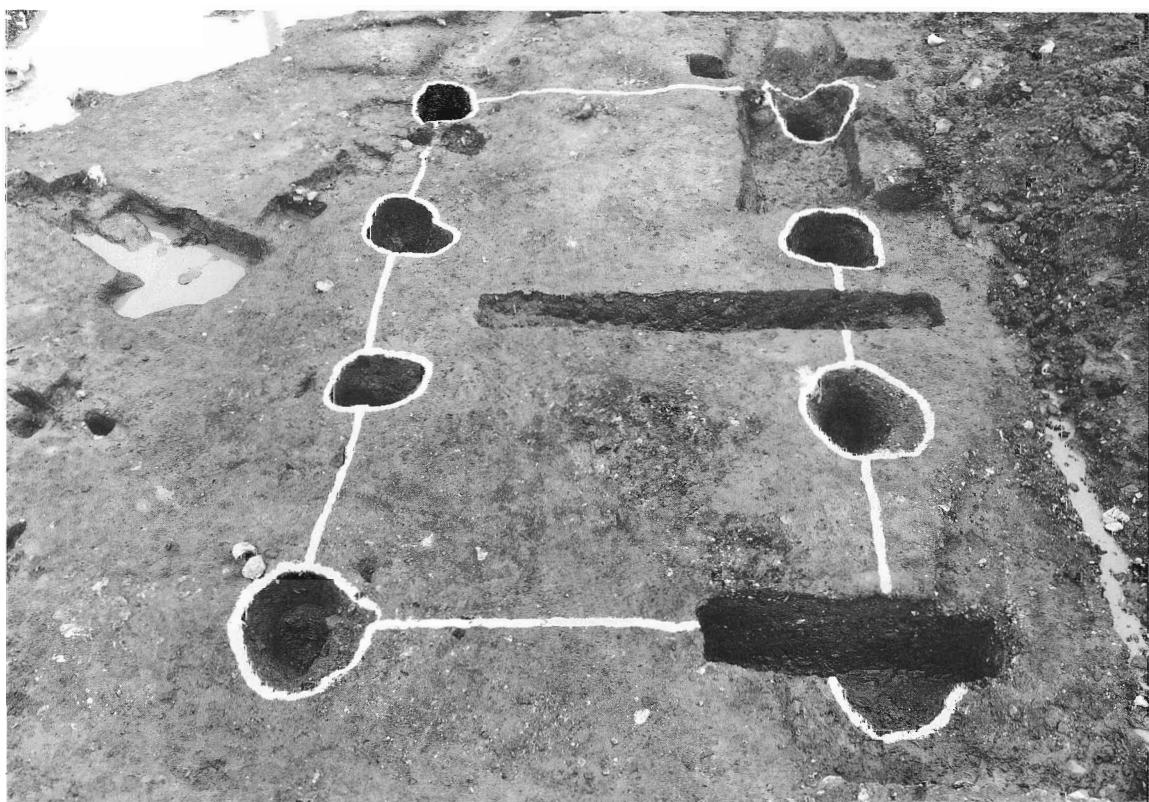
S X 0 6 (奥) • S X 0 7 (手前) (北東から)



S X 0 9 (北西から)

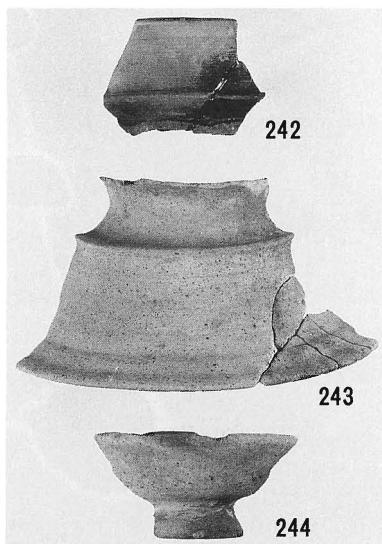
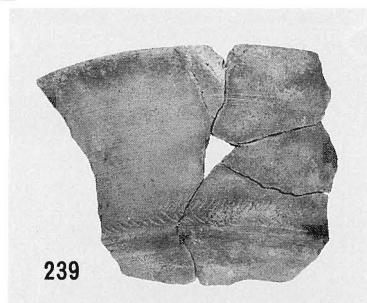
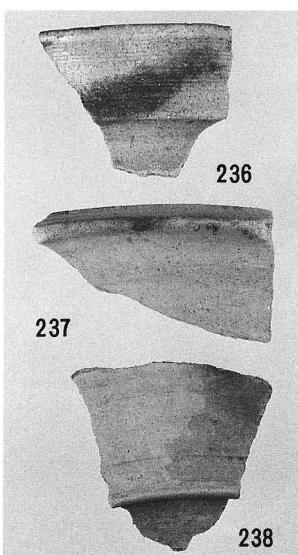
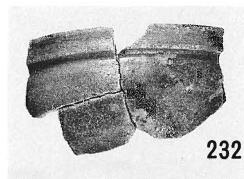
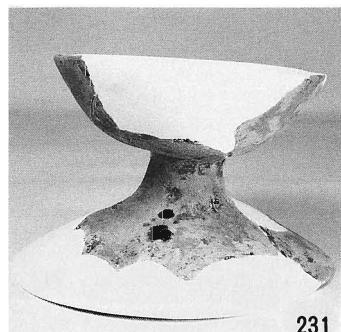
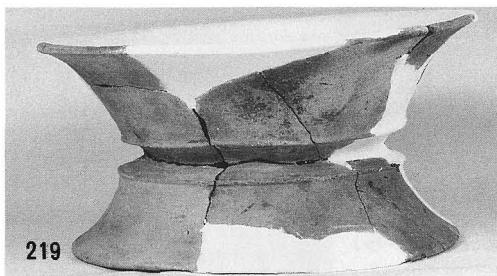
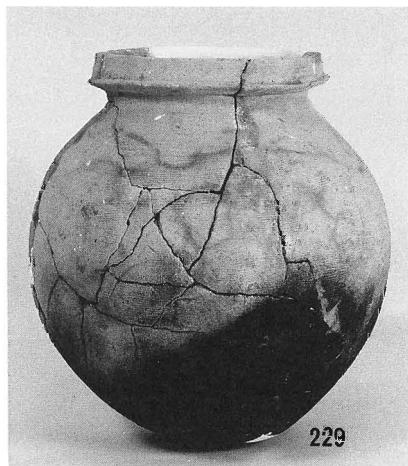
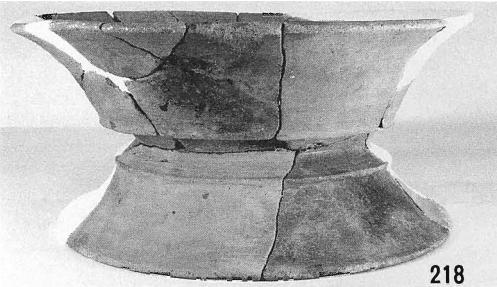


S X 10 出土状況（南東から）

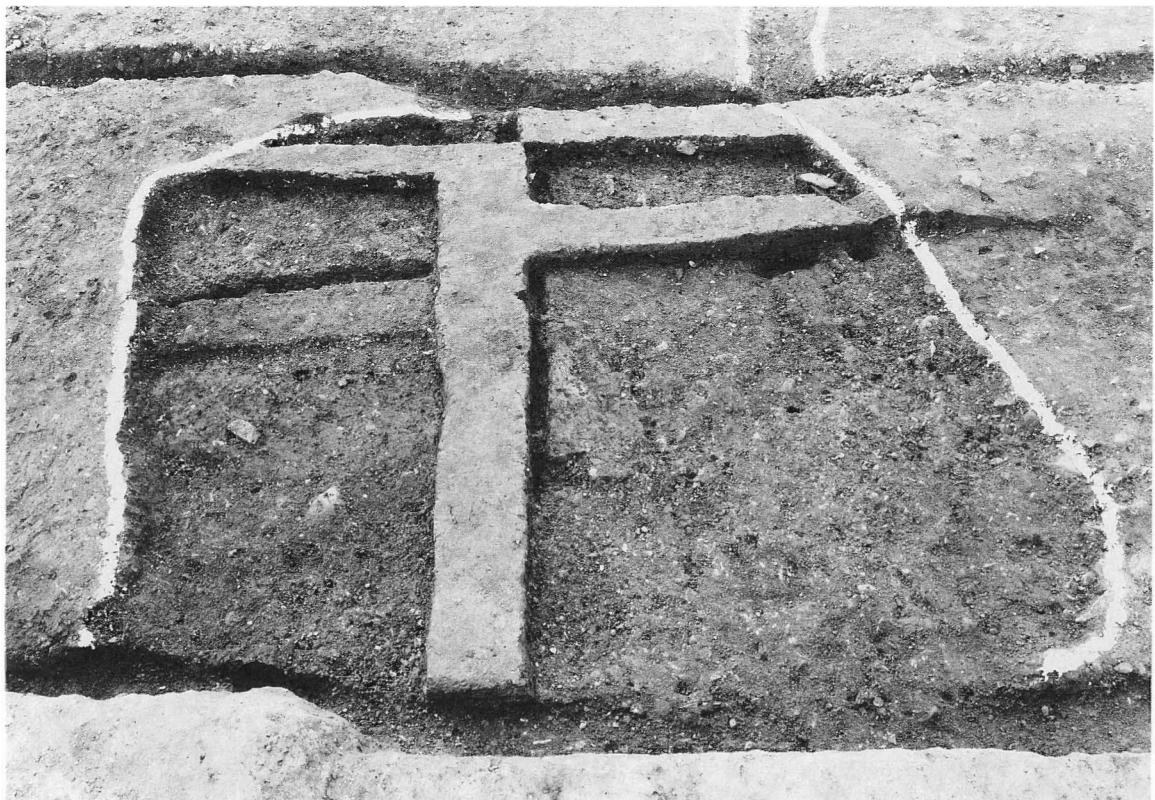


S B 0 1 (北西から)

図版 10



出土遺物 (SX03; 218・219, SX06; 229～232, SX08; 236～238, SX09, 239・240,
SB01; 242～244)



S B 0 2 (北西から)



D E - 3 区土器溜り出土状況 (南東から)

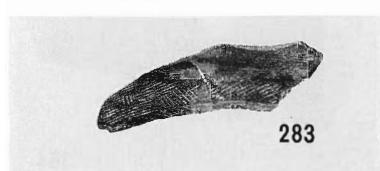
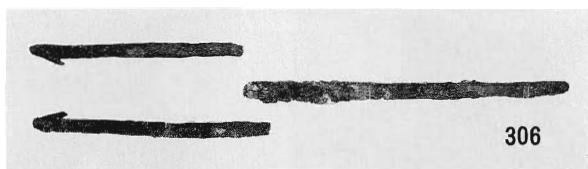
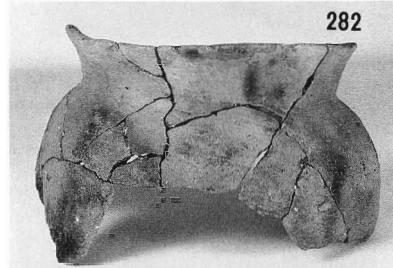
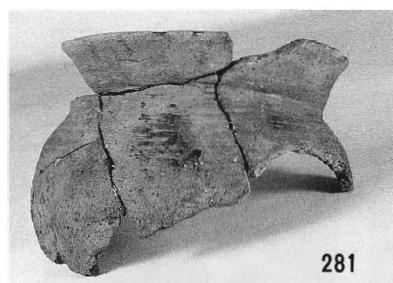
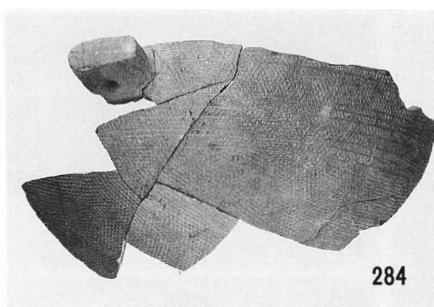
図版 12



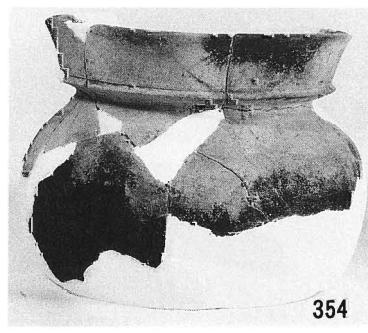
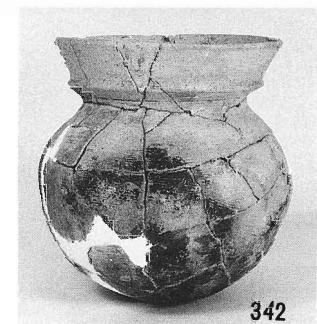
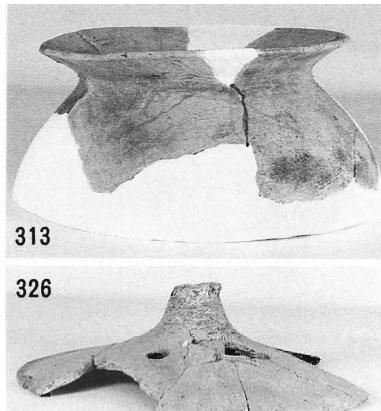
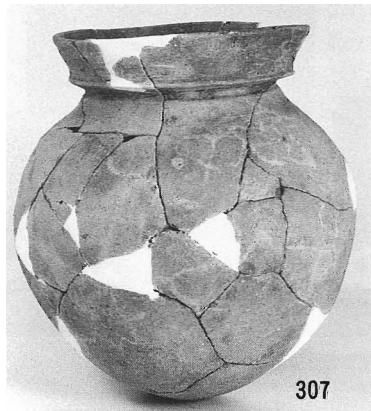
F-3区土器溜り出土状況（北西から）



E F-3区土器溜り出土状況（北東から）



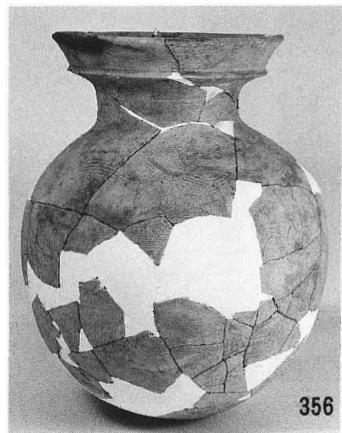
図版 14



D E - 3 区土器溜り (307 ~ 329), F - 3 区土器溜り出土遺物



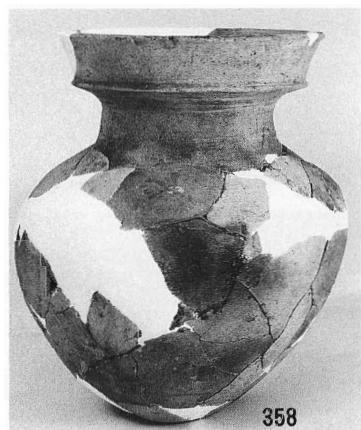
355



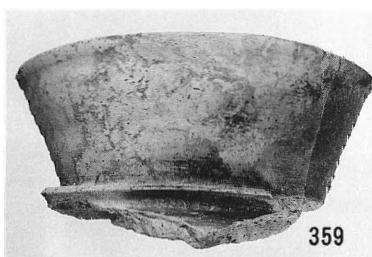
356



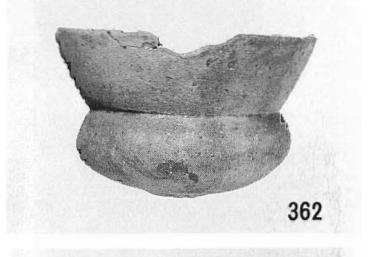
357



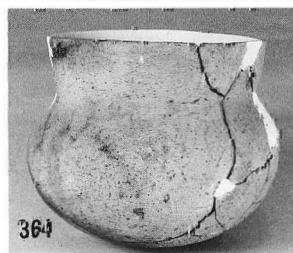
358



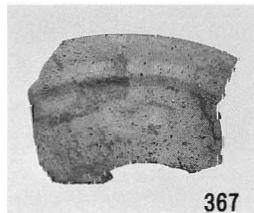
359



362



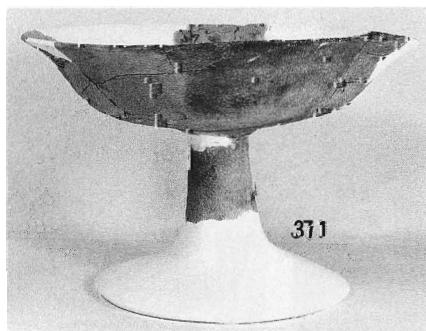
364



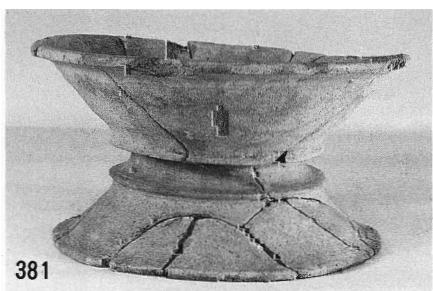
367



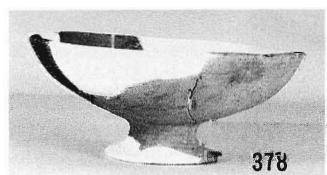
370



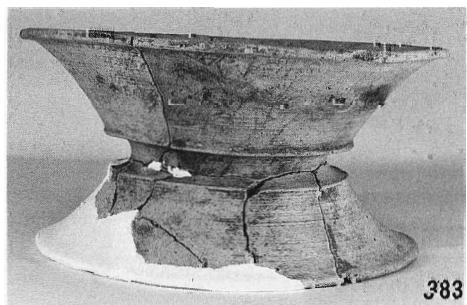
371



381

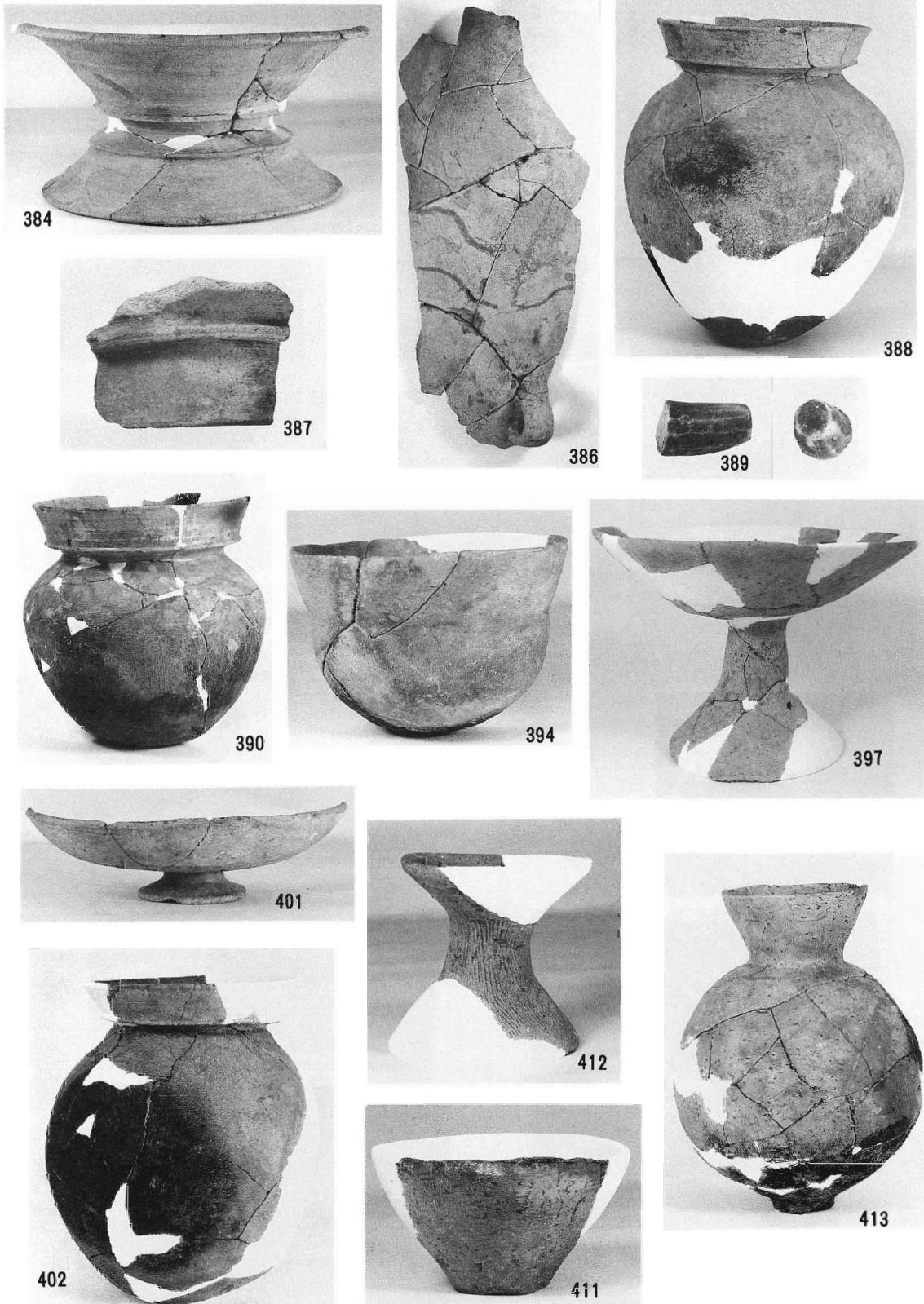


378



383

図版 16



出土遺物 (F-3; 384~387, C-3・4; 388~394, D-5; 397, EF-2; 401, EF-4; 402~412, G-6; 413)

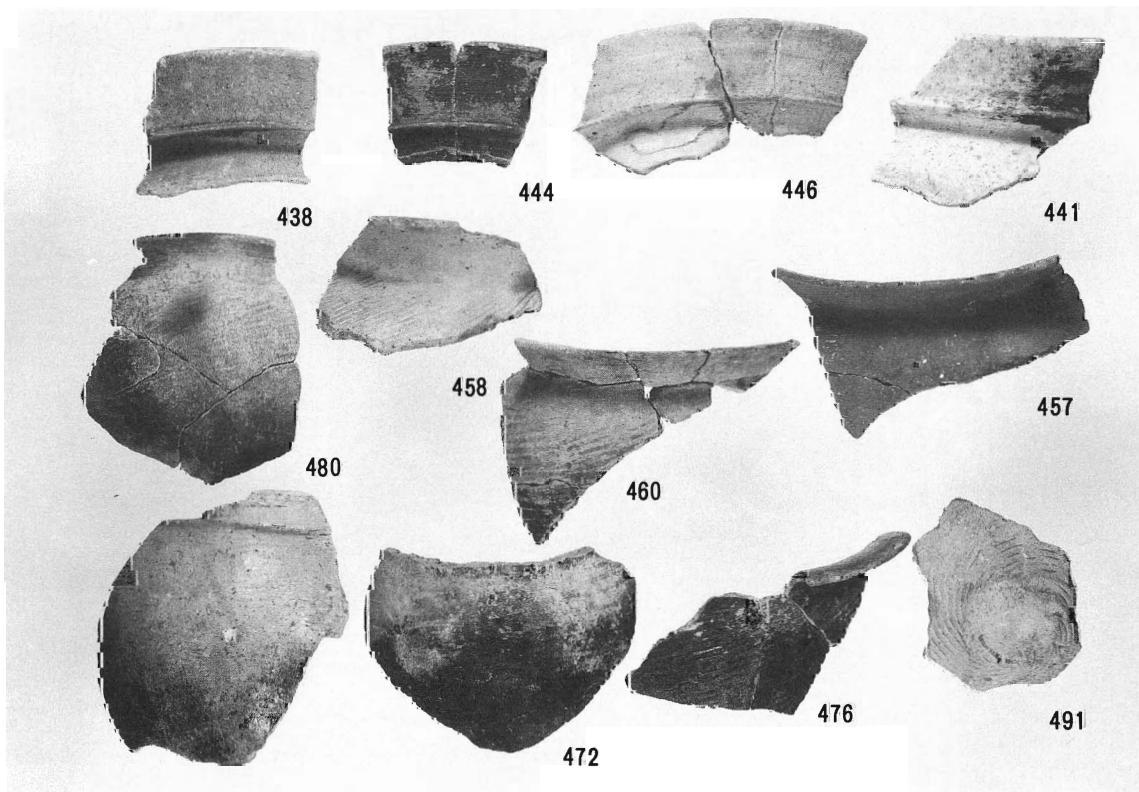
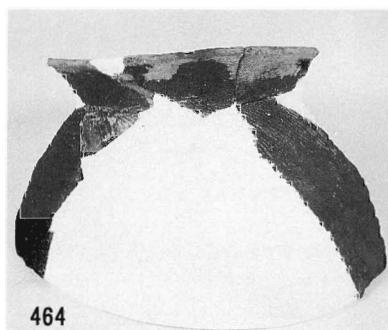
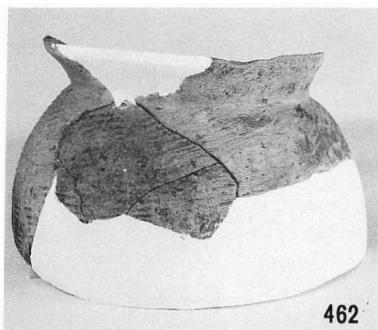
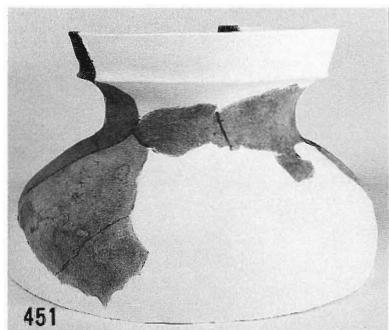


H-5 区土器溜り出土状況（南西から）



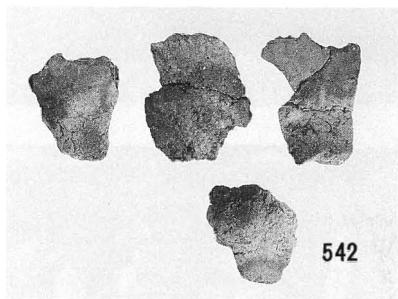
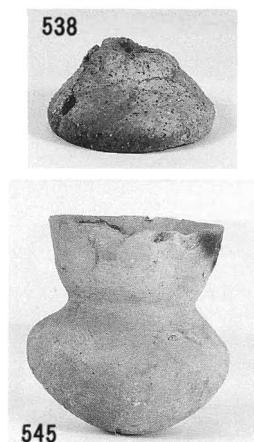
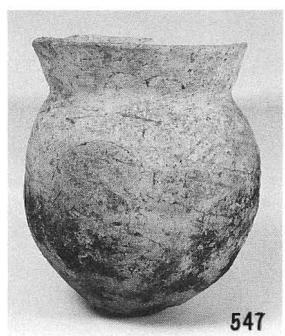
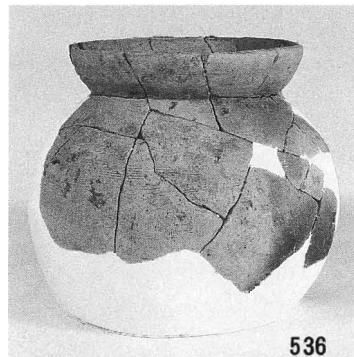
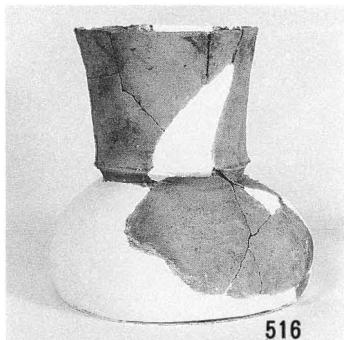
H-5 区土器溜り出土状況（北東から）

図版 18



H - 5 区土器溜り出土遺物

図版 19



D-4区上層 (515・516), その他の地点 (536~547) 出土遺物



第2調査区 (北から)

図版 20



調査風景



現地説明会



調査参加者

講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5
南講武草田遺跡

1992年3月
1997年5月増刷

発行 鹿島町教育委員会
島根県八束郡鹿島町大字佐陀本郷640-1

印刷 (有)谷口印刷
松江市母衣町89番地